

が、御奉仕中、私の上に立つ三人のお婆様方が順々に隠居されて、不束な私が、命婦の上席になりました折など、とかく控目がちな私の事とて、何かと萬事不行届のやうなことはないかとの御心盡しから、それはく御情深い御注意を賜はつたことなど、今思ひ出しても有難涙にくれる次第で御座います。

お強い御自慢

御違例は、どなた様も仰せの通り全く日露戦争の時の御苦勞が、玉體に障らせられたのが本であらうと拜察いたします。

全く彼の頃の御心勞は、實に餘所に拜するさへ勿體ない程で、

夢さめて先づこそ思へ軍人

向ひし方のたよりいかにと

戦ひの場のおとづれ如何ぞと

ねやにも入らず待ちにこそ待て

聖上のお胸の中は、夜も晝も戦争のことのみ思ひつめられ、夜中、御目醒め遊ばす時でさへ

戦争のお話ばかりで御座いました。

一體、聖上は、畏れ多いことながら、お強い自慢に渡らせられ、朝、御脈を拜するのが精で、後はお側の私共から、あ、かう、と侍醫の方に御容體を申し上げる位で御座いました。大分御疲も見えますので、高倉様が、或時、聖上へ、

『玉體の御健康は、何よりもお大事であらせられます。一度、ゆつくりとお診せ遊ばしては如何で御座いませう』

と申し上げられましたところ、聖上は、

『朕の身體は鍛へた身體ぢや。そんなに弱くはないぞ』

と仰しやつて、事もなげに笑つていらせられた程、御我慢強くまし／＼たので御座います。今少し早く御手當申し上げたならと、只今になりますと残念でたまりませんが、彼の當時には、御傍の者も國民も、何しろ御若い折から如何なる御困難にも打克たせ給うた 聖上の御元氣ゆる、必ず御本腹あそばすものと信じて居りました。然るに御運命とは申しながら、用もなき此の老婆などのいつまでも、永へて居りますことなど思ひ合はせては、来る日もく老の繰言のみ申して、盡きせぬ御名残を惜しんでゐることで御座います。



# 神ながらの明治大帝

陸軍中將 長岡外史

西に行くべき武將が……

明治三十七年二月四日の御前會議に於て、廟議は開戦に一決し、二月十日宣戰の詔勅は  
換發せられました。當時の參謀總長は大山侯爵で、次長は一月初旬内務大臣より天降つて其  
の椅子につかれた兒玉源太郎中將でありました。私は當時廣島の第九旅團長の職を奉じ、日  
夜動員令の下るのを待ち兼ねて居りましたところ、測らずも西に行くべき武將が東へ歸れと  
の命を受け、四月二十日の日より參謀本部に通ふ身と相成りました。

六月二十日大山元帥は滿洲軍總司令官を、兒玉さんは是よりさき大將に進まれ、其の總參謀  
長を拜命せられました。従つて不肖長岡が其の後任として參謀次長の榮職を汚すことに相成  
りました。

其故、私は、平和の狀態から乾坤一擲、戰爭狀態に移る大本營當時の光景は與り知ることを  
得ませんでした。次長拜命以後は、夜となく晝となく、幾十回も 大帝に拜謁する光榮を荷  
つたのでありました。

## 沈痛悲壯な御前會議

思ひ起す明治三十七年五月十四日、此の日は我が海軍の爲には泣くにも泣かれぬ一大悲惨事  
が突發しました。

即ち戰艦初瀬・八島・巡洋戰艦吉野・砲艦宮古の四隻が旅順沖で一瞬の間に撃沈された  
いふ東郷司令長官からの入電があつたからであります。是より先、露西亞の名提督マカロフ中  
將の旅順入と共に敵は八隻の潛航水雷艇を分解して、旅順に送つたと言ふ電報も到着して居り  
ました。

海軍當局は、まさかそれに爆沈されたではあるまいと言ふ判斷であつたが、とも角、六隻し  
かない戰艦の内二隻を一日に失ひ、而も其の上折角、アルゼンチンから買入れて儲け物をし  
たやうに喜んだ巡洋戰艦二隻の内一隻をも失つたのであるから、大本營の心配は一通りではあ



りません。

兎に角、陛下に申し上げねばならぬとあつて御前會議は、宮中東溜の間に開かれました。參集の人々は參謀總長山縣有朋・軍令部長伊東祐亨・總理大臣桂太郎・陸軍大臣寺内正毅・海軍大臣山本權兵衛・外務大臣小村壽太郎・大藏大臣曾根荒助の外に、軍令部次長の伊集院五郎君と參謀次長の私とであります。其の外伊藤博文・井上馨・松方正義の三元老も出席されました。

控室の空氣は如何にも沈痛で、誰も口を利くものなく、時折、山本海相が、鼓舞的に何か談の緒を開かれるが、それも何時しか消えて、元の沈黙にかへり、鉛のやうな重苦しい雰圍氣に包まれて居りました。

其の内、出御の御知らせに各々着席しました。伊東軍令部長は極めて沈痛の態度を以て、此の悲しむべき出来事を言上する口開きをなし、詳細は伊集院次長が伏奏せられました。一語一句腸を引裂かるゝ思ひ、列席のもの誰一人として顔をあげ得るものがありませんでした。

しかるに、大元帥陛下の御態度は、實に泰然自若として、少しも平生の御容子と御かはりなく、時折、いつもの如く、「ハア、ハア」と莊重なる御返事を賜はるのみでありました。

大海戦を前に控へて居る我が海軍に取り、何とも申し様のない痛手に直面して居る此の場合、陛下の御態度が斯くまでに悠揚相迫らず、御平靜にあらせられたと言ふことは、列席のものに對し、どんなに力強い感を抱かせたか分りません。

やがて岡澤侍從武官長を従へさせられ、悠然と入御遊ばされた後の會議室の空氣は、以前と全く變り、急に一條の光明を得たかの如く晴れ晴れとした明るい氣分に満たされたのでありました。

### 海軍空前の大勝利

越えて翌三十八年の五月二十八日、日本海大海戦の大勝利を伏奏するための御前會議が前同様、宮中東溜の間に開かれました。

世界初まつて以來の大海戦、而も古今未曾有の大捷利、敵のボロチノ艦以下十九隻三十七萬噸を、或は撃沈し、或は捕獲し、再び起つ能はざらしめたにも拘らず、我が艦隊には格別の損害はないといふのであるから、國民が狂喜したのも無理はありません。

宮城前の廣場には、毎日毎夜、旗行列が續き、提灯行列が行はれ、帝國萬歳の叫び聲は、



大内山になりとゞろき、老も若きも、男も女も喜び叫び、涙を流して躍り廻つておました。此の大群集の歡呼の中を縫ふやうにして参内せられたのは、前申した方々の外に、伏見第一師團長宮が大将に御昇進遊ばされて御凱旋になつた爲特に御召に相成りました。當日の控室の様子は、想像するに餘りがありません。逢ふ人々にニコ／＼して御芽出たうと互に握手し合ひました。

『葡萄酒をもつて来い』

伊藤公の言ひつけで、早くも葡萄酒が運ばれました。御年寄の顔に少しく紅が潮した頃、出御とあつて各々着席致しました。

例の如く伊東軍令部長の口開きに引續き、伊集院軍令部次長が大捷利の有様を逐一伏奏いたしました。其の電報は、聯合艦隊の参謀秋山中佐が筆を執つたといふ、所謂、舷々相摩すといふ大文章であります。伊集院君の讀み上げる一句一章肉飛び魂躍るの喜びに堪へず、満室の

空気が愉絶壯絶と申ませうか、蓋し開國以來未曾有の盛事でありました。私は前年の恰も今月、海軍大不祥事のために開かれた御前會議の記憶が、私の眼の前にありありと浮んで参りました。今日こそは御喜の天顔を拜せんものと、隣きもせずジツと拜んで



南山砲撃の参謀將校集團

町田曲江筆



居りましたが、大帝の御態度には、昨年の今月泣くにも泣かれぬ當時と少しの御變りがあり  
ません。時折いつもの莊重な御返事を賜はるのみで御座いました。  
やがて會議畢り、宮中を出て二重橋外に到れば、喜に狂ふ群集、萬歳萬歳の聲は地軸も割れ  
ん許りの騒でありました。

### 旅順開城の奏上

更に爰に申し述べて置きたいことは、旅順開城當時のことです。

明治三十八年一月一日、敵將ステッセルが開城談判を申し込んだといふ電報が、乃木將軍か  
ら大本營に到著したのは、元日の曉前でしたが、長い電報だったので、參謀總掛で翻譯した  
が、二日の午前九時迄かかりました。

私は一刻も早く陛下の御聞に達しようと、空前絶後三人引俤で參内を急ぎました。

今し大帝は、文武百官有司の朝賀を受けさせられるため、大禮服を召させ給ひ、出御の途  
中でありましたが、參謀次長の伏奏を聞き召されて、再び御引返しに成つたと承りました。  
一體拜謁の際は、御縁側の障子を開き、玉體を拜むや、最敬禮を爲し、御次の間に入り、

大帝に正對して第二の敬禮を行ひ、進んで御座所に入る時、御敷居の前で第三の敬禮をすませ  
鞠躬如として御机の前に進むのが常で御座います。然るに其の時私は、餘りの嬉しさ喜ばし  
さに、御縁側で玉體を拜するや、

『陛下!! 新年の佳節に當りまして旅順開城に關する第三軍司令官の報告を伏奏致します  
るのは長岡の感激に耐へ無い所で御座います』

と御前に進みながら申し上げたやうな氣がいたします。大帝は伏奏の一節毎に『ハーハー』  
との御返事を賜はるのみであつた。

大帝の御前には、私一人であります。誰も外には御側に侍して居りません。私は前後數十回  
拜謁を重ねて居ります。時には、地名を忘れて 大帝が御探し下さつて、

『ア、これだ〜』

と御教を賜はつたことさへもある位でありますから、それは結構であつたとか何とか御諒が  
ありさうなもの、何しろ昨年の夏以來、日本全國民が頸を長くして待ち侘びた、旅順開城の  
大吉報であります。日露戦争の局面に、一大發展を與へる事件でありますから、何とか御言葉  
を賜はることゝ信じて居りましたところ、さうでない、御心の中に御喜を包ませられ、外面



には少しも御露はし給はぬ此の 大帝の御沈着、御冷靜の御態度を拜するにつけ、私は急に恐縮して仕舞つた。

「こんな慌てもでは逆も不可」

と深く慚愧して御前を退きました。

諸君、明治大帝は右の如く、悲痛の極度に於かせられても、又喜悅の絶頂にあらせられても、平素と少しの御變りもなく、磐石の如くに泰然自若に在して、軍國、日本國民を率ゐさせ給うたのであります。

此の高く静けき御有様は、人間界を超越したる生きながらの神様で無くて何であります。喜怒哀樂、好悪を少しも外に表し給はざる尊き御心は、御修養の極度に達せられ、全く神の境に到られしことと拜察し奉り、洵に感激に堪へないのであります。

### 夏冬、ごも同じ御軍服

更に私は、大帝の御日常、御生活の一端につき御高德を偲び奉りたいと思ひます。諸君、我々下々のものでありますしても、夏の着物と冬の衣類とはちがひます。

日本國民大部分のものが、夏冬とも少くも一、二枚は持つて居ります。然るに 大帝には、夏冬とも御一枚で過ごさせ給ひました。當時の陸軍軍服はドルマン式で五つの肋骨の飾りが附いたものであります。尤も夏は白色で、肋骨はありません。然るに 大帝には非常に暑い御學問所の内に在しながら、夏の軍服は召し給はず、夏冬ともに同じ軍服で御過ごし遊ばされたのであります。

然らば、冬は如何かと申せば、上下御二間、七十餘疊の大きな御室に、御火鉢がタツタ三つしか御備へありません。長岡はイザ參内となれば、一枚重ね着をした位でありました。而して、大帝の御手袋は、夏冬ともにやはり御一ツで、所謂外縫ひで、擊劍道具の小手見た様に厚い、それを夏も冬も召されておいで、ありました。御寢所は、十五疊位の日本座敷に御寢臺が一つ据ゑられて、室内の御飾りものとても一つもありません。

御召物は白羽二重の御寢まきと御軍服きり、合計二枚しか御所持でありません。燕尾服も、フロツクコートもモーニングも御紋附の御召物もなかつたのであります。而して御外出の時は如何といふに、十一月中旬、東北地方に於ける特別大演習御統監のため行幸の節などは、時によれば雪も降り、霰も飛ぶ、雨さへ降りしきる中に、外套を御召し遊ばしたことを拜んだこ



とはありません。

いつも侍従が馬上に捧持して御供をして居るのでございました。

梅の花さけるを見れば降る雪に

ふゆごもる身の恥かしきかな

暑しとは言はれざりけり煮えかへる

みづ田に立てる賤を思へば

又御學問所には、電燈も無ければ瓦斯燈もありません。あの御廣い御座所に御蠟燭がタツタ二本あるだけで、夜分など漸く天顔を拜し得る位の薄暗さでありました。故に参内する前には私は、参謀本部の電燈を一つに減らし、伏奏書を倒にして二三遍讀んで出掛けました。玉座の下に、敷かれた白茶けたライオンの毛皮は所々毛が抜け而も一部分裂けたのを白絲で、無造作に二三分置きに縫うてありました。

以上 大帝御質素のほんの一斑を申しに過ぎませんが、いかに 大帝が質素儉約を御實行遊ばされ、範を國民、否萬世に垂れさせ給はつたかが拜察されるのであります。吾々國民は、大帝の動かさること山の如く靜かなること林の如き御高德と、御儉素の大御心を深く肝に銘じて、我が光榮ある大日本帝國をして益々盛運に赴かしむるやう努力せねばなりません。

参謀總長は老體のことだから

最後に 私は 昭憲皇太后の御聖徳について、國民に告げたいと思ふことがあります。私は、大帝に、戦況を伏奏致します都度、皇后様(昭憲皇太后)に拜謁を願ひ出で、その大要を申し上げました。皇后様が戦況の経過を御記憶に相成つて居ることは、畏れ多い事ながら驚くの外ありませんでした。

たしか明治三十八年二月二十八日のことと記憶して居りますが、非常に雪の降つた日に、拜謁を願ひ出でましたところ、

『雪は豊年の御徴と言ふから、いつもならば、雪を眺めて楽しむところ、遠く滿洲の荒野にある將卒の寒氣に惱むのを思へば其の氣にもなれず、朝より障子を閉して士卒の身上を思うてゐたところ、次長から委細の報告を聞いて安心致した、参謀總長は老體のことであるから、軍國多事の折柄、一層大切にするやう、次長も氣を附けて貰ひたい』との御詔を賜はりました。



退出後、早速、御沙汰を總長に申し述べたところ、總長は、起立再拜して承り、感激し  
『自分も今朝窓外の景色を見て一首作つた』  
と有り合せの絹に、

静かなる窓の雪にも北支那の

あら野のふぶき思ひこそやれ

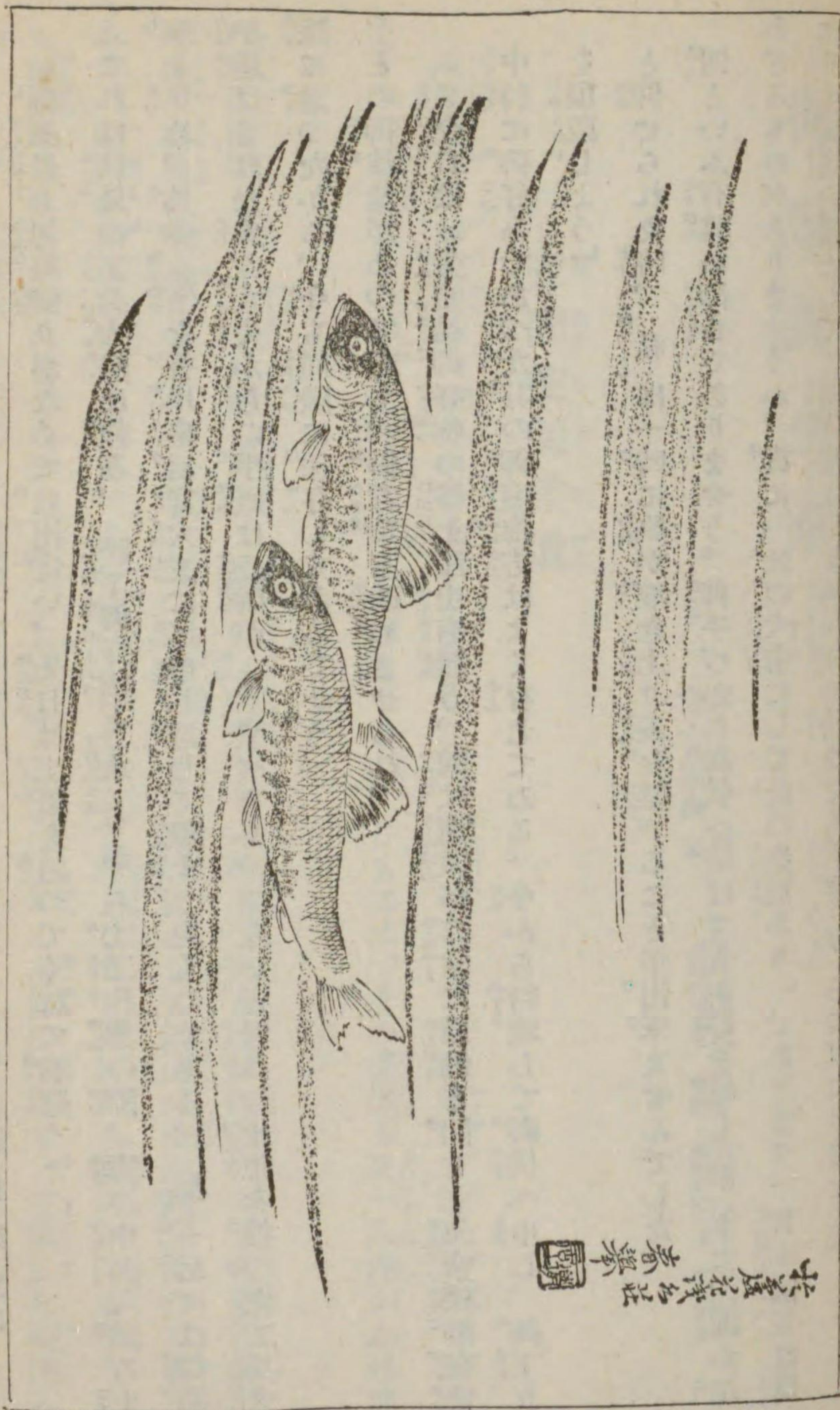
と書せられました、實に君臣の至情は、全く符節を合はするが如くではありませんか。

御躬ら御靈の御前に

大正二年三月二十九日、其の頃、私は京都の師團長を奉職して居りました。

神去りまし、大帝の御好物の由の鯉を沼津御駐輦中の昭憲皇太后に献上いたしました。

妙なことを申すやうであります、鯉は、高價のものではないが生きたまゝ輸送いたすには、  
中々苦心を要するもので、大津で求めて、大きな盥の中に入れ、普通列車に乗せて各驛々に前  
ぶれし、驛毎に新しい水を入替へる。而も番人が始終盥を動かし水を揺つて居らねば死んで  
仕舞ふと言ふ程であります。



大正二年三月二十九日  
老筆

筆舉春元山

皇産湖琵琶の好嗜御帝大治明



沼津御用邸に伺ひますと早速拜謁仰せつけられました、皇太后には、玉音御爽かに

「師團長も何等變りがなくて目出度い、先日は土筆を送つてくれて有難う」

（これは伏見の工兵大隊に頼み、陛下御好物と承るから土工作業の際、雪の中から出る土筆を集め、其の趣を香川皇后宮大夫に迄申し越して献上したものである。皇太后には御嘉納遊ばされた由の大夫からの手紙は長岡が私すべきものでないと考へ、土筆を掘つた工兵大隊に送つたから、今も同隊に保存してあるでせう）

との御沙汰があつてのち、御言葉を改めさせられ、

「又今日は 先帝様御好物の鯉を澤山有難う、鯉は運搬が非常に面倒と聞く 先帝様御在世中特に御好みであつた其の御鹽梅方はよく存じてゐる。今から料理して御供へ申し、御下りを頂戴しよう」

と仰せられた時、私は一時に胸が堰き上り涙を禁ずることが出来ませんでした。

何といふ有難い御心でありませう。御手づから御供へ遊ばす大御心を推し奉りて、誰か泣かざるものがありませうか。實に「此の大帝にして此の皇后あり」であります。日本國民は眞に日本婦道の鑑として 昭憲皇太后を萬々年の後までも仰ぎ奉らねばなりません。

### 御愛馬金華山

元侍從 宮中顧問官 日根野要吉郎

### 慰問使御差遣

先帝陛下の御懿徳は、今更申し上げるまでもなく、脈々として千古に輝いて居る次第であります、身親しく陛下に御仕へ申し上げました私どもには、その感激も又一入深いわけであります。

私は侍從と申す役柄の關係上、世に偶々突發する大椿事、たとへば福岡のガス爆發とか、櫻島・鳥島の噴火といふやうな事の起つた場合、よく慰問使として派遣の命を拜したのであります。慰問使派遣と申しますと、まづ侍臣からその事を奏上して、それから勅命が降るやうにも拜察せられるか知れませぬが、陛下に於かせられては全く左様の事なく、下萬民を御憐み給ふ 陛下の大御心の御發露から直接の御下命であつたのであります。鳥島噴火の時など「直



ぐに行け』といふ仰せで、私はその有難い大御心に全く感激恐懼しまして、取るものも取敢へず、出發したことであります。私が視察を遂げて歸つて参りますと、陛下に咫尺して委曲復命申し上げるのでありますが、誠に畏れ多い事には、陛下にはいかにも御待兼ねの御様子で『どうであつたか』と仰せられて、私の申し上げます事を一々御熱心に御耳を傾けさせられる御様子など、ひたすら民草の上を御軫念遊ばされる大御心が察せられて、おのづから襟を正さないでは居られなかつたのであります。陛下には更に根掘り葉掘り御質しになりました、もう大概この程度でよからうかと拜察してゐますと、どうして時には二時間三時間に亙つて『それからどうした』『さうしてどうなつた』と言ふ風に、それからそれへと御尋ねになります。而して慘状そのまゝを申し上げますと、『それはひどい事であつたなう』と言ふやうな極めて御同情のこもつた御言葉を御漏しになります。これをそのまゝ遺族達に聞かせたら、どれ程有難く天恩に感泣する事であらうと、限りない御仁徳のほどに、ひそかに感激し奉つて居つた次第であります。鳥島の慘状で、ある一家の残らず斃れた有様を申し上げました時など、『それは洵に可哀さうのことであつた』と仰せられて、御目をうるほはせ給ふ御氣色を、拜しました私は、思はず胸が迫つて熱い涙を拭うたやうな次第で、洵に畏れ多いことであります。

## 御相手仕う奉りて

大帝が御乗馬に御熱心であらせられ、随つて馬術にかけては玄人を凌ぐまでに御巧妙であらせられたことは、普く知られてゐる御事蹟であります。實際、陛下に咫尺し奉つて、親しくその御熱心な御様子を拜しますと、洵に恐懼に堪へないものがあつたのであります。

私は明治五年から御乗馬の御相手を申し上げましたが、その頃の陛下はまだ御若くて御元氣も御旺で在らせられたとは申せ、御相手を申し上げる私共でさへ時には堪へられないやうな苦しい場合もありましたが、陛下は更に御疲れの御様子もなく、寒風膚を劈く嚴冬の日も厭はせられず、また三伏の炎熱金を熔かすといふ酷暑の日も物とは遊ばされず、毎日々々午後三時から夕景まで御續けになりました。酷暑の日などは御召物がまるで水から引揚げたやうに、御汗でしとつても、一向御心に止め給はせられないで、構はず御稽古を遊ばすといふ御有様には、たゞたゞ恐れ入る外はありません。やがてそれと御氣附になると馬場の中なるさゝやかなお茶屋のやうなところで御召替遊ばされますが、もうそれで今日は御取止めかと拜しみると、また御元氣を新たに御乗馬遊ばすといふ御熱心さで在らせられるには、私どもまで、



これではならぬと、思はず奮ひ起つ次第でありました。後になつて、段々御肥満遊ばされるやうになりましたからは、御乗馬の度も少くなりましたが、時には、皇后陛下に御乗馬を御すゝめ遊ばされたり、女官達にも乗馬を御させになつて、それを御興深く御覽になるのが常でありました。それほど御乗馬には特別の御趣味が在らせられたのであります。

御愛馬は仙臺産で、純日本種の「金華山」でありましたが、この馬がまた珍らしく落着いた馬で、陛下が御乗馬遊ばされる場合は、どんな時でもちつと四つを踏んだまゝ微動だもしない。それで、陛下がこの馬に御乗りになる時は、陛下に對して敬禮をしたと言ふやうなことが言はれて居りますが、實際それと思はれるまでに、よく陛下の大御心を拜察して、忠實に御仕へ申し上げました。馬ながらも陛下の宏大な御仁慈の御徳に浴して、いちらしく御仕へ申し上げてゐる有様を見ると、思はず感激して涙ぐましくなるほどでありました。

陛下がまたこの良馬をいかに御愛撫あらせられたかと言ふ事は、死後剝製として今尚主馬寮にありし日の面影をそのまゝに形を遺してあることによつても窺はれるのであります。これも陛下の御懿徳の御一端と稱し奉る次第であります。

牧畜の御奨勵

宮中顧問官 新山莊輔

下總牧場

私は、明治十八年、宮内省から歐羅巴に於ける牧畜の視察研究を命ぜられ、明治二十一年歸朝以來、大正十一年に至る迄、實に三十有七年の間、下總の三里塚・岩手縣の外山・北海道の新冠、この三つの御料牧場に關係して來たものである。随つて、馬匹奨勵は勿論、一般牧畜について、明治大帝が、いかに御宸念あらせられたかといふことは、略ぼ窺ひ知る所である。今その一端を述べて、聖徳の程を仰ぎ奉らうと思ふ。

のる駒の手綱かいくりかへるさにかへりみすれば月ぞいでたる足なみのかはるを見ればのる人の



こゝろを早くこまはしるらむ  
畏れながら 明治大帝ほど、馬を愛し給ひ、馬を理解し給うた方は、古今の帝王中、多くあるまいと思ふ。

併しながら 大帝が、馬が御好きであつたといふことは、今はもう誰も拜承してゐる所であるが、それは、決して世間で所謂御娯樂、御道樂などいふ意味ではなく、實に深くして遠き御考へによることは、私の信じて疑はざる所である。

一體、御料牧場の最も代表的である下總の牧場は、もと下總飼畜場と申して、明治八年、大久保内務卿時代に、三里塚の原野三千五百餘町歩を利用して、政府が牛・馬・羊の三種の飼養を始めたのが、そもぐの起源である。

これといふのも、明治初年に於て我が國は、政治は勿論、社會各般の方面に改善を圖つたが其の中に牧畜業の如きは、諸外國に對して著しく遜色があつたので、政府に於ても大いに此の點に留意し、先づ牧場を政府の手でつくり、斯道に堪能なる米國人を雇ひ入れ、或は歐米から種馬を仕入れなどして、良種の繁殖を圖ると共に、牧畜に要する人材を養成し、よつて以て當時微々として振はざる斯の事業を進歩向上させたいといふ趣意に外ならぬのである。

處が爾來十年の後——明治十八年に至つて、牧場の經營が、内務省から宮内省に移管され、同時に私は前述の如く洋行を命ぜられた。さうして歸京と同時に、牧場長を拜命したのである。

### 國家有事の際

何が故に内務省所管の牧場の移管が行はれたか、其の間の事情ははつきりとは分らぬが、思ふに明治の十年代にあつては、帝國政府としては、實に多事多忙の時であつたので、勢ひ牧畜方面までは手が出ない。従つて牧場の經營も十分には伸展しない。——此の状態を御覽になつた 大帝は、牧畜業が、或は國家有事の際、或は産業方面、或は食糧方面から見て、いかに緊要 忽ちすべからざるかを御痛感遊ばされた結果、遂に政府の手より、宮内省に移さしめて、帝室の御力を以て此の國家的事業の興隆を圖らうと遊ばされたものと拜察されるのである。

其の當時、御料牧場を設けられた趣意目的を伺ふのに、  
『此の牧場は、決して帝室の御娯樂のために設置せられたものではない。實に我が國の牧畜の發達に貢獻し、その向上を促進せしめられんがためである』



とあるのによつても、將た牧場に關する事は、大小となく御親裁遊ばされたといふことによつても、十分に窺ひ奉ることが出来ると思ふ。

されば私共は、此の深き聖旨を奉體し、我が國最初の牧場建設の爲に微力を致したものであるが、かうして飼育した牛・馬・羊は、毎年若干づつ民間に拂下げて、良種の繁殖に資し、又一方には經營それ自體が民間の模範になるやうに努めたことである。

自給自足

猶牧畜業は、事業其の者が經濟的のものであるから、少くとも民間の模範たるには、經濟も亦模範でなければならぬ。宮内省の補助を仰いではならぬといふので、所員の俸給・飼料等迄も、或は牛馬の拂下げにより、或は自ら耕作することによつて、自給自足するやうに致した。これがためには非常な困難な場合もあつたが、とにかく、「牧場經營の模範たれ」といふ聖旨に副ひ奉るべく一同協力した結果、私の在職中は、格別宮内省の御厄介にもならずやり通すことが出来た。

此の大御心、即ち良種の拂下げ、模範的牧場の經營、牧畜に於ける人材の養成といふことが素となつて、我が國今日の牧畜業の盛況が生れ出でたものと、私は固く信じて疑はぬものである。

大帝がいかに牧場のことに、御心をかけさせられたかといふことにつき、左に、一二の例を述べよう。

前述の如く、牧場に關しては、事大小となく御親裁になり、種馬の名前なども悉く御承知遊ばされ、生れた子のこと迄もよく御存じであらせられた。

東京から十七里

毎年侍従を牧場へ御差遣になるは勿論、汽車の開通せぬ頃、東京から十七里もある下總の牧場まで、御乗馬で行幸、親しく状況を御視察遊ばされたことも、二回ばかりあつた。その御熱心のほど、拜察するに餘りあるではないか。

私は先に、大帝の御思召は單に馬のみに限らない。凡ての牧畜業を促進せしめることにあらせられたと申したが、それに想ひ起すことは、日露戰爭中、某大官が大連あたりから、滿洲豚を持參して献上されたことがあつた。多分お慰みにと言ふのであつたらう。處が大帝は、



これを親しく御覽の上、

「この豚を繁殖させて見よ」

と仰せられて、下總の牧場へ御廻しになった。数は六頭。

その姿を見た丈で

私達、牧場のものは、西洋種の見事に太つた豚を見慣れて居る。其の眼から観ると、御廻しの豚はいかにも見すばらしく、野獸のやうで、甚だ恐れ入つたことではあるが、實はその姿を見ただけで、これから一生懸命に力を入れて、大いに繁殖させて見ようなどといふ氣は起らなかった。

「つまらぬものだが、折角、献上したものであるから、下總へでもやつて見よ」との御思召に違ひないなどと、勝手な理窟をつけて、あまり手もかけずに、とにかく飼つて置いた。すると其の内に、六頭の中二頭が病氣で死んでしまつた。併し別段惜しいとも思はなかつた。

その年も暮れて、翌年になつた。侍従が牧場に見えられた。私共は、いつもの通りの御差遣と存じてお迎へしたところ、

「今日は、昨年御下げになつた豚の様子を見て參れとの御思召を蒙つて態々參つた」  
との御言葉。

冷評を加へる

私は少からず恐縮致した。が、ありのまゝ、滿洲豚の西洋豚に比べて貧弱なこと、繁殖の價値なきこと、二頭が死亡したことなどを申し上げた。今から考へると、滿洲豚に對して可なり冷評を加へたやうに思ふ。侍従は、委細の状況を視察されて歸られた。

暫らく經つと、侍従職から復御使が見えた。

「前に視察した状況、それから貴下の意見も残らず申し上げたところ、陛下の仰せになるには、

「二頭も死んだり、發育もよくない所を見ると下總の牧場は、滿洲豚の飼育に適しないのかも知れぬ。どこか他所へやつて飼はして見てはどうか」

とのこと。貴下の御考はいかゞ」

かういふ御言葉である。茲に至つては私も、眞に恐懼措く所を知らない。これ程までに豚



の飼育について、御心にかけてさせられるとは、つゆ存ぜず、簡單に考へて取扱方にも留意しなかつたことは何とも申し譯のない次第、謹んで自分の至らぬ點を御詫び申し上げて、『今後、私も一生懸命やつて見ますから、今暫らく御留置を願ひます』とお答へ致した。

滿洲式

それから種々と飼育上のことを研究したが、嘗て私がシベリヤ鐵道通過の際、滿洲豚が到る處に放牧されてあつたことを想うて、爾來、一室の中に入れて置くことをせず、全く滿洲式に放牧して見た。所がそれがよかつたものか、二箇年ばかりの間に、初め四頭のもが段々と繁殖して、百頭に餘るやうになつた。

大帝は、この様子を、時折御差遣の侍従より聞き召されて、非常に御満足遊ばされたといふことであつた。又暫らくすると、

『滿洲豚と在來の豚と、どつちがうまいか、牧場で比較して見よ』との御沙汰があつた。そこで試食會をやつて見た。滿洲豚は成程肉量こそ少ないが、在來の

西洋豚に比べて、脂が少く、一寸鶏肉のやうな味がして、遙に甘い。そこで此の由を侍従職を経て申し上げたところ、

『それなら肉をこちらへよこせ』

と重ねての御沙汰、早速、つぶして差出したが、これは、側近の人々や要路の大官に、それぞれ御分け遊ばされた由に洩れ承つてゐる。

御靴をお造り

又或時には「皮をなめして出せ」との御詫もあつたが、この革皮で御靴をお造り遊ばされ、常に御居間に置かせられたと申すことである。

滿洲豚にかくまで御心をかけさせ給うたのは、畢竟、滿洲豚の飼育が、若し我が國に適するならば、産業上、殊に農家の副業として最も適當であらうとの御思召によること、拜察される。然るに私共の淺慮から、この深き大御心のほども辨へず、洵に恐縮に堪へぬことであつた。

殊に、牧場では、豚が繁殖して費用がかさむであらうからとの厚き思召で、御手許金をさへ



下されたに至つては、何とも申し上げやうもない畏い極みである。

### 人材の養成

下總の牧場は、牧畜事業に従事する人材の養成が、一つの任務であつたから、常に十人乃至十五人の、農學校其他の學校出身者が實習のために參つて居つた。是等の人は、一二年間の實習を終ると、或は縣の技師となり、或は、個人で牧場を経営する等、この事業のために貢獻する所、頗る著しきものがあつた。

馬匹の御奨勵について申せば——御在世中數千圓、或は數萬圓を投じて、外國の名馬を御購入になつたことも屢々あつた。又、フランス大統領、ドイツ及びトルコの帝室から名馬を贈呈されたこともある。殊にトルコは、同國の汽船ノルマントン號が沈没した時、非常に我が國の世話になつたといふので、帝室から名馬二頭を 明治大帝に献上されたのであつた。

### 名馬と言ふ名馬は

そこで若し 大帝が單なる御趣味の上から馬をお好みになつたものならば、是等お買求めや

寄贈の名馬を、必ず御手許に留めさせられて、朝夕、御愛遊ばされたことゝ存するが、名馬といふ名馬は、悉く牧場へ御下げになり、良種の繁殖に資せられたことを思へば、そこに御深意の存し給うたことを拜察するに足るではないか。

宮城内にも、御馬車の馬、御乗用の馬、合せて二百頭位はあつたが、其の中で、氣分がよいとか、藝が出来るとか言ふものは、五六年御使用の上、民間の組合、又は縣廳に御下賜になり、其の種の馬の繁殖方を地方地方に應じて御奨勵になつた。

勸業博覽會に、馬が出品されると、其の都度御買上げ遊ばされては御奨勵になつたが、殊に私の感激したのは、勸業博覽會が大阪に開かれた時、大帝は、京都に御駐輦になつて臨幸遊ばされたが、例の如く馬の御買上げがあつた。

私は馬匹の審査官をしてゐた關係上、二三の同僚と選定の任に當り、一等賞・二等賞邊のもの五六頭を豫選して申し上げると、更に、

『其の他に各縣のを一頭づつ買上げよ』

との御沙汰であつた。この御言葉を拜察すれば、大帝が如何に馬匹の奨勵に御心を寄せさせ給うたかを、十分に窺ひ奉ることが出来ると思ふ。





御製 荒駒を馳らしが櫻の遠邊野にらてがし

案一本洋筆

### 格段の相違

私は日露戦役後、御思召により主馬頭藤波（言忠）子爵と共に、馬政調査のため、再び英・佛・獨・墺の諸國を視察した。これは畢竟、戦役中の實験によつて、彼等の馬匹に格段の相違のあることが分つたので、何とかして一層向上の途を講ぜねばならぬとの歡慮によることであつた。丁度一年半ばかりかゝつて調査を終り、藤波子爵から委細奏上致された。然るに其の後暫らくして、

「日本で馬政局をつくるとしたら、どうすればよいか、至急その方を調査せよ」との御詔が下つた。で、私共四五人のものは大急ぎで調査にかゝつたが、何分にも創設の事であり、調査の範圍も廣いので、約五ヶ月を要し、主としてフランス・ロシヤの組織を参考として、漸く案を作り上げ、御手許に差上げることが出来た。

### 馬政局

處が暫らくして——確か宮中御陪食の折と承つて居るが、伊藤公・松方公等に向はせられ、



「我が國は馬産が各國に比して著しく遅れてゐるやうだ。政府でも大に力を入れてやらねばならぬ。若しやるとすれば、朕の手許に案があるから、それを遣つてもよい』との仰せに、兩公始め恐れ入つて、早速御案の御下賜を願ひ出された。後來、馬政局では、それを御下賜案と呼んでゐた。即ち先に私共が命を奉じて御手許に差出したものを、大帝が一層深く御研究の上、御下げになつたものである。

こゝに於て政府は、會根（荒助）子爵を委員長とする馬政委員會を組織し、御下賜案を原案として審重討議の結果、遂に馬政局の成立を見るに至つた。今日日本の馬が、各國に比して著しき遜色を見ない迄になつたといふのは、蓋し馬政局の力、與つて多きに居ると謂はねばならぬ。

その馬政局と言ひ、御料牧場と言ひ、皆大帝の思召より出でたことを思ふ時、どうして、單なる御慰みと拜することが出来ようか、國家的必要——國防上の見地から生れ出でた尊き聖旨に外ならぬのである。

御先見の明

然らば牛豚羊など畜牧の御奨勵は如何と申すに、これは全く、産業上、經濟上の御見地によるものと拜察される。

大帝は常に、

『農の本をなすものは牧畜である』

と仰せになつたと承つて居る。今日、食糧問題がやかましくなるにつれ、牧畜の事も大分問題とされてゐるが、大帝には、とうの昔、それに就いて深き御理解と御研究があらせられたことを思へば、今更ながら御先見の明に服し奉らねばならぬ。

由來、馬といふものは、農家の經濟からいふと到底牛には及ばない。それゆゑに何等かの方法を以て、これを奨勵するのでなくては、自然衰退を免れぬものである。大帝が、以上申し述べた如く、いろ／＼と馬匹に就いて大御心を注がせられたのは、畢竟この點に深く且遠き叡慮を及ぼされた結果に外ならぬと拜察し、私共、馬に關係深きものは勿論、國民としても洵に感佩に堪へない所である。

御在世中、御料牧場の最も盛大な時には、下總の牧場には、馬二百五十頭、牛二百頭、羊千頭、岩手の外山には、馬二百五十頭、北海道新冠には馬八百頭も居つた。たゞ斯の如く我が



國馬匹の改良上に非常の效績を擧げ、而も御案までも賜はつた馬政局が、經費の關係上廢止されたことは遺憾であるが、併しその事業は今日農林省の一課馬産課として存續されてゐる。何分我が國の馬匹は、各國に比しては、まだ大いに優るといふ程度までには行つて居らぬのであるから、當局は勿論、國民一般に於ても、大帝の聖徳を偲び奉ると共に、益々馬匹の發達と馬政の興隆とに就いて、もつと眞劍にならねばならぬと思ふ。

\* \* \* \* \*

蛇沼牧場

岩手縣縣社香稻荷神社社司

小保内樺之助

明治九年七月十日車駕は岩手縣二戸郡浪打峠を越えさせ給ひて福岡町村井旅館に憩はせ給ふ。その時特に羊牧者蛇沼政恒氏を召さる。蛇沼氏は御優詔に感激し、飼羊の細羊と手織の毛布を天覽に供した。大帝には岩倉右大臣を通じて、緬羊の飼養方につき種々御下問あらせられ、その上、「牧羊は方今の急務なり。自今忠實業に従事せよ」の有難き勅詔を賜ひ、金若干を御下賜遊ばされた。それよ、政恒氏は専心牧羊開墾の事業に心血を注ぎ、今日まで五十年、大帝の御優詔を思ひ出しては奮闘をつゞけて居る。

森嚴神の如くに

海軍大將 有馬良橘

不肖が、明治大帝に親しく咫尺し奉る光榮を荷うたのは、乏しきを侍從武官の榮職に奉じた明治二十九年十二月からのことであつた。

神の如くに御在します御聖徳の數多き中に、特に自分の感激に堪へなかつたことは、いかにも、大帝が嚴正なる御人格に涉らせられ、日々の御生活が洵に御規律正しくましましたことである。毎日午前十時の出御の御時刻は少しの御違ひもなく、正しく御守り遊ばされ、必ず御座所に於て政務を見そなはし給はつた。

我々は毎日侍從と共に伺候してお次の控室に於て御用を御待ちした。やがて天皇が御机に向はせらるゝや、徳大寺侍從長は當日奏上すべき重要書類を持つて御前に罷り出づるのが常であつた。複雑した問題のある場合などには、午後一時頃までも御熱心に御研究遊ばされ、時に



は威嚴に富ませ給ふ御高らかな議論の御聲が我々の控室まで漏れ聞える事さへあつた。  
一旦御晝食のため入御、再び出御の上政務を御とり遊ばされ、いかなる嚴寒酷暑の際と雖も此の國家のための御仕事を休ませ給ふことなど露ほどもなく、たとへ入御の御時刻である午後五時前に其の日の政務は御片附に相成るやうな場合にも、御規定の御時刻前に入御遊ばされるやうなことは決して拜されなかつた。  
御座所の位置は、西が塞がつてゐるため光線の工合悪しく、午後五時頃になると、御部屋の中は暗かつた。蠟燭の燈の下にて御一人、國家のため、國民のため、御つくし遊ばさるゝ大帝の御姿は神の如くに森嚴に拜し奉つた。  
畏き 大帝の御徳を自分の如き小さな人間の心を以て推し奉ることは僭越の極みであるが、御盛徳を偲ぶの餘り一言した次第である。

明治天皇

内田良平

末の世の末となりし末の世を

また弊國となし、天皇

### 雨は龍顔を傳うて

樞密顧問官 田健治郎

明治二十二年十一月

明治二十二年十一月、埼玉縣下に於て、近衛師團の演習が行はれた。明治大帝は之が御統監として同縣下へ行幸遊ばされ、當時、私は埼玉縣警部部長として、終始御警衛の任に當るの光榮を有した。

然るに演習が開始されると間もなく、俄に、豪雨が沛然として至つた。將卒の困難は申すまでもない、路はぬかる、寒さは加はる、みなぐしよぬれになつて仕舞つた。

大帝に於かせられては、この急雨の中を道といはず畔といはず、終日御勇ましく御馬を進ませられた。外套は御召しになつたが、御頭巾は御冠りにならなかつた爲、雨は御帽子から御顔に傳はり、畏くも龍顔しとゞに濡れさせ給うた。併し 大帝はつゆ厭はせ給ふ御氣色もな



く、凜然として御統監遊ばさるゝのであつた。その御英姿を仰ぎ奉りては、誰か感動せぬものがある。

かくてその日の演習は、好結果に終り、やがて行在所なる浦和の町の郡役所に還幸仰出された。郡役所は、其の頃新築したばかりであつたが、この行在所の階上で演習の講評が開始されるといふので、百數十名近くの將校が集つた。さて長靴の中へ入つた雨水が自然に流れ出て、階上は水を流したやうになつて、終には天井裏にまで沁み出る程であつたのみならず、私は跡で服を脱ぐと下着は丸で水にはまつた如くであつた。畏れ多い事であるが、陛下におかせられても、御同様であつたらうと拜察せらるゝ。斯うした雨の中で御外套の頭巾をも召されず、長時間、馬上にあらせられて、大元帥の御姿を明らかにし給ひ、士氣を鼓舞遊ばされし大御心、唯々恐懼に堪へぬ次第であつた。

「鵬程日記」の光榮

私が、嘗て遞信省に奉職中、ハンガリーのブダペストに開かれた萬國電信會議に帝國代表として参列したことがあつた。會議が終つてから、歐洲各國を視察して歸朝したが、その時、

御沙汰によつて拜講仰付けられた。

御前を拜辭して退出しようとする侍従が、

「視察中、特に各國帝室から御厚遇を蒙つた事があるならば、その國名、その状況等を書面に認めて差出すやうに」

との御内命を傳へられた。

「實は視察中、「オーストリア」「ルーマニア」「トルコ」等の各帝室から非常なる御優遇を蒙つた其の状況は日記中に詳細に認めて御座います。近日中整理の上、出版致す考へで居ります。それを御手許に献上したいと存じます」

とお答へし、其の日記は、「鵬程日記」と題し、印刷の上で謹んで進獻し、乙夜の覽に供し奉つたことであつた。

これは、大帝が國交上について常に御軫念遊ばされ、外國使臣來朝の際など、如何に待遇すべきかといふことの御參考に遊ばさるゝ爲と拜察し奉る。此の如く萬事につき、御周到にわたらせられた大御心のほどは、畏れ多いことではあるが、我々凡人の企及すべからざる所であつて、今更ながら御偉大さを沁々と感ずる次第である。



急所を突いた御下問

明治三十年のこと、時の松方内閣は、行政整理の結果、大隈外相の發議で、臺灣總督の武官制を改めて文官制にすることに閣議は決定し、當時、大帝は京都に行幸あらせられたので、總理大臣松方公は、京都行在所まで伺候し、これが御裁可を仰がれた。すると大帝は仰せられた。

『臺灣總督を武官にするか、文官にするかと言ふことについては、支那から讓與を受けた當時、臺灣事務局に於て大分問題となり、總裁の伊藤も困りきつて結局勅裁に依り武官と定まつたものである。その邊の諒解はついてゐるか、どうか？』

松方總理大臣は、恐縮して、

『いづれ取り調べまして申し上げます』

と御前を拜辭した。

臺灣事務局は、明治二十八年臺灣割讓を受けた際、臺灣統治上の根本方策から、百般の事項を調査し、我が國最初の植民地の施設をして、萬遺漏なからしめんとしたものであつて、總裁

は伊藤公、副總裁は川上操六將軍、委員は關係官廳から伊東巳代治伯・田尻稻次郎子・原敬氏・山本權兵衛伯等であつた。私も其の委員の一人であつたが、總督は武官にするといふ原案が提出された。

ところが、先づこれに反對を唱へたのが、伊東巳代治伯、甲論乙駁、容易に決せなかつた。

川上將軍は飽くまで武官論を主張し互に相下らず、流石の伊藤公も、

『これは大事の問題であるから、是非私に一任して呉れ』

といひ出した。すると伊東巳代治伯は、

『小事だから任せよといふなら議論が立つが、大事だから任せよとは理窟に合はない』

といふわけで、又々議論が沸騰した。結局、伊藤公から勅裁を仰ぐことにして、武官制度が

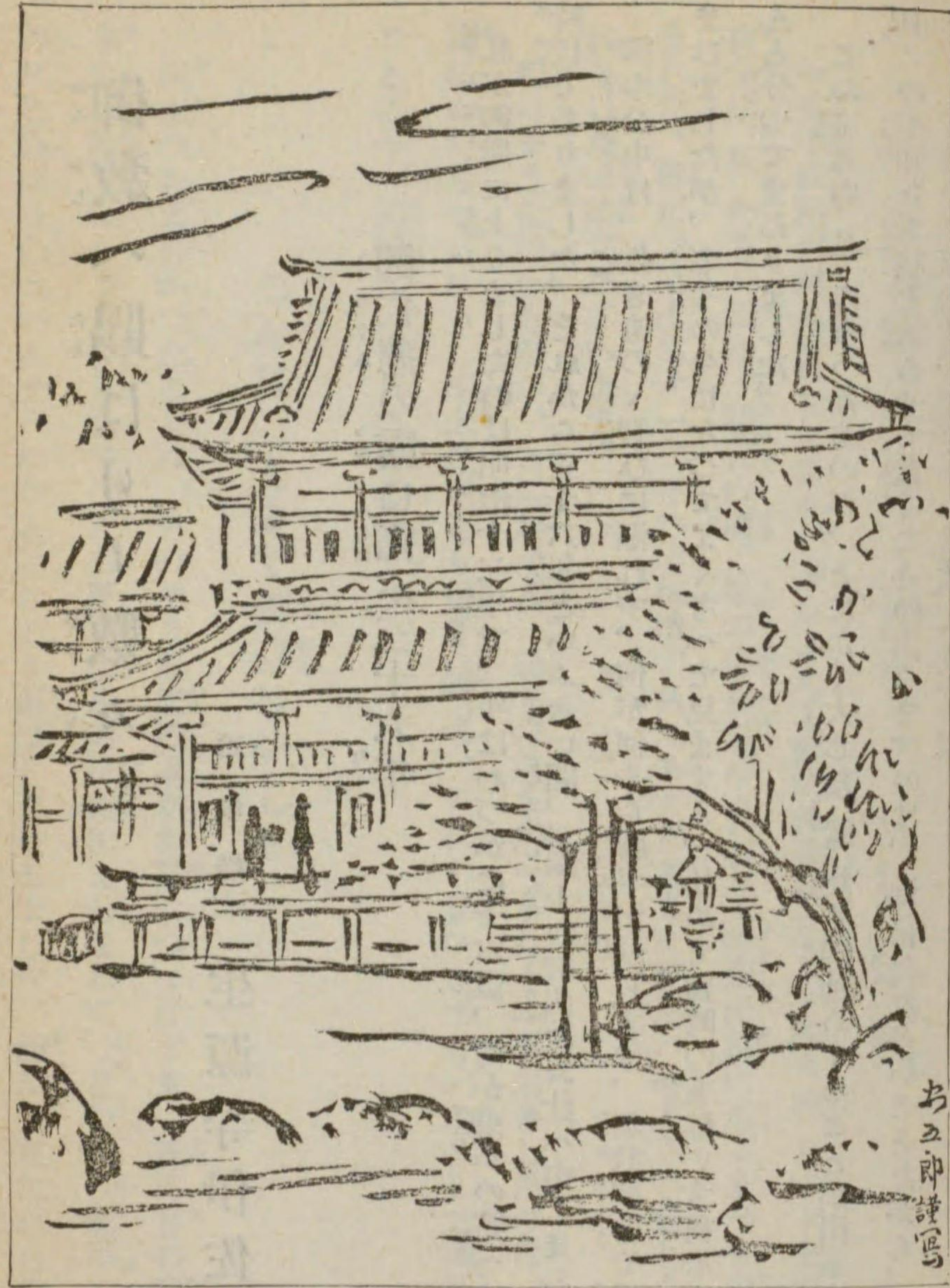
定まつたのである。

大帝は、其の間の事情を御承知遊ばされてゐたので、松方首相に對して、前述の御下問を

賜はつたことと拜察する。

天子様だけに敵はぬ





座御すら拘に中床假御日十三月十年三十二治明・賜下語勅育教  
 るさ賜下し召を正顯川芳相文、朋有縣山相首の時、て於に所  
 筆郎五安宅安

嘗て伊藤公は、私にこんな述懐をされた事があつた。

「余は維新以來、國事に關係して來たため、國事の經歷に通曉した事については誰にも負けぬ積りであるが、唯、天子様だけには敵はなほ」

と、蓋し伊藤公は世人の周知の如く、維新以來國事につくされた元勳である。さりながら、或は遠く海外に遊んだこともある。或は野處して休養した場合もある。然るに、大日に於かれは、大日本帝國を双肩に荷はせ給ひ、宵衣旰食、一日たりとも御政務から御離れ遊ばしたことはなかつた。これ即ち、一代の大政治家伊藤公をして、

「天子様には敵はない」

との言あらしめた所以である。

明治昭代、四十五年間の國運の伸長は一に此の如き、神ながらの御乾徳の賜と仰ぎ奉る次第である。

ロンドンタイムス曰く――

願ふに世界史上、大帝ほど艱難を嘗めさせられたる君主は尠い。又、大帝ほど之に耐へ、常に成功せられたる君主は無いであらう。大帝は實に大時世に於ける大帝王にして、その御名は永遠に人類史上に輝くであらう。



御教へ賜はりし數々

元命婦 生源寺伊佐雄

御仁慈の露に霑ふ三十六年

私が御所に上りましたのは明治十二年で、年はわづかに十六歳、西か東かの辨へさへもない時代でありました。それから三十六年といふ永い間、聖上の御側にお仕へ申しました。御奉公中は、拙きもの、習ひに漏れず、何が何やら勝手に分らずに、無我夢中で過ごしてしまひましたが、老年の今になつてよく考へて見ますと、始めて當時の有難い大御心が、だんだんと分つてまゐりました。

この至らぬ私のやうなものが、とにかく大した過なく御勤めすることが出来まして、今日この平和な老後を送らせて戴くことの出来ますのは、洵に畏れ多いことながら、偏にこれ、聖上の御仁慈な御熱心な御教への有難い賜に外ならぬのでございます。

御教へ賜はりし數々

一日中政務に御携はりになり、するぶんと御疲れ遊ばさるゝにも拘らず、そのかたはら、夜分は私たちの爲に、讀書の道、歌の道を初めとして、佛蘭西語に至るまでも御教授下されました。殊に、明治二十二年の頃には、私たち女官どもに乗馬の術をさへ親しく御教へ下されました次第でございます。

私のやうな拙いものが、とにかく一人通りの道を辨へることの出来ましたのは、全く允文允武にわたらせられる聖上のいとも畏き賜で、それを思ひますと、かうして御話申し上げることさへも勿體ないやうに存じます。

こんなことまで御存じかしら

聖上のおえらかつたことは、どのやうな雄辯家がお話しつゞけても、迎も言ひ盡くす事は出来な程であらうと存じます。どんな事にも御堪能にしまして、どのやうな事でも、これを御存じ遊ばさぬといふやうなことはおあり遊ばしませんでした。洵に生きながらの神様であら



せられたことを、つくぐと拜し奉りました。

『誰が何をした』

『誰々の性質はどうである』

といふやうな事は、丁度、鏡にうつした姿のやうにはつきりと御承知であらせられました。それ故、聖上の御前にあつては、何人でも、萬一の場合、聊か心をつゝみ隠さうと力めるやうなことがあつても、到底隠しおほせることは出来なかつたらうと存じます。

『畏れ多いことながら、まアこんなことまでも御存じかしら』

と思はれることも屢々ございました。

### 大御心のつくづくし

日露戦争中のごことで御座いましたが、私は、昭憲皇太后様の御供をいたしまして、沼津の御用邸に参つて居りました。

或日、聖上の御許に御贈り遊ばしになる土筆を摘つて参るやうにとの御下命がございましたので、私たちが二三人は、畏れたふとみ、早速近くの野原に出て参りましたが、だんぐと摘む

ほどに、行く程に、いつのまにやら私たちは、ま淋しい山の中へ迷ひ入つてしまひました。

道を訪ねようにも人かげだに見えず、眉を擧めて困じ果て、居りましたところ、程遠からぬ

谷間の方に、ひとつの藁葺の家が見つかりました。しかし檐は傾き屋根は朽ちかけ、見るから

に惨ましい感じで御座いました。

薄暗い土間の隅には、年の頃二十一二かと思はれる若い女が、生れて間もない赤ん坊を背負

つて、荐りに藁を打つて居りましたが、斯くと告げると親切に道順を教へてくれました。

『でもよく分るかしら』

若い母親の教へてくれたのは誠に詳しくございましたが、尙も口々に斯う心案しながら、門口まで参りますと、お背戸の小さな畑には、腰の曲つたお年寄が、多分若い母親のお父さんでございましたらう、せつせと耕作して居りました。

そこで私たちは、再び老人から教へていただき、道をはつきりたしかめた後に、申しました。

『お年を召してもよく御精が出ますね』  
すると老人は、



「この年になりまして、まだ鉄をとりましますのも、皆お國の爲で御座います。悴は今度の戰爭に出征で参りました。私はこの嫁女を相手にかうして留守を致して居ります。唯々朝夕神や佛に祈願をこめて、天子様のおために十二分に働いて、出来ることなら無事に凱旋するやうにと、そのみ念じて居ります。彼女の背中の赤ん坊ですか、あれは悴の出征した後を生れた初孫でして、悴の小さい時にそつくりです」

と答へましたのを聞きまして、私たちは胸の中が一杯になつて來るのでございました。そして暫らくの間はちつとして顔見合はせて立ちつくすより外ありませんでした。

十六歳の時から宮仕へして、お米をとるのにどんな苦勞をするものかといふことさへ碌々知らなかつた私は、御國のために、かうして盡くして下さる人々もあるのだといふことを、その時初めて目の前に知つて、こみ上げてくる涙をとどめることが出来ませんでした。いまだに其の時の事を忘れることが出来ません。

私たちは斯くも無智なるに、聖上には、此等農夫の辛勞の程まで、すべて十分に知りぬいておいで遊ばしましたことは、當時の御製に、

子等はみな戰の場に出ではて、

翁やひとり山田守るらむ

とお詠み遊ばしたのを拜してもわかりますので、洵に畏れ多く、一入感慨深うされるのでございまして。

日頃雲のお上にましましてながら、しかもかく民草の上になで遍く御考へが御ゆきわたり、大御惠の情をかけさせ給ふ大御心、あゝ何といふ際涯の知れぬ御宸襟の表れでございませう。

この大君の大御心の畏さにこそ遠い、滿洲の野の涯、五體も凍る冬の夜寒にも、出征の人は、家を忘れ身を忘れて唯大君の御爲と一心不亂に奮ひ戦つたのでございませう。思へば思ふ程、聖上の御仁徳の高さも仰がれて、うたゝ感涙に咽ばずには居られませんでした。

暫しはこんな感想に耽つて、ものも言はず黙つて立つてゐましたが、やがて老人にも若い母親にも、御製の御思召を御含め申して、いろゝと慰め合ひ、その場を立ち去つたことであります。

御寝ならぬこともいくそたびぞ



實際、日清・日露の戦争の折、士卒の身の上を御案じ遊ばされたことは、申すも畏れ多い程で、その御軫念は非常なものでありました。御格子の時間になられましてからも、御寢遊ばされなかつたことは屢々でありました。平時とても、その通りで、つい私たちがうっかりしてゐて知らずじまひに終るやうな場合、たとへば、眞夜中のかすかな半鐘の音などにも、すぐと御耳に留めさせられ、御目を御さまし遊ばされて、

『火事ぢや、様子を見て参れ』

との御言葉が下り、侍従の方が詳細取調べて、御復奏申し上げ、火の鎮まつたといふ報告を、御聴き遊ばされぬうちは、決して御寢にならなかつた程でございます。

この他、各地の洪水、大火などの場合には、必ず侍従の方を御差遣になり、その状況の詳しく調査を御命じ遊ばされ、

『年寄り供は嘸かし困つて居ることであらうな』

と、御涙さへ浮べさせられて、御愍みの大御言葉を下し給ふのであります。

かうした大御言葉を、常に拜してゐます 私たちには、その時、その日の有難い大御心が、

いつも胸の底に沁み渡るのを覚えるのでございました。

### 今日は競争ぢや

これも土筆に關するお話で御座いますが、是非申し述べて置きたいことでございます。或時のこと、私たち七八名のものが、濱御殿に土筆を摘みに参りました。これもやはり御誕があつたからなのでございます。其の折、

『今日は競争ぢや、一番多く摘つて来たものには、褒美を取らせる』

聖上の此の忝い御仰せに、私たちは、勇み立つて、終日春光を浴びながら、楽しく摘りつくしたことが御座いました。

さて、『競争ぢや』との仰せがあると、摘ること、摘ること、中には命がけで、まるで根つきの泥のまゝのものをも構はずに、摘りつくして、竹長持を一杯にして持ち戻つたものもございました。

あの時、その泥つきの土筆を御高覽遊ばされて、聖上には、一入の御興があらせられましたことも、私、今も目に見えるやうで、洵に有難い、楽しい思出の一つでございます。



私たちは、かうした忝い仰せを蒙つては、時折濱離宮や新宿御苑へと参りました。その當時は、何も辨へずに居りましたが、後になりまして、これこそ 聖上が、私たちの健康なり身の上なりを大御心にかけておられるので、深い厚い御情と分りまして、どこまでお優しい大御心かなと、御教諭の程を恐察し奉つては、唯々有難涙に掻きくれたのでございました。御承知の通り、私たち、御所の中に朝夕を生活したものは、勢ひ外の空気が日光に浴する機会が、思ふやうには御座いませぬ。それを御氣遣ひになり、

『今日は競争ちや』

『澤山摘つたものには、褒美をとらせる』

此の御奨励の大御言葉がかかるのでございまして、これによつて私たち女官どもにも戸外の運動に努めさせ給うたのでございます。何といふ洪大無邊の有難い御思召では御座いませぬか。

響き渡る大御言葉

聖上の御威厳に満ちさせ給ひ、玉音のいかにも御重々しくなりましたことは、申すも畏れ多いことで御座いますが、いまだに私の忘れ得ぬことは、明治二十二年紀元節の當日行はれま



憲法發布式

和田英作筆



した、憲法御發布の勅語で御座います。

曠古の大典に集ひ奉つた多くの人々の端から端まで、廣き式場の隅から隅まで響き渡りました大御言葉を承りまして、嘸かし日本國中津々浦々、野末山奥までも、大御言葉が、大御心が、響きわたり、ゆきわたつたことゝ存じ上げ、何とも申しやうが御座いませんでした。

憲法發布ノ勅語

(明治二十二年二月十一日)

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス

惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威徳ト竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ

朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎順シ相與ニ和衷協同シ益々我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

國交上の御軫念

宮中顧問官 吉田 要作

○

明治天皇が、内政に關して常に深甚の御注意を拂はれたことは、今茲に申し述べるまでもないことであるが、陛下にはまた、これと同様に、外國關係即ち國交親善のために御心を注がせ給ふこと厚く、これについても、今思ひ起すだに畏れ多い程の御努力を召されたやうに拜察された。いや御努力といふよりは、むしろ天縱の御器量と申し上げた方が適當であらう。

例へば、毎年の觀櫻・觀菊會に際し外國使臣を招待された時、又は國際關係上の事で、外國使臣に謁見を賜ふといふやうな時にも、はるかに拜するに、二十有餘の外國使臣に對して、一人一人に謁見を賜ひ、而もその一人毎に、厚い御言葉を賜はり、その國の模様、その國王の健康、その國政の事情、はてはその使臣の日常など、各人各様に、實に適切なる御會話を遊ば



される。さうしていづれの使臣に對しても、衷心御親しみある御態度を以て對せられたのであつた。随つて外國使臣達も、みな異常の喜びに満ちつゝ御前を退出するやうに見受けられた。

—その間一時間半、乃至二時間、御相手は變るが、陛下はたゞ御一人であらせられる。畏れ多いことながら、定めし御疲勞遊ばされしこと、仰ぎ見るに、陛下には依然端然たる御態度で、いさゝか御疲勞の御様子も見せ給はぬのである。實にかくの如き御精力の絶倫と、圓通無礙の聖徳とは、侍臣をはじめ外國使臣一同の驚異であつた。

私も、職務上、外國の皇帝に謁見したが、我が明治天皇が外國使臣に謁を賜ふ御態度は實に御立派なものでした。

それについて思ひ出される一つの挿話がある。

それは、明治十三年のこと、イタリー皇帝の從弟にわたらせられるジェノア公が、日本を御訪問になつたことがある。當時、その接伴長は故鍋島直大侯で、私は、外務省からの接伴員であつたが、イタリー皇帝から、明治天皇にアンノンシャードと言ふ勳章を御贈進の御使命を持たせられ其の捧呈式を行はせられたのであつた。此の勳章はイタリーで最高の勳章で、これを贈られたものは、イタリー皇帝の從兄弟になると言ふ規定があるので、捧呈の儀式として、特に接吻すると言ふ習慣になつてゐた。

併し、今日なら大して奇異にも感じまいが、まだ明治も十三年の頃接吻などと言ふことは、

どうかと思はれたので、私は、一應ジェノア公に、その接吻の禮なるものを伺つて見た。すると、『キツスと言つても、たゞそのカタチをするだけのことであるから』といふ事であつたので、兎も角も陛下に、前以て御伺ひしておかなければと、係の者から御伺ひすると、陛下には、『差支ない』と言ふ仰せ、ホツと安心して、さてその捧呈の儀式になつた。が侍臣をはじめ接伴員一同も、慣れない儀式なので、ひそかに氣遣ひ申し上げてゐたが、その儀式に於ける陛下の御態度の御立派にあらせられたこと、侍臣一同たゞ々感激恐懼するばかりであつた。

「帝王自有眞」といふ語があるが、我が明治天皇の如きは、正しくそれでいらせられた。如何なる時、如何なる場合にでも正々堂々として大道を行く、といふやうな御態度は、どうしても偉大なる帝王としての天授の御徳量でいらせられた。固より凡人の及ぶ所ではない。



奉頌

『王宮なほかつ道踏み得べし』  
金冠紫袍の聖者の言葉。  
東にあれます 明治天皇  
われを咎めよ』の大御言。

あゝ鳶とんで天にいたり  
豈弟の君かくしてぞ  
かくして東海波のこなた  
影のみかすかとどめたる  
光芒ひとしく四方を射て  
中、一流の名を得たり。

允文允武 百代の  
仰ぎまつるも尊しや、

西なる\*大帝ローマの昔  
二千の春秋はなれて遠く  
『民罪あらば天津神

土井 晩 翠

淵には魚の躍る見る、  
明治の御代を統べたまふ。  
世界の地圖におぼろげの  
ピグミイの邦 旭日にめざめ  
燦爛として列強の

鑑——今よりふり返り  
霜に傲らん白菊の

西の都に渴仰の  
月雪花のそれぞれに

盛りもよしや明治節  
桃山の陵 とこしへに、  
流るる風の香は絶えず。  
帝領やがて一億の  
大和島根の岸よする  
偉靈とこしへ憑るところ  
言葉によらず靈により  
高き御心あたくみて  
民政つねに尊皇の  
理想四民の 幸を  
愛と平和の光にて  
明治天皇 在天の

民数へんも遠からじ、  
あら波あらび狂ふとも  
人あに長く迷はんや。  
いまし昔 憐みの  
つくせ未来のわかき子ら。  
大義に叶ひ、平等の  
自由の聲を高め行き  
内と外とを照すとき、  
靈は ほゝゑみましますん。

\*ローマの聖人皇帝マーカス・オーレリアス



財政上の御軫念

前内閣總理大臣 高橋是清

有難き御優詔

明治四十年の九月であつた。日露戦争後、戦争中の公債と借換への爲、自分は、米國及歐羅巴へ派遣された。その際、阪谷藏相に導かれて、大帝に拜謁を賜はつた。

「外債募集については、第一回より引續き、御苦勞であつた、此の度の事は更に困難のやうにも聞及んで居るが、成功するやうに力を致せ」

有難き御詔を拜し、且御紋章入巻繪の手文庫を拜領した。自分が、特に拜謁仰付かつて天顔に咫尺したのは、此の時が始めてである。

戦時中の外債募集は、日本への同情もあり、人氣も立つてゐた爲に、多額の募債が出来た。だが、此の度の借款に至つては、戦時中と異り歐米人の日本公債に對する興味も薄くなり其の

他種々の事情の結果、一層困難の状態に置かれてゐた爲、斯の如き御言葉があつたのである。

自分は、大帝の此の御優詔を拜し、粉骨碎心、御奉公を申し上げねばならぬと、堅く決心して、任に赴いた。幸なことに、戦時中特別盡力をしてくれた米國の銀行家シフ氏が、復もや特別の盡力と斡旋とをしてくれた爲、自分もその任務を完うすることが出来たのである。

その、シフ氏が、明治四十二年に圖らずも來朝した。大帝は井上侯の奏上により此の趣を聞き召されて、早速拜謁を仰付けられた。それも従來、外國の知名の士が來朝の際には、豫め其の國の大使館と外務省とが協議の上、接待方法を定めるのが慣例である。然るにシフ氏だけは、井上馨侯と宮内省の間に於て接待方法を定められたのである。

大帝が、シフ氏を「日本の恩人」として、特に優遇遊ばされた大御心は、まことに畏れ多いことであつた。

その際、御陪食の席に列したのは、田中宮相・井上侯・阪谷藏相、其の他金子子・末松子・長崎式部官及び自分等の極少數の者であつた。

席上龍顏殊の外御麗はしく、長崎式部官が御通譯申し上げて、何くれとなくシフ氏と御會談遊ばされた。



宴半ばにして、シフ氏は金子氏にまで言つた。

「陛下の御健康を祝し奉る存意であるが、差支ないでせうか」

そこで、金子氏は此の由を長崎式部官に通じた。

宮中に於て御陪食の折、此のやうな前例は今まで曾てない。そこで長崎式部官も、狼狽したらしい。

「シフ氏が、陛下の御健康を祝したいと申しますが、如何取計らひませうか」

宮内大臣に訊ねると、宮内大臣は答へた。

「直接に御伺ひ申したらよいではないか」

「では、伺つて見ます」

式部官は恐るゝ陛下の御意を伺つた。

「さうか、よろしい」と御許しになつた。

此の旨、シフ氏に通ずると、彼は、やをら立上つた。

「戦時に於ても、平時に於ても、卓越せる日本皇帝陛下、畏れ多きことながら、我が米國のリンカーンに相比すべき日本皇帝陛下の萬歳を祈り奉り、併せて、陛下のしろし召

す日本帝國の隆昌を滿腔の誠意を捧げて祝し奉る」

さう言つて乾盃した。

陛下はいと御満足にわたらせられたかの如く、シフ氏に御懇篤なる御挨拶があつた。

かくの如きは、宮中に於て曾て無いところの御厚遇であつたと洩れ承る。

この時たしか觀菊の會の折と思ふが、シフ氏夫妻の待遇は米國大使館が與つて居らぬ爲、外人拜謁の名簿に洩れてしまつた。その爲、御宴に於ての拜謁を賜はることが出来なかつた。そ

こで、陛下は又しても特別の思召を以て、入御の際、宴會入口のところに於て御立留りにな

り、シフ氏に握手の禮を交され、重ねて優詔をも賜はり、皇后陛下はシフ氏夫人に、御同様、

御丁寧なる御挨拶を賜はつた。

### 御自署の御眞影

外債募集に骨折つた英國のロスチャイルド卿は、日本には來なかつたが、自分が倫敦で一日同卿に日本の勳章を賜はるやうに政府に話して見ようと言うたところ、

「自分は英國の勳章があれば十分である。外國の勳章は一切拜領せぬ事にしてゐる。若し日





鳥羽  
天皇  
御製

御製 浦風も荒磯浪も今朝風もかてつた鳥羽の海面  
荻天生泉筆

本政府が自分の功勞を認めてくれられるならば、希はくは、日本皇帝・皇后兩陛下御自署の御眞影を拜領させて頂きたい』

そこで自分は歸朝後直ちに井上侯に此の事を話した。ところが外國の君主、並に大統領に贈る以外に於ては御自署の御眞影を贈られた前例がない、従つて宮内省では無論反對した。この時も特別の思召によつて御下賜遊ばされた。

實際シフ氏にせよ、ロスチャイルド卿にせよ、戰時中我が國の公債募集に盡力した事は非常なものであつた。殊に第一回・第四回の公債募集の際の如きは、シフ氏なかりせば、微力自分の如きは、その使命を果たすことが出来ぬのみか、日本をして財政方面に於て後顧の憂なく、勇敢なる軍隊の活動を十分ならしめる事は到底出来なかつたと思つてゐる。

大帝が此の間事情を御含み遊ばされて、彼等外國人に向つて空前の御厚遇を賜はつた事は實に恐懼に堪へぬ次第である。

明治天皇御製 (明治三十二年)

田家烟 小山田の里のけぶりもとしく、に立添ふ世こそ樂しかりけれ



奉 仕 十 年

子 貴族院議員 藪 篤 磨

私は、明治二十三年十一月、即ち十一歳の少年時代より十九歳に至るまで、侍従職出仕として側近に奉仕する光榮を忝うしたものであります。

侍従職出仕は官制が二十二年に改めらるゝ前迄は内豎と申しまして、御維新前は稚子と申して居つたやうで御座います。側近にあつて 聖上の御小間使をお勤めするのであります。表御座所の御供は申すに及ばず、大奥へも出入することを許され、隔日に宿直をもいたしました。随つて他の方々よりも比較的 大帝に咫尺し奉ることは多かつたのであります。不世出の 聖天子の御聖徳を、我々不肖のもの考へをもつて、殊に年いかなぬ少年時代の記憶をもつて、彼此と申し上げることは洵に畏れ多いこととあります。併し子供心にも、偉大な御乾徳

から蒙つた感化は、實に著しきものがあります。其の一、二を申し述べて、謹んで 大帝を 追慕し奉りたいと思ひます。

お名残り惜しげに

私は、親に早く別れて、その慈愛の恵みに浴する機会が少かつたため、大帝が御母君即ち英照皇太后様に御孝養をつくし給ふことを眼のあたりに拜し奉りて、實に何とも言へぬ感じがいたしました。御親子の御間柄とは申しながら、萬機御多端のため、屢々御對顔遊ばされる機会とはなく、僅かに年一度、皇太后様の御在します青山御所を御訪問遊ばさるのみで ありました。ですから其の日の来るのを、大帝にはどんなに御樂しみになり、又どんなにお待ち兼ねになつたかは、私 共にも拜察することが出来ました。

さて愈々其の日に なりますと、早朝より御支度になり、何くれとなく御珍らしきもの、御好みのものなど、澤山の御土産物を持たしめられて御訪問遊ばされました。御供の如きも、表立つての供奉員などは召連れられず極めて御内輪の、打ちとけた御訪問でありました。斯くて一年中最も御樂しみの一日の御歡談を御すましになり、御暇乞あつて、御名残り惜しげに還御なさ



いました。

やがて数日の後、皇太后様は、御答禮のため御参内なさるのでありますが、其の日をお待ち受け遊ばす 大帝の御心持は、私共出仕の子供たちにも、はつきりと拜察出来る程でありました。

御手を執らぬばかりに

明日は皇太后様御参内となりますと、前日からいろいろと御用意なさいます。そして一年中の数多い献上品の中から、あれこれと御珍らしいもの、ある時の如き、例へば美術品とか、或は御道具類とかいふやうなものを、御陳列になります。併しながら、それとても決して他人の御手を御かり遊ばすやうのことなく、御躬ら親しくお指圖遊ばすのでした。それは、少しでも多く皇太后様の御喜び遊ばすやうにとの、御優しい御孝心に外ならぬ事と拜せられて、何とも言へぬ感がいたしました。

愈々御参内遊ばされるや、大帝には、殆ど御手を執らせ給はぬばかりに御出迎へ遊ばされ種々と、しみじみ御物語り遊ばされました。其のお言葉と言ひ、御態度と言ひ、禮讓を盡し給

ふ中にも、自らなる御親しみの御様子がお溢れ出で、實に申すも畏きことながら親子の間は斯くこそありたきものと、幼な心にも、つくづく感じたことでありました。

陳列品の御説明のごときも、決して人に御任せなく、御躬ら御丁寧に申し上げられ、皇太后様のお喜びの色の見ゆるのを、此の上なく御満足に思召すやうに拜せられた 大帝の御面影、今も目の前に仰ぎ奉るやうであります。斯様に御孝心の深い 大帝の事でもありますから、皇太后様崩御の折の御歎きなどは、申すも畏き極みであります。忘れもせぬ一月十日の夜、私は宿直して居りましたが、朝早く侍従から崩御の公報を齎されましたので、大いに驚き、恐懼しつつ、御前まで推参いたしました所、大帝は折悪しく兩三日前より御風氣のため御假床中でありましたが、非常な御驚きと共に、

「直ぐ出門するから」

との御言葉であります。そこで早速御支度にかゝりましたが、何分突然の仰出、殊に早朝のこととて、なか／＼供奉の方々など間に合はず、遂に宮内大臣・侍従其の他僅のものが御伴をしたばかりで青山御所に向はれましたが、儀仗の騎兵の如きは、漸く櫻田門あたりで追ひつ、た程でありました。



後年、京都泉涌寺の御父帝・御母后の御陵なる月輪の陵に、御參拜あらせられた時の御製を承りまする、

月の輪のみさぎ詣でする袖に

松の古葉も散りかゝりつゝ、

松の古葉の御袖に散りかゝるにも、生事を思し出でられて、御感慨いかに深くおはしたかと、拜察し奉るのでございます。

曉かけての御拜

我が國は神のすゑなり神まつる

昔のてぶり忘るなよゆめ

敬神崇祖の御心の深くましましたことも、また特筆すべきものと存じます。恆例の御例祭は申すに及ばず、毎月一日行はせられる御拜など、御病氣にあらせられざる限りは、決して御代拜を立てさせられる等のことなく、御射ら天神地祇を祭り皇祖皇宗を御拜あらせられました。賢所へは毎朝々々侍従をして參拜せしめられ、新嘗祭の折、曉の御拜の時の如きは、午

前二時頃より引續き遊ばされて、親しく御祭事あらせられました。

御製中、神に關するものゝ多いのにも、大御心の程が親はれますが、實に 大帝は御國體の尊さを、御射ら御體現あそばしたものと存じます。されば我々御傍の者たちも、敬神崇祖といふことについて、大帝からどれ程の御感化を蒙つたか判りません。それを思ふと、今もなほ肅然として襟を正さずには居られませぬ。

兵隊の苦勞を思へ

大帝の御一生は、終始御一貫、御規律正しき御生活でありました。御態度の如きも如何なる場合に於ても決して御くづしなざるやうなことなく、人並勝れて御肥滿の玉體にましましたながら、御安坐遊ばされたり、御椅子にお凭りかゝり遊ばすやうなことは絶對になく、常に端然として犯すべからざる威容を備へさせられました。今にして思へば甚だ畏れ多いことながら、初めの程、私たちは、子供心にも、如何に 聖上が御端正に涉らせ給ふとは言へ、いつかは御姿勢を御くづし遊ばすやうな場合も、御ありなざるだらうと思つておりましたが、表御座所に御在します時も、大輿にまします時も、少しの御變りなく、永い間の奉仕中、一回たりとも御座



をくづし給うたのを拜したことはありませんでした。これぞ自然に具はらせ給ふ人君の御儀容と、實に恐れ入つた次第であります。

それに就いても、たゞ一つ思ひ出だに涙の種となることは、崩御の月―七月十日の帝國大學の卒業式に臨御の折、平素斯の如き御端正なる 大帝が、不思議にも、御椅子に凭らせ給ひ幾分御態度を御寛ぎ遊ばしたやうに漏れ承つたことがあります。若しそれが事實といたしますれば、平素の御態度と思ひ比べ、臣子として何とも恐懼に堪へざる次第であります。御健康の勝れ給はぬのを、國家のため、教育のための大御心から、押して御辛抱の上、臨御遊ばされたのではあるまいかと、今更ながら思ひ起して、感激の涙に咽ぶわけであります。

御服装はいかに酷暑の際と雖も、袖の短いシャツ等を召されたることなく、御制規通りの御服装を整へさせられ、今日は暑いからなどとお手輕な御服装をなされる事などは、決して遊ばされませんでした。

却つて私共が『今日は暑い』とか『寒い』とかいふのを聞き召されると、

『暑いとか寒いとか感じたなら、大演習の時の兵士のことを考へて見よ。さうすれば自然、暑くもなくなる、寒くもなくなる』

と仰せられ、誠に恐縮いたしましたことが度々ありました。常に斯うしたお言葉を拜してゐた私共には、

時雨して寒き朝かな軍人

すゝむ山路は雪や降るらむ

暑しとも言はれざりけりにえかへる

水田に立てる賤を思へば

などの御製の大御心が、ことに痛切に胸に響いて、覺えず涙ぐましくなるのであります。

### 重臣の夜中参内

御政務の御精勵については、多くの方々から御話がありました。當時幼少の私の頭にも、深く感動いたしましたことが御座います。

御學問所から大奥へ入御あそばされるのは、平常午後六時から七時頃まで、ありましたが、或時、内閣の更迭があつたため、御政務頗る御多端で、午後八時頃漸く入御になりました。さてそれから御召替の上、御食事を御執り遊ばさうとした所へ、表御座所から、某重臣が至急拜



謁の上、上奏いたし度き旨を傳奏されました。普通の人ならば、未だ食事前だからなどと申すべきところ、大帝は、そのまゝ再び、表御座所へ出御遊ばされ、其の重臣の方に拜謁仰付けられました。さうしてやつと十時頃入御の上、御食事になつたのであります。子供心にも私たちは、大帝の大御心に感激して、實は随分お腹も空きましたが、我慢してお待ちしたことを覚えて居ります。

我が帝國の國運が、明治時代に於て前古無比の進展を見たことも、畢竟國のためには御寢食さへ忘れさせ給うた 大君の賜に外ならぬことゝ、また感涙に咽ぶ次第であります。

### 何番目の抽斗

天資英邁に涉らせられ、御記憶力の非常に強く在りましたことは、今は國民の徧く知る所でありませんが、實際私たちも 大帝の御記憶の御確なことに、驚き入ることが度々でありました。

『何々の品をもつて来い』  
と命ぜられて、取りに參つて見つからず、あちらこちらと探して居りますと、

『まだ見つからぬか、それはどこそこの押入の何番目の抽斗のどちら側にある、よく探して見よ』

との御言葉に、その通り抽斗を開けて見ると、御意の品物がチャンとありました。

時には、私共が探すのに手間取つたりいたしますと、御自身御起ち遊ばされ、その品物のある所を御指しになつて、

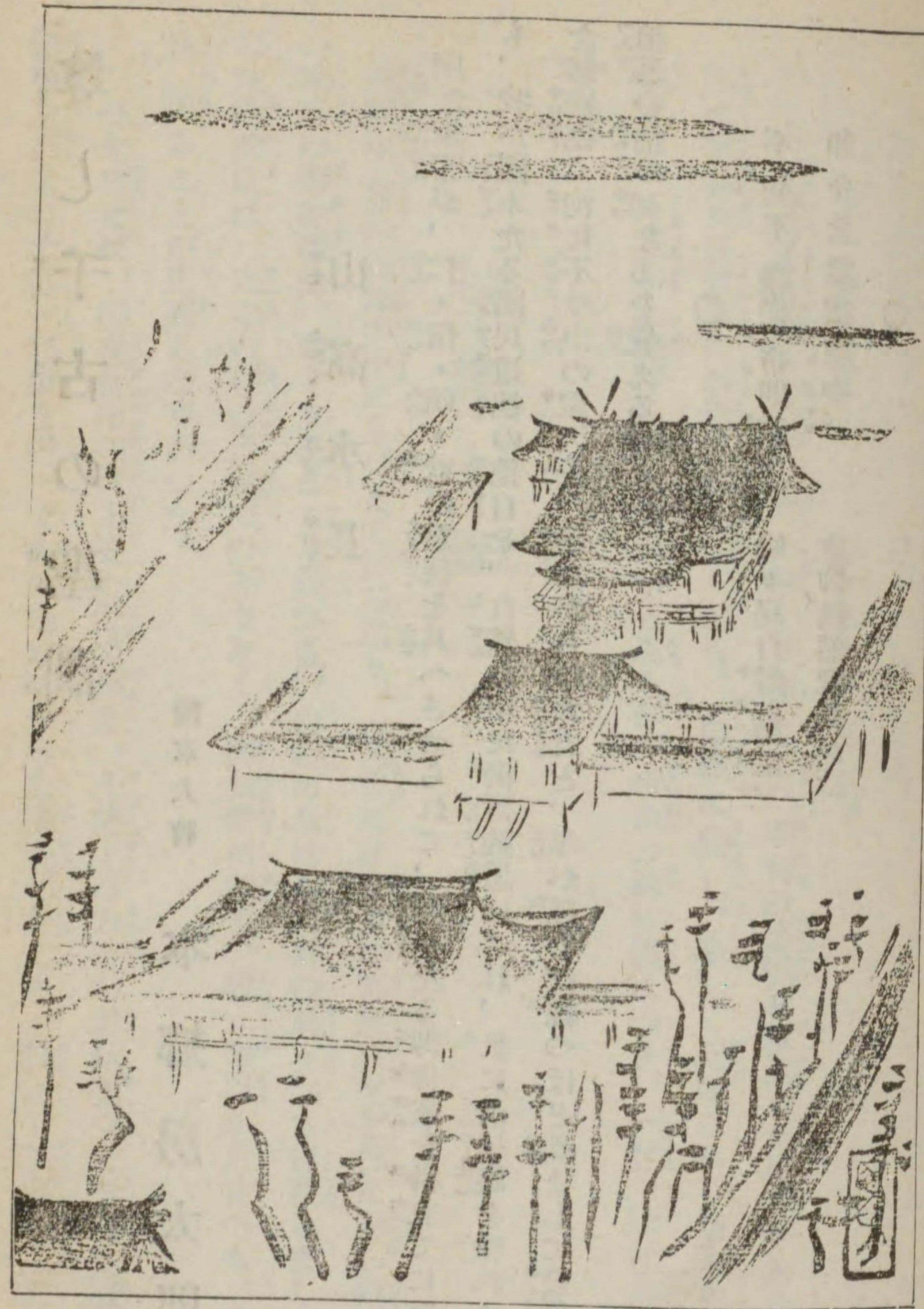
『よく忘れるな、こゝにあるではないか、しつかり覚えておけ』  
と御笑ひ遊ばされたことなど、屢々ありました。

随つて、御政務を見そなはず折なども、過去の事實、人名等、悉く御記憶遊ばされたやうに拜します。ですから各大臣方も、上奏の際には、過去に於ける關係事項は悉く調査の上、御下問に答へらるゝ用意が必要だと、申して居られたことも承つて居ります。

### 眞面目なあやまち

最後に、もう一つ申し述べて置きたいことは、我々側近にあるものは、お側に事へる事が非常に愉快で、所謂勤めよかつたといふことであります。それは要するに、大帝の御心が海の





明治神宮

荒井寛方筆

やうに御宏く、御情深く御はしました上に、個人の過については、決して他に御洩らし遊ばすやうなことなく、忠實に御勤め申し上げての上の過ならば、少しも御咎め遊ばすやうな事がなかつたからであります。

此の事は我々としても、一家の長たるものゝ、又假にも人の上に立つ時、最も心すべき事でありませんが、大帝はかうした御徳を自然に具へさせられたのであります。

其の代り嘘と虚榮、即ち心を偽るといふやうなことは、断じて御許しになりませんでした。随つて大帝の在します所常に正氣漲り和氣霽々として、私共も楽しく御勤めすることが出来たのであります。思へば思ふほど、有難いことでありました。

奉頌

明治神宮権宮司 江見清風

よゝはたの宮より四方にひろがりて

あまてる神のみちさやかなり



尊し千古の聖訓

陸軍大將 本郷房太郎

山高水長

明治聖帝が、仁・信・明・武の君徳を具へさせられて、赫々たる御偉業を御立てになり、而も、我が國本たる國民道徳の徳目を、自然の中に御實踐遊ばされ、世に活模範を垂れさせ給うた御盛徳、洵に不世出の聖天子、神ながらの大君と、年が経てば経つほど彌まじに敬仰の念、追慕の情の切なるを覺える。

不知不識從帝則  
如今世態雲煙變

皞々民自醉醇醪  
愈仰巍然聖德高

聖徳山高而水長

茫々如夢十星霜

至レ今億兆齊追慕

於戲先皇不レ可レ忘

こは、明治聖帝御十年祭の時、恭しく賦して、不肖の感慨を披瀝した拙詩である。既に先輩及び君側に奉仕された方々から、聖徳に關し、委しく謹話されてあるから、不肖の如きが、今更申し上げる要もないかと思ふが、折角の御依頼につき、一言を附け加へることにする。

相撲上覽

長岡中將の謹述の中にも見えて居る通り、大帝には容易に喜怒哀樂を色に形し給はず、その雍容の御襟度は、申すも畏きことながら、自然に具はる人君の神々しさに在りました。さうした御態度は、大事の場合に於てのみでなく、御日常に於て、我々微臣からさへも、明かに窺ひ奉ることが出来るのであつた。

一例を申せば、御在世中相撲上覽の際の如き、土俵上の力士が思ひ切つた滑稽を演じて、御陪觀を許された我々が腹を抱へて大笑ひするやうな場合に於ても、仰いで玉座の方を見奉れ



ば、終始端然たる御容姿を毫も崩し給はず、凜乎たる御態度を拜するのであつた。常に御眼を前方にしつかりと注がせられ、偶々横の方を御覽遊ばす時にも、よく人のするやうに卒然頭だけ其方へ向けるといふやうなことは、決して遊ばされず、必ず御上體全部を正しく御向けになると言ふやうに、實に御重々しく大磐石の如き御威嚴に満ちた御態度にしました。「動かざること山の如し」てふ此の御態度は、畢竟するに、内に藏めらるゝ偉大なる御人格の御發露に外ならぬ。正しく強く大いなる御心の徳、その表れであると拜察し奉るとき、自ら襟を正して肅然たらざるを得ないものがある。

日を透うて輕佻浮薄に流れ、徒らに知識ばかりを衒はうとする現代人は、よろしく、聖帝の大御心を仰ぎ奉り、心の徳、人格の力を養ふべきである。殊に現時の如く較もすれば輕佻浮薄に流れんとする時に際しては、彌々御心を體して誠實を旨とし、常に國家的觀念を以て萬事を處せんこと切望に堪へぬ次第である。

### 代々木の森

天資御英邁にましましたことは、申すも畏きこと、まことに現世の神と仰ぎ奉る次第である

る。それにつけても今なほ忘れ得ぬ一事がある。

不肖が陸軍省軍務局に奉職中、條例改正などの場合に、上官の旨を受け、侍従長を経て、上奏御裁可を仰ぎ奉つたことが屢々あつたが、古い條規を新しく改めようとする場合など、

「此の規則は、何年に、かう改正されてある。それを又改めようとするのは、如何なる理由によるか」

と侍従長を経て細々と御下問があり、御不審の箇所はあくまで御究明の上、御納得がなければ御裁可にはならなかつた。一事が萬事すべての御政務に對して、斯く迄に御心を勞させ給ふ大御心の程、畏しとも何とも言はうやうなき有難さに、つい涙を催さるのである。それ故に苟も、御裁可を仰ぎ、或は伏奏申し上ぐるやうな場合には、關係事項の細大に互つて、精しく研究してからでなくては、御前に罷出することは出来なかつた位である。若し偶々不取調のこなどあると、冷汗背を濕さねばならぬ程、萬事に御記憶深く、綿密に御研究になつて居た。聖帝の此の偉大なる御力は、やがて職を奉ずるものをして、勵精以て一毫の過なからんことを自づと期せしめられた所以であつて、明治文運の異常なる進歩も、亦故あるかなと、感激に堪へない次第である。



代々幡の杜ほの暗き曉に

とくも詣づる四方の諸人

實に 聖帝神去りまして十有六星霜、或は代々木の明治神宮に、或は桃山の御陵に、雨の日風の日もいとはず詣づる人々の絶えないことは、聖徳、自然に民心に入るの如何に深く且厚きを知るべきである。

千古の聖訓

聖帝は在世中の數萬首の御製は我々臣民の日夜拜誦して、拳々服膺すべき聖訓である。申すも畏きことながら、聖帝の御製は作られたる和歌ではない。その高く大いなる御人格の、事に臨み、折にふれての、自然の御發露であるから、これを拜誦する度に、御日常・御懸念・聖徳・高風等みな如實に窺ひ奉ることが出来て、我知らず感涙に咽ぶのである。

年々に思ひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

離宮は御健康の勝れさせ給はぬ 皇后陛下や 東宮殿下の御用にのみ御使用になり、御躬ら

は、唯の一度たりとも、御避暑・御避寒等の事なく、如何に炎暑の折柄ととも、制規の御軍服を召させられて、毎日御學問所へ出御の上、萬機を知しめし、臣下に拜謁を賜はる際の如きも、常に御起立で御聽取遊ばされたものである。

つかさ人さゝぐるふみも讀みはて

ゆふべしづかに花を見るかな

多端な御政務を異常の御精勵を以て處理遊ばす裡にも、亦綽々たる御餘裕の御心境、御製に髣髴として拜察し奉られるではないか。

一たび御製集を繙けば、その博大雄渾なる大御心を拜し得べく、而も、その大御心を實踐躬行遊ばされたることを想へば、御製の一首々々は、皆これ古經典以上の、實に千載の教訓として、我等の心に不朽の生命を與へ給ふものである。

日本國民とある以上は、これを拜誦するとき、如何なる心のゆるみも凜然として引締り、感奮興起、勇往邁進の氣、自ら油然として起り來るであらう。そこに大和心の感激がある。日本國民の生命がある。偉大なる國民精神の發露がある。

明治聖帝の絶大なる御隆徳、之を仰げば愈々高く、之を鑽れば彌々堅しと申すべきである。



# 手作りの琵琶を捧げて

元掌侍 吉田 鈺子

## 先帝様の殯宮に祇候して

私は、樹下定江様と同時に、明治二十年から御所に出まして、昭憲皇太后崩御まで丁度二十八年の間、御仕へ申し上げました。

随分永い間の御奉公で御座いましたが、何分にも老年のことゝて、記憶も確で御座いませんが、少しなりとお話申し上げて、明治天皇の御高德を偲び奉りたいと存じます。

今度大正天皇崩御につきまして、私たち年寄ども、殯宮に祇候させて頂きましたが、其の折にも、明治天皇の崩御の時を思ひ出しまして、感慨一入で御座いました。

御内儀の御苑の様子は、十数年前も同じこと、唯、先年の地震に土塀が崩れたため、柵に改められましたのと、梅の木の下に大きなお水鉢が置かれてあつたゞけの變り方、凡ては元の通り、明治天皇御在世當時のまゝで御座いました。

## 「暑さは我慢すれば凌げる」

御苑の一つの石を見ましても、一本の樹を眺めましても、凡てが思ひ出の種ばかりでございます。宮城御落成の折の、聖上の御喜び、其の時の國民の心づくしなど、次から次へと泉のやうに湧き出て参りました。

表御座所は風通しが思ふやうでなく、暑い夏の日などは随分とお凌ぎにくく、いらせられたやうに拜しました。側近の方から、

「お窓を御つくり遊ばしては如何で御座いませう」と申し上げましても、

「此の住居は國民が造つてくれたものぢや。暑さは我慢すれば凌げる。なるべくは元のまゝにして置きたう」

と仰せられ、御世を終らせ給ふまで、少しの御模様變へをも御許しになりませんでした。勿體ない極みでございます。



暑しともいはれざりけりにえかへる

水田に立てる賤をおもへば

この暑苦しい御座所に、御肥満の玉體、お凌ぎにくい所を御我慢遊ばす大御心には、又かうした歎慮もおはしましたことを拜察しますと、いよく有難さに胸打たれて、我知らず涙がこぼれます。

「金剛石」をお謠ひ遊ばして

聖上は薩摩琵琶が大層お好きであらせられました。それについて私の思ひ出を一つ一つ申し述べませう。

大正天皇の立太子式の御祝の際、御内儀の御内宴に、西幸吉様が召されまして、「俊基朝臣東下り」を弾じて、御感に入り、尙「草笛」を吹いて聖聴に達せられたことが御座いました。

其の後、御慰みに、「琵琶を作つて見よ」と仰せられましたので、樹下定江様と二人して、無器用な手つきで、一生懸命作り上げまして、差上げましたところ、幸に御譽めの御言葉を受頂戴いたしましたことを覚えて居ります。

其の琵琶に、いろ／＼と御射ら御加工遊ばされ、時折には彈奏遊ばすことも御座いました。其の折には、よく、皇后様御作の「金剛石」を御うたひになりました。

手細工のお手拭かけ

琵琶を差上げたことで思ひ出しました。私は、よく御沙汰を蒙りましては大工のするやうなお仕事をいたしました。

博覽會などで御買上げの材木を賜はりまして、

「これで何々を作れ」

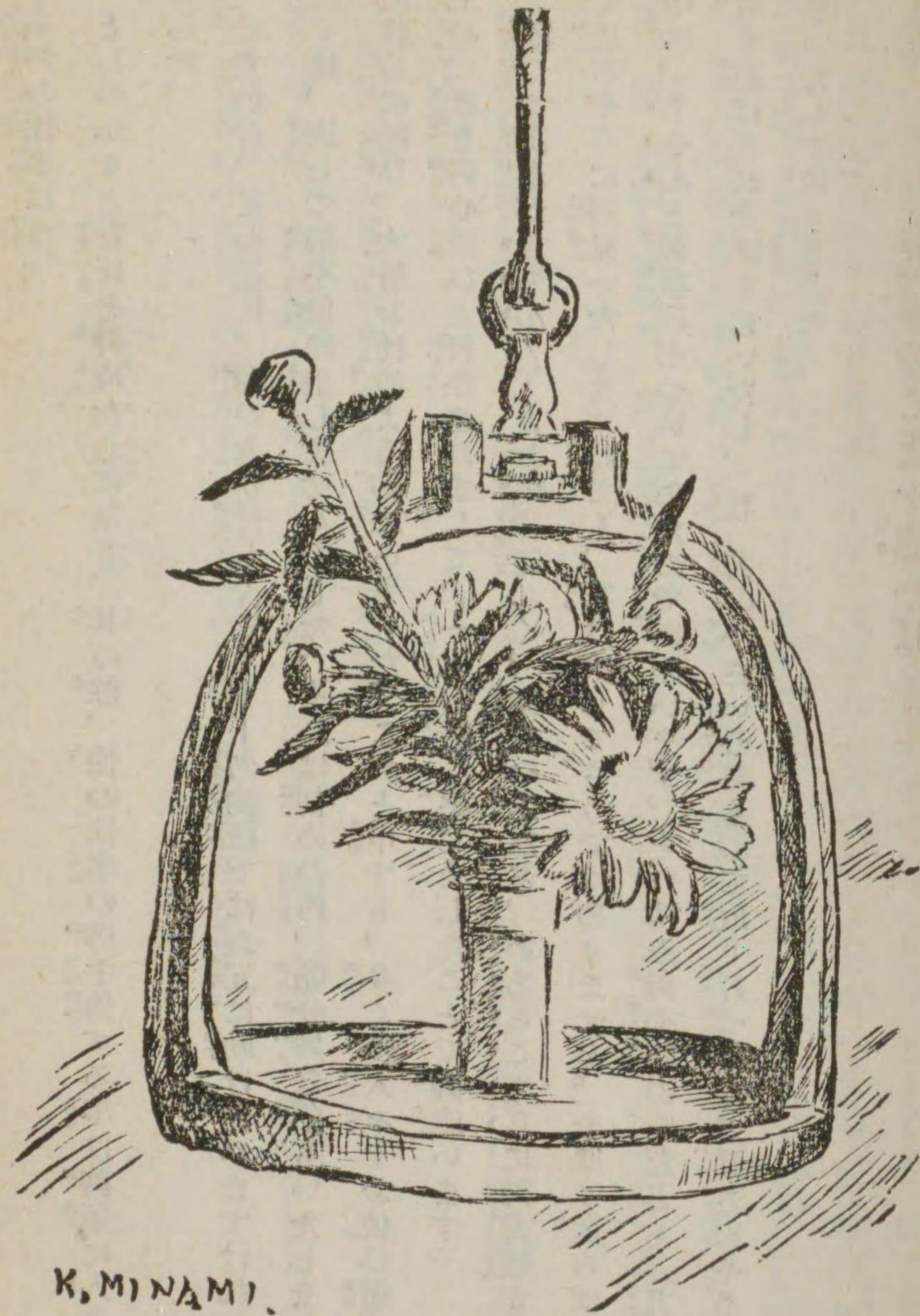
と申されます。

一番澤山作つて差上げたのが、お手拭掛で御座いました。

聖上は御承知の通り御肥満にいらされたため、よく汗をおかき遊ばし、常に御手拭でお拭ひになりましたが、自然澤山のお手拭が御入用であつたので御座います。

それとも、初めの中は、慣れぬことゝ釘づけにいたしますと、直に、グラ／＼になつて役立たなくなりす。





K, MINAMI.

瓶花るたれら作て以を具器の工砲騎歩くし親の帝大

筆造薰南

「また手拭掛が毀れたぞ」

と仰せになつてはお笑ひ遊ばす。

どうかして丈夫なものと随分苦心をいたしまして、終には、「差込」の細工も出来るやうになりました。

これらは勿論、大工に仰せられてもよろしい御品で御座います。然るに萬事御質素の御心からでもありましたでせうが、素人の無器用な手細工を却つて御賞美下さるといふ、洵に有難い御思召で御座います。

それを思ふ度毎に、私は、かの品物のよしあし、雅味の有る無し、そんな事は少しも考へないで、たゞ値段さへ高ければ買ふといつたやうな人たちは、もう少し考へ直して貰はねばならぬと存じます。

### 我が仕事と人の仕事

私たちは私たちの御勤めだけ、命婦の方は命婦の御仕事だけをきちん／＼として参りさへすれば、それで御機嫌がよろしかつたもので御座います。



「何の仕事は誰」

としつかりと責任を御持たせになり、其餘、他の仕事の御手傳する事は御氣に入りませんでした。

ですから、どんなに、他の人が忙しくとも——勿論蔭ではお互に助け合ひますけれども、御前では、決して御手傳は申しませんでした。それは初めの内、随分妙な氣もいたしました。慣れるに随ひ、大層お務めよう御座いました。これと申すも、多くの人々をお使ひ遊ばさるゝ上の、尊き御心遣ひと拜察されました、一入有難く感じましたことで御座います。

随つて萬事がきちん／＼とお規律正しく、御机の上など、あちらこちらに御書類が散らばつて居るやうに拜見いたします時でも、實は決してさうではありません。やはり散らばつてゐる中に、ちやんと御整理がついてゐたので御座います。それゆゑ御掃除の時なども、凡て前にお置き遊ばされた通りにいたし、私共の小さい心をもつて取り片づけなど致さぬやう、常に注意いたして居りました。

兵隊のことを思へば

戦争の時の御苦心は、もう申し上げる迄も御座いません。「兵隊のことを思へば」との思召から、御内儀のストロヴも御廢しになつたのも、あの時からで御座います。旅順開城と皇孫宣仁親王殿下の御誕生と御同時といふ大層御目出度いことが重りまして、聖上にも非常に御よろこびの御様子で御座いましたが、さりとて格別の御祝宴といふやうなこともありませんでした。遠く御國を離れて、寒さ暑さを忍んでゐる將卒の上を思はれての大御心と拜察いたします。

然し戦勝の知らせがあつた際などは、大層御満足で、提灯行列が御所の前に参つたことを聞え上げますと、

「折角、こゝまで来たのぢや、よく見てやれ」

と仰せられ、皇后様が御名代として御出ましになり、私共代る／＼御供をして、二重橋の傍の二重櫓の小さな切戸の所から、見せて頂いたことが御座います。

堂を揺がす御高笑ひ

誰やらが、



「陛下は御笑ひ遊ばすことがあるか知ら」

と申したさうですが、何時も大きな御聲で、よく御笑ひ遊ばしました。御心配の多い戦時中でも、どうしてあんなに大きな御聲で、と思はれる程にお笑ひ遊ばしました。

御心配は御心配ながら、併しそれに屈託遊ばされぬ海のやうな御宏量、山のやうな御大膽、それがこの御笑聲となつて發露あそばすので御座いませう。その御笑聲を聞くごとに、私共までも何とも言へぬ心強さを覚えまして、我が大君の在します限り、戦争は必ず勝つものと、心の中に確く信するやうになりました。こゝに至つては、全く天縱の御偉器と申し上げるの外はございませぬ。

最後に、最もお目出度かつた御銀婚式の思出を申し述べて、この御話を終らうと存じます。それは明治廿七年三月九日でございました。御政務御多忙と諸事御儉素の御精神から、格別

御祝のお催しは御座いませんでしたが、四方の國民が、心から壽ぎ奉る献上物は、實に夥しい數に上りました。私の今尙明かに記憶に残つて居りますものは、それはく大きな――疊二疊敷位の打物の御菓子。きれいな、たしか八重櫻の模様であつたと思ひます。これには流石の、聖上も御驚き遊ばしました。田舎の老婆の手だしなみと見えまして、美しい巾着の中

にお手玉の入つてゐるのも御座いました。中に丸髷の型の面白い献上物もありましたが、聖上にも、これは御分りにならなかつたと見えまして、

「これは何だらう」

と不思議さうに御覽になつた御面影、今も眼の前に拜するやうに覺えます。

此等の數多き献上物の中、大きなものは御表へ、小さいものは御内儀に留めさせられ、皇后様とお分けになり、鶴・龜と御印つけられた御棚をおつくりになつて、いつまでも御手許に、お大事に留めさせられました。

くはしいことは税所敦子様が、「大婚二十五年盛典記」と題して、優美な國文を以て、さらから、御盛儀を拜するがやうに記されましたから、茲に御紹介いたします。

### 大婚二十五年盛典記

久方の天の御柱めぐりましけん神代は知らず。來しかた行末にも、ためしあらじと覺ゆるは、こたびの御祝になんありける。



いにしへ聖の御世と聞えし時にも、内々はいかにぞや思ゆることも打まじりためるを、上の御心いとたゞしくおはしまして、宮のうち露ばかりみだれたる事なく、後の宮の参らせ給ひしより、二十五年一日のごとく、御仲らひあらまほしうて過させ給ひしを、ことし三月九日といふに、其の盛典をあげさせ給へるなりけり。

こは銀婚式とかいひて、外國の帝にも殊更に祝ひたまへる事とぞ聞えし。もとよりうはべの飾を好ませ給はぬ御本上におはしませば、斯うことごとくしき様には思ほしおきてざりつらめど、大御國內の人々早くもわかひ知りて、此の年月かうぶりたる御いつくしみの千々の一つをも、報い奉らんと思へるにやあらむ、心の限りをつくして、さまざまなる物ども捧げ、あるは社々の祭りをなし、または貧しき者に物施しなどして、こたびの盛典を賀ぎ奉り、なほ行末のいや榮えさせ給はんことを祈り奉れるときしも、美濃の國より白き雉をさづけ來るに、いと奇しう珍らかなるや。

昔この雉のあらはれしときには、太平のしるしとて、年號をさへ改められし例もあれば、いともくめでたき祥にこそと、人々こぞりて賀ぎ奉れり。扱は非常の大赦なども行はるべう聞えしかど、故ありて思ほし止まらせ給ひ、たゞ年老い

たる者どもに黄金を賜ひ、又は御國の爲め勳功ある人々の後をめぐませ給ひなどやうのことをぞ、縣々に仰せて、残るくまなくせさせ給ひけりとぞ。

其の日は巳の刻より拜賀を受けさせ給ふとて、大禮服を召し、勳章を奉りて、常より殊に氣高うも尊くも見えさせ給へり。

宮は白き御服の御裾長きに、白銀もて花鳥を摺らせたるを召し、玉の冠をいたゞかせ給へる、かやうの式など行はせ給ふべき御齡とも見えさせ給はず、いとく若う匂ひやかにおはします。拜賀の人々いと多くて、未の時近うなりぬれば、御祝ひの御物も奉りあへず。ひとつ御車に召させ給ひて、青山なる觀兵式に臨ませ給へり。御道のほどもとりぐに心を盡して、松の上に朝日を出し、又は巖に龜のゐる型、色々の花を積みたる車など、めづらかなる物ども作り出で、祝ひ奉れる心をあらはし聞ゆ。

暮過ぐるころより、御裳奉りかへて、豊明殿に出でさせ給へり。かぎりなき燈火の光に映えて、いとまばゆく見えさせ玉ふ。

親王たち大臣たちをはじめ、司人残りなく召し出でたるはや、千人に近しと聞ゆ。舞樂は萬歳樂・延喜樂など、めでたきかぎりを奏したり。宮垣の外にても、かすくの火花をあげ



て祝ひ奉るに人々の萬歳を唱ふるこそ、いと賑はし。誠や、御歌所よりは「鶯花契 萬春」といへる題にて、人々に歌を奉らしめたるは、何よりも大御心になはせ給ふらんと思ゆ、そが中にも、

色も香もかはらぬ花に萬代の

やどり定めて鶯のなく

限りなき春を契りて鶯は

御園のはなのかげに鳴くなり

など、ことにめでたう覺ゆ。この御祝につきて、人々のさゝげたる物ども、うるはしき御調度は更なり、巧みにかしう作りなしたるも多かる中に、舞鶴の型を縫ひたる御衝立に、久方の雲井の鶴も聲高く

千代をことほぐけふぞ樂しき

また住吉の濱を繪がきたる御几帳のひもに、

すみの江に生ひそふ松の杖ごとに

君が千歳のかずぞこもれる

七十三 姪 敦子

と白銀の糸もて縫はせたる、なづかしう雅びたり。御祝日過ぎにし後も、なほここかしこより奉れるものの限りなきにつけても、大御代の榮えたまへる、民草のなびきまつれるほどはかり知られて、いとよくめでたうなん。

次の御金婚式は更に幾倍の御盛儀であらせられようかと、心ひそかに樂しみて待ち奉つたのに、終にその日に逢ひ得なかつたことは、返すくも悲しいことで御座います。たゞ思うてもく盡くる時なき 大帝の御高德を身にしまして、我が同胞の國民と共に、昭和の御代の彌榮えまさんことを祈るばかりで御座います。

\* \* \* \* \*

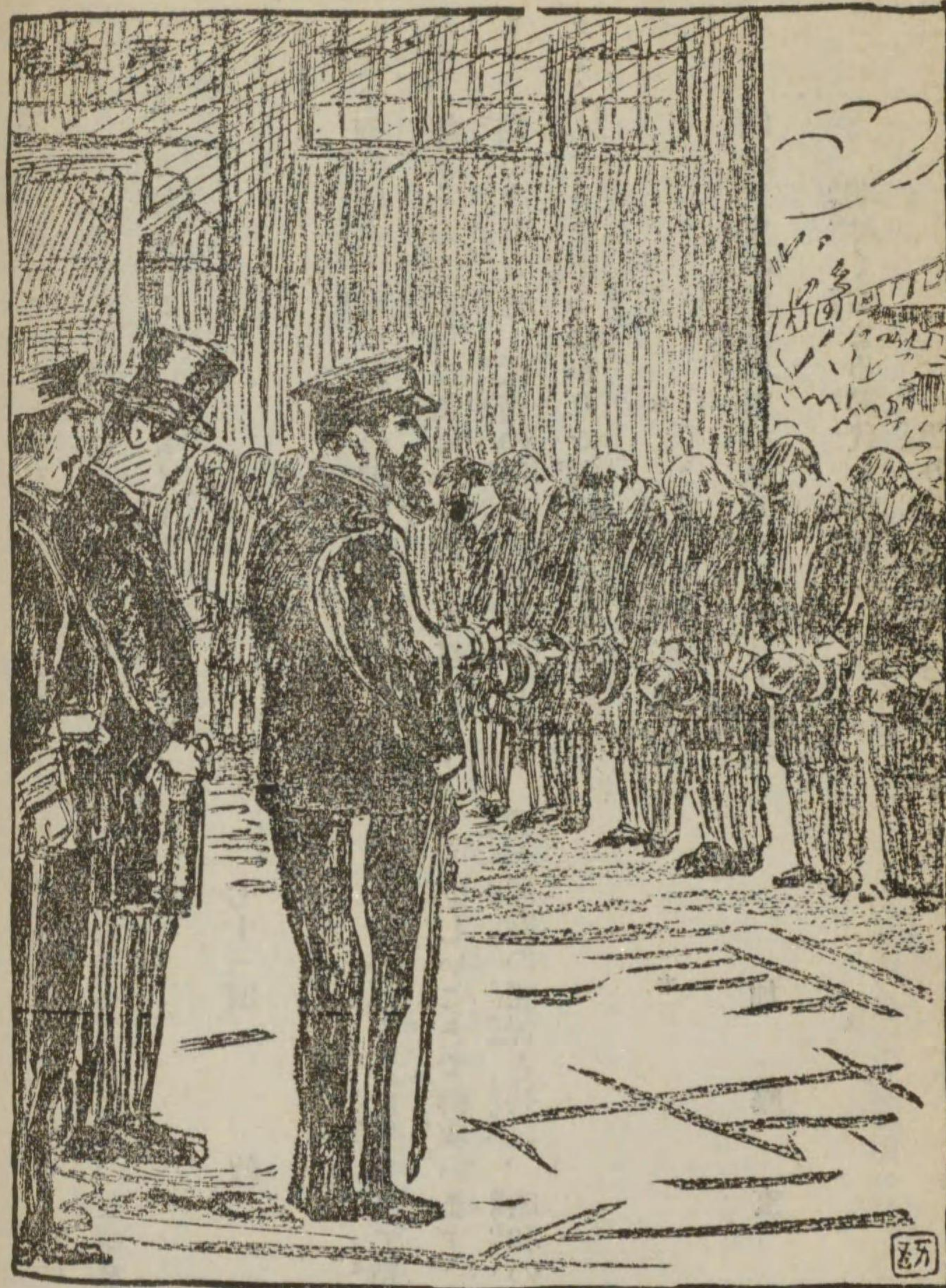
明治天皇の崩御に遇ひ奉りてその日よめる

加藤 玄 智

明けく治まる御代も諒闇に

黒み渡れる今日ぞ悲しき





明治廿八年京都市に開催せし第四回国内勸業博覧會に於て集代議士に謁見を賜はるの圖  
 小 林 萬 吾 筆

御買上品の數々

宮中顧問官 長崎省 吾

明治大帝の御盛徳は、宏大無邊である。従つて、一朝一夕に、これを盡くすことは不可能である。

申しあぐるのも畏れ多いことではあるが、陛下は、内外政務をみそなはせ給ふ爲、殊の外御繁忙にわたらせられた。それにも拘らず、美術工藝及び産業の御奨励については、絶えず大御心をそゝがせられたのである。

博覽會若しくは共進會等が開催さるゝ際には、親しく臨御遊ばされ、若しくは侍従を御差遣に相成つた。明治昭代の美術工藝及び産業が、勃然として振興つたといふのも、決して偶然ではない。全く大帝の御奨励に基くものであると、私は、さう信じて居る。



のみならず、龍池會其の他美術會等開催の折には、畏れ多いことではあるが、古來禁府を出でざる御物を御貸下遊ばされた。それが、斯道の参考品として、いかに鴻益を興へたことであらうか。

そして、優秀な作品、殊に青年作家の將來有望なものは、數多くお買上げになつた。願ふに全く御獎勵の意味があらせられた爲である事は、特に申し上ぐる迄もない。

地方に行幸遊ばされた際も、同じことであつた。

大帝は御在世中、毎年、各地に於て行はるゝ、大演習を御統監遊ばさるゝ爲に行幸あらせられた。丁度その頃は、秋の末、霜氣天にかゝつて、草露冷かなる時候に當る。でも早朝より御野立所に出でまして、御統帥の任に當らせ給うたのである。

行在所に御還幸の後も、引きつゞき萬機を御親裁あらせらるゝ爲、何かと御繁忙にわたらせられ、隨分、御疲勞遊ばさるゝやうに拜察する場合が多かつた。

さういふ際でも、地方々々の産業御獎勵に御留意遊ばされた。

そして、物産陳列場へならせられ御覽遊ばさるゝのが常であつた。

御晩年には折々故米田侍従と私とに御沙汰あらせられて私共が陳列場に參り、内地向と輸出

向とを取調べ、充分選擇して御覽に供し奉つたものゝ内より、いろ／＼と御買上遊ばされた。よの人を導くまではあらずとも

進まむ時におくれざらなむ

この御製を拜誦しても、大帝が、凡てのことに對し奉りて、進歩向上を望ませ給うた歡慮のほどを推しはかり參らせることが出来る。従つて、美術・工藝及び産業方面に於ても、絶えず、その振興を計らせ給うた次第であると恐察し奉るのである。

末の松山

岩手縣々社香稻荷神社社司 小保内 樺之介

明治九年七月十日 明治天皇東北御巡幸の折、岩手縣二戸郡福岡町の南方浪打嶺末の松山に鳳輦を駐めさせ給ふ。その時山麓に湧き出づる清水のいさも清く冷かなるを、新しき桶に汲みて、

足引きの山下水を汲みあげて

吾が大君に御茶たてまつる

と、一首の和歌を添へて奉れる翁があつた。

陛下には歡感淺からず民風の純朴なるを御嘉賞遊ばされたさ洩れ承る。後、同所を永遠に記念せんがため、有志相謀りて保勝會を組織し、松樹下に丈餘の記念碑を建立した。今尙こん／＼と湧き出づる玉泉と共に 大帝の御聖徳を偲び奉つてゐる。



### 豊明殿の御陪食に侍して

明治神宮々司  
陸軍大將 一戸兵衛

#### 西郷が怒つてなう

自分は、直接 明治天皇に咫尺し奉つたことは数少い。  
 日露戦後、一日我々武官に對し、豊明殿に於て、晝の御陪食を賜はつたことがあつたが、その時が最も御側近くで、龍顔を拜し、また玉音にも接した時であつた。  
 正面には 陛下、その御左右には皇族方、それから大山・山縣兩元帥、陛下と御向合ひの席には、宮内大臣と言ふやうな席次であつた。  
 御日頃、御言葉數も少く、それまで自分が御陪食を賜はつた時には、御食事終らせ給ふと間も無く、御立ちになるのが常であつたが、その時には、少し御酒を御召しになり、御顔色も輝かしく、御側近き山縣・大山兩元帥を御相手に御話に興じ給ひ、たま〜明治の初年、最初

の西國御巡幸の砌の御話を遊ばされた。陛下は、いつになく御高聲に——その時御乗りになつた軍艦龍城の玉座が疊二疊であらせられたこと、西郷隆盛が供奉長であつたこと、何う言ふ間違からか、その龍城艦が淺瀬に乘上げて了つたことなどを御話になり、三十餘年前の御事を偲び給ふかの如く、「あの時は、西郷が怒つてなう」と供奉長西郷隆盛が、艦長その他の、この過失を憤つたことを御話になつた。  
 聞く所によれば西郷は、その時恐懼措く所を知らず、一方いたく艦長その他の失態を憤り、刀を抜いて折柄艦内にあつた西瓜を斬り、漸く胸の怒を靜めたと言ふことである。  
 自分が、最も御側近く、玉音に接したのは、この御話を拜聴した時である。

#### 國民の至情

明治四十五年、七月、自分は 陛下御不例の由を大阪で知つたので、早速上京参内した。自分はその時、あの宮城前の廣場に跪坐して御平癒を祈る國民の誠心に心をうたれたのであつたが、宮中に参内して更に一層この感を深うした。  
 といふのは、あの廣い宮城内、何處も此處も文武百官の参内で、いつばいであるに拘らず、



あたりは、森と静まりかへつて、さながら人なきが如く、話を交すにも互に耳に口をよせて、極めてひそやかに、さゝやき合ひ、廊下を歩くにも、足音一つ立てず、みな、ひたすら、御平癒を祈り奉る心より外にないのだつた。

何處の國に、そしていつの世に、斯の如く國民の誠心を以て仰がれた皇帝があつたであらう！

まことに、大帝は、不世出の天子におはします。——自分はその時、深くさう感じたが、爾來年と共に 陛下の御事蹟を承るにつれ、愈々この感を深うするばかりである。

\* \* \* \* \*

明治天皇御大喪の時詠し奉る

伊豆凡夫

さざれ石のいはほとなりて苔のむす

そのうちまでと思ひしものを

長き年月も短く思ひて

元命婦 樹下定江

明治二十年、十八歳の時、始めて大奥に奉仕しましてから、昭憲皇太后様の崩御遊ばされるまで、丁度二十八年の間、御奉公申し上げましたが、御恩の有難さに、もう一生懸命にお勤めするばかりで、この永い年月を少しも永いと思ふことなしに過ぎて参りました。

御在世中の厚き御恵は何に譬へんやうもなく、唯、今となりましたは、せめてもの御恩報じにと、月の十一日・三十日の兩日に、桃山の御陵に参拜いたしましたは御後を御弔ひ申し上げて居るばかりでございます。

前古に比なき明治の美術

拙き私が特に申し述べて見たいと思ひますことは、明治大帝が美術の事に御造詣深くま



しましたことに就いてとございます。

明治年間に於ける斯道の比類無き發達も、偏に大帝御獎勵の賜によること、感激いたして居ります。

博覽會は勿論のこと、或は美術協會へ、或は漆工會へと屢々行幸仰出だされて、御獎勵を賜はるばかりで無く、侍従を御差遣になつて澤山と御買上げ遊ばされました。

而も御買上品は、畏れ多いことながら、私どもから見ましても、それ程と思はれぬやうなものでさへ、御大切に御保存遊ばされ、特に御氣に入りのものは、御丁寧に表装を御させになり、永く御手許に御留置になりました。此の深き大御心を承る美術家達が、何で感激せず居られませう。必ず一生懸命、其の道に精進されたことと存じます。これやがて前古に比なき明治昭代の美術の隆昌となつたことと信じます。

### 外國の見本を王子製紙へ

殊に私の今だに忘れ得ませぬことは、御屏風など表装を御命じの際には、意匠の事までも細かに御指圖遊ばされ、外壁に張ります紙などは、工業御獎勵の御恩召を以て、印刷局を通じ

て王子製紙會社へ、態々西洋の壁紙の見本をお下げになつて、

『このやうな紙を工夫して見よ』

との御沙汰などが御座いました。さうして其の出來たものに就いて、躬みづから御研究あそばされ、又會社へお指圖があると申すやうにその御熱心さには、全く恐れ入る外はございませぬ。會社へ侍従を御差遣になつて、其の製紙狀況を御調査になつた事も一再に止まりませんでした。

展覧會などへ行幸遊ばされました際には、工藝品その他の陳列品の原料から製作方法まで、詳しく御聴取遊ばされては、還幸後、私達にいろいろと御話を賜はり、美術工藝上の知識を御啓き下さいました。

而も一度御通過遊ばされた陳列場の、どこに何があつたといふやうなことは、残らず御記憶になりまして、それを一々詳しく御物語下さるので御座いました。その御知識の廣くいらせられたこと、御記憶の強く確でいらせられたこと、私共は本當に感佩せずには居られませんでした。





御壯年の御京都所にて馬術御線習の際、御自ら鞭をつくせら  
 給ひ藤波言忠氏に給ふ磯田長秋筆

大砲模型の御棚飾

聖上が御規律正しくいらせられた事は、是等御買上品の御整理についても、窺ひ奉ることが出来ます。

例へば金属品は金属品、象牙類は象牙の部、陶器は陶器といふやうに、一々細かに御分類遊ばされました。それ故私共、御手入をする際にも、誠に都合がよろしう御座いました。それで、いつも 聖上の御規律正しい御徳を偲び奉りつゝ、御手入をしたもので御座います。

崩御後、昭憲皇太后様から 明治大帝のお形見として頂戴いたしましたものに、大砲の模型の御棚飾が御座います。

これは何時頃の献上品か詳しくは存じませぬが、日本で始めて大砲が出来た折に、見本として御手許に差上げた御品のやうに承つて居ります。それを 聖上は非常に御愛玩遊ばされ、御世を終らせ給ふまで、御内儀の御座所に置かれて御座いました。

作が御立派と申さうより、畢竟するに、我が國軍事上の好記念物としての御愛玩かと拜察せられます。かうした御慰みの御品にも、國事を思はせ給ふ大御心の有難さを仰ぎ奉つて、家の



寶として永く後々に傳へるつもりで御座います。

### 電氣の世に大奥のお蠟燭

只今の宮城へ御移轉の時の御様子や、其の時の國民の忠誠につきましましては、平田様が詳しく御話になつたやうですが、私もその一つを申し述べて、有難い大御心を偲びたいと存じます。宮城は表の方こそ外國との交際上、已むを得ず電燈を御許し遊ばされましたが、御内儀は、崩御まで決して電燈を用ひることを許されませんでした。

御座所も御局も西洋蠟燭にホヤをした御燈で、聖上が御書見を遊ばす御傍にも、やはりお蠟燭立が御座いました。長い御廊下は種油に燈心を入れた網行燈が、十間置き位に立つてゐて、ボンヤリと照らして居りました。

御座所のお障子などは、諸事御儉約の御心から、夏一回冬一回張替へするだけでしたから、蠟燭の油煙で紙が薄黒くなつてゐた程で御座います。

明るい電燈を用ひさせられず、御不自由を忍ばせられながら、お蠟燭を御用ひになつたことは、洵に申すも畏い程の大御心によることで御座います。

聖上は、常にかう仰せられました。

「此の宮城は、國民の眞心から出來たものぢや、萬一電氣を引いて、衆議院のやうに漏電の結果、また火事でも起しては、それこそ國民に對して相濟まない。日本の電氣の研究はまだ幼稚なものぢや。電氣をつけたために、朕の代に二度まで火事を出したとあつては、國民に對してすまぬ。表の方は色々の關係で止むを得ぬが、内儀だけは不自由でも忍んで行くことにしよう」

此の有難い御言葉を拜し奉つては、誰か感泣せぬものが御座いませう。皇后様からも此の大御心について度々御沙汰を伺ひましたので、末の者に至るまで、火の元には随分注意いたしました。

女豎・雑仕の人たちは、寒さをも厭はず宵明けをいたし、十二時と二時との二回 部屋々々を夜廻りして、火鉢の火までも十分に氣をつけたもので御座います。

「ゆつくりと勤めたがよい」

「悍馬でさへも導けば矯め直すことが出来る。まして人間である。直して直らぬことはある



まゝ』

聖上は常にかう仰せられました。私たちが無調法を致しましても、際立つてお叱りを蒙るやうなことは、決して御座いませんでした。

明治天皇・昭憲皇太后、お二方ともそれはそれは御優しく、どんな場合にも、嚙んで含めるやうに、どこまでも私共が納得の行くやう、靜かに御諭し下さるので御座いました。それが私共に、どんなに有難く、身に沁みて感じたことで御座いませう。

畏れ多いことながら、此の事は、誰に限らず、人を使ふ上には最も大切なことゝ存じます。

私のやうな至らぬものが、とにかく二十八年の永い間お勤めの出来ましたのは、全くこのお優しい、有難い御仁徳の賜に外なりません。

聖上のお優しいことは、何人に對しても同じことで御座いましたが、とりわけ年いかぬ内豎の方々や老人に對しては、特に御眼をかけられたやうに存じます。若い時よりお勤めして、だんだんと寄る年波に、今はお暇を願ふやうになりましたも、

『まだよい、ゆつくりと勤めたがよい』  
と仰せられて、いつ迄も〜御傍に御置き遊ばされては、御情をかけさせられました。

### 草餅と櫻餅

そんなわけですから、お側には七十・八十の老人の方々が、随分多うございました。誰やらが冗談のやうに、

『陛下は、老人と子供ばかりがお好きだ』

と申しましたのも、そのわけで御座います。

愈々腰も二重になり、どうしてもお勤めが叶はなくなりますと、初めて御暇が出ましたが、隠居してから後も、何かと絶えず御いたはりになりました。

近衛忠烈様・久我通久様・中山忠能様など、御老人の方々が参内せられますと、聖上には、それは〜御満足の様でございました。

腰は二重になられ、足許も覺束ないのを、私共がお手を引いて御前に罷出たもので御座います。すると、聖上は、

『おゝ、よく参つた』

と仰せられて、ニコ〜して御迎へ遊ばされ、それから何くれとなく御いたはりの御言葉を



賜はるやら、供御のおすべりなどを下さるやらで、これら高齡の方々が、大喜びで拜辭せられ  
ました御様子には、今だに目に見えるやうで御座います。

春の日うらくとして御庭の蓬が、かすかな馨を放つて青々と萌え出づる頃になりますと、  
聖上は若い人達に、

『餅草を摘んで團子を作つてはどうか』

と仰せられます。すると皆が嬉々として摘み草を致します。

また櫻の葉を取らせて櫻餅をつくらせます。そのお團子や櫻餅を福羽美静様・元田永孚様な  
どへ賜はりましたが、それと申すも、畢竟老臣を勞はらせ賜ふお優しい大御心からと拜察せら  
れ、其の度毎に染々と感じ入つたことで御座います。

### 竹皮包のお握りに玉子焼

御若い頃には、雪の日は何よりの御慰みで、私達が雪打などして御覽に入れましたが、お  
年召されてからは御寒さも一入御感じになりますので、雪の朝には、内匠寮から凡そ三百人位  
の除雪の人が見えました。それは俄に集めて参りましたので、學生なども交つて居りました。

御庭の雪景色を拜見したくて参りましたことゝ存じます。聖上には此の様子を御覽遊ばされ  
まして、

『寒い折に氣の毒な、何か温いものをやれ』

と仰せになられます。突然の事として、温い御茶と御菓子が出ました後で、竹皮包のお握  
りに玉子焼を出すといふわけで、大膳寮は大忙しで御座いました。

その除雪の人々が御庭のあちらこちらで美味さうに頂戴してゐるのを御覽遊ばされて、又大  
層御満足の様であらせられました。

### 大内山の松の榮

大正天皇様は、申すも畏いことながら、御幼少の折から、御健にまします、明治大帝  
はもとより、御側の方々も一方ならず御心配申し上げ、朝夕、神佛に御成長を御祈り奉つた  
程で御座いました。

御大患御本復の御祝の際には、大帝には御心から御満足さうに、御酒を召上り、畏くも御嬉  
し涙をさへ拭はれつゝ、



「これで朕も安心した。彼の人が一の事があつたら、國民に對しても相濟まぬわけ、本當にどうしようかと思つたが、まあ日出度いことぢや」と御洩らし遊ばすのを承り、眞に畏れ多く思つた事が御座います。それもその筈です。多くの皇子様が御あり遊ばしても、皆御不幸にも御早世遊ばされ、後にも前にもたつた此の御一方だけなのですから、どんなにか、その御健康を御案じ遊ばした事で御座います。御大事な天津日嗣の皇子として、上祖宗に對し給うての御責任、下國民に對し給うての御宸念、實に有難き極みで御座います。

其の後、御成人と共に益々御健康にならせられ、遂に皇太子妃殿下を御迎へ遊ばす佳き日が参りました。其の折の 聖上の御満足と申せば、今まで嘗て拜し奉つたことのない程で御座いました。

御慶事の御模様は、小池道子様がいと丁寧に「千代の基」として御認めになつて居ります。誠に見事な御名文ですから、こゝに御紹介いたしませう。

### 千代の基

天地とゞもにきはまりなき帝の御さかえ、萬の國にたぐひ無きことは、たれも知る事ながら、此の大御代こそ外國人もあふぎ知りぬべし。

こゝに五月の十日を生日の足日とさだめさせたまひ、東宮の御息所を入れさせ給ひぬ。日は朗に差し登りたるあした、かけまくもかしこ所に 東宮・御息所まゐらせ給ひぬ。御告文奏せさせたまひ、御拜の御式ありて御大禮あげさせ給ふ。つぎて皇靈殿・神殿にまゐり給へり。東宮は御束帶、御息所は五衣にて神々しき御有りさまなり。久方の天の御柱めぐり合ひ給ひし神代の昔も、かゝる日にやありけんと、空打ちあふがる。廣庭には各宮・各御息所・親任官をはじめ、おごそかにさぶらひ給へり。それより内(宮城)にまゐらせ給ふ。

上(聖上)には御正装、宮(皇后宮)には中禮服を奉る。東宮は御正装、御息所は大禮服、白地に白銀もて小葵・菊など、よし有る模様うるはしう織り出でたるを奉り、御裳の裾ながら、廣き御殿も所せきまで見えさせ給ふ。御對面の式終りて、御曲衆に凭らせ給ひぬ。臺盤にそなへたる白銀の御さかなども、今の世に見習はず尊し。



上・宮より御二所に御かはらせ給ふ。世に有りがたき御式に侍ひ、仕うまつる身の宿世さへ思はれて、いとかたじけなし。それより一位の君に御対面ありて、女官の拜賀をうけさせ給ふ。

東宮の御舉動、今日將た更に夙成げさせ給へり。御息所御目色のにほひうるはしう、けだかう見奉らるゝに、みな萬代をとなへ奉るの外なし。それより御二所一つ御車にて、東宮の御所へ渡らせ給へり。供膳・御盃ども古きためしを引かせ給ひて、いとかうふしう見奉れりとぞ。四時過ぐる頃より二たび御二所、内(宮城)にまゐらせ給ひ、鳳凰の間にて、各御息所・大臣をはじめ、各國公使など、さるべきかぎり拜賀あり。其の餘は正殿にて受けさせ給ふ。つぎて千種の間に出御しまして、宴を賜はりたる人、二千餘りに及びしとぞ。

上・東宮は御正装、宮はうすみどりに白き絲もて花かづら美しう織り出だしたるに、めもあやなる御かざり添ひたる御衣奉り、御髪には金剛石の光まばゆきを奉れり。御息所は白地に白銀もて千とせの秋の菊を花やかに織り出したる御衣奉り、御挿頭の玉の光かゞやかしう見奉らる。此の日、空にはちりばかりの雲だにたゞす、風は静かにて枝を鳴らさず、此の年頃に珍しきばかりなりしは、神の御心になはせ給ひしなるべし。御車の過ぎさ

せ給ふ道々、つらなれる人の萬歳をたゞへ奉れる聲、天地にひびき渡れり。

上・宮の大御心は言ふも更なり、御父公尊(九條道孝公)の御宿世のめでたさを誰も言ひあへり。こよひ三日の夜の餅の御祝などおはしますらん。

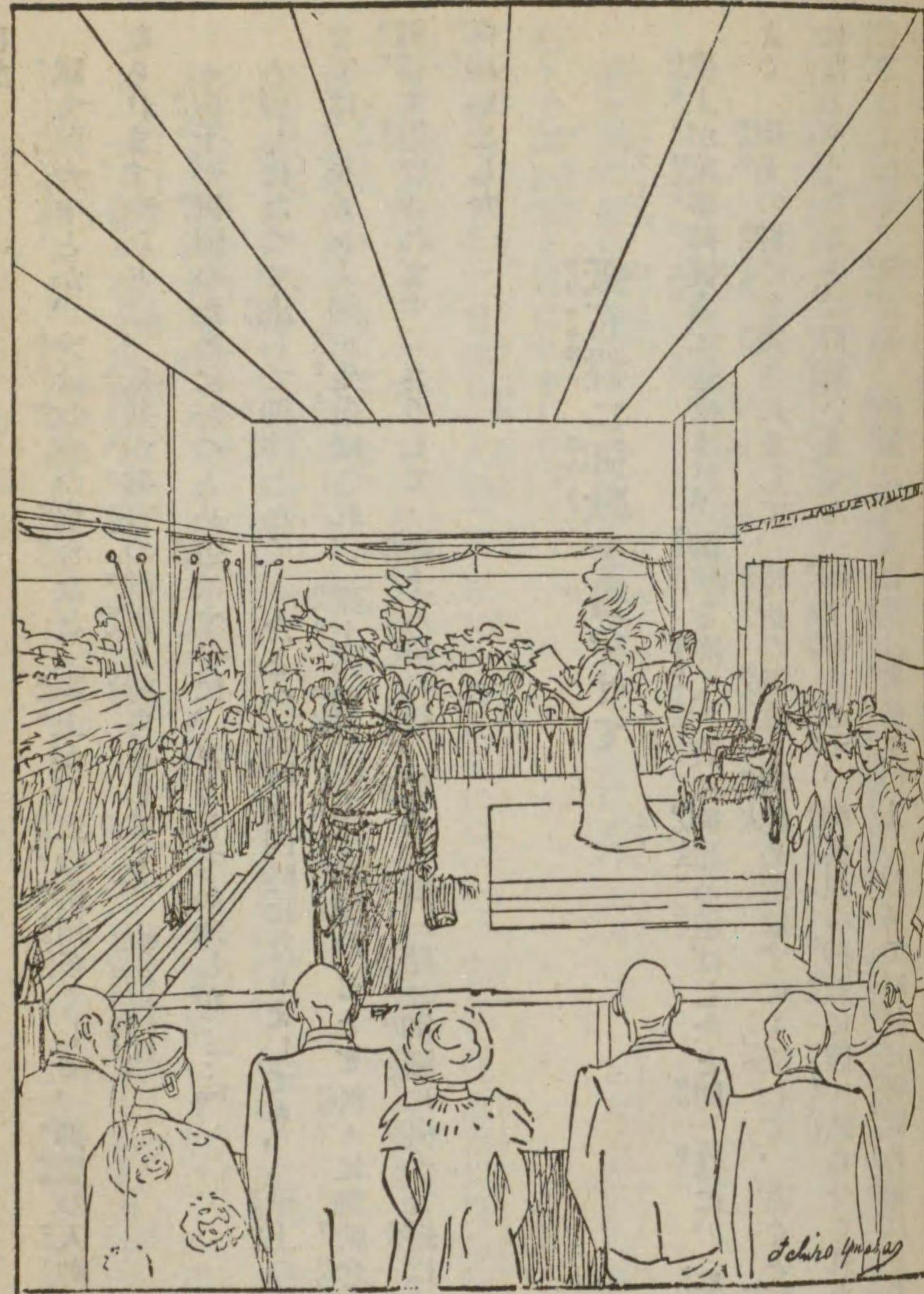
内には人々をめしつどへて御酒賜はり、大御氣色うるはしう見えさせ給へり。上の御爲政正しうましまして、たまだれのうちみだるゝ事なきに、皇室婚嫁令を世に示させ給ひ、萬世一系の御すゑ、大空の月日とともにいよくあきらけく榮えさせ給はらんことを規て給へるこそ、尊く畏き限りなりけれ。

五月のなかばつゝしみてしるす

權掌侍 道子

皇孫殿下——即ち 今上陛下の御降誕の御喜び、それも拜察するに餘りあります。御安産の御知らせの後、一日も早く殿下の御顔を御覽遊ばしたい御様子に御見受申しましたが、初の御参内は、御産服と申して三十日間は御遠慮になりますため、其の日をどんなに御待受遊ばしたか分りません。まるくと御ふとり遊ばされた皇孫様が、賢所の御拜をすまされ、御内儀で御対面遊ばされる其の日の大内山は、本當に瑞氣のたなびくを覺えました。皇孫様は御前に





昭憲皇太后赤十字社總會(明治三十三年十月上野に開催各、代表者列せしめこの時のみ)へ行啓旨御朗讀の圖

湯淺 一郎 筆

於て、<sup>おん</sup>聖上<sup>よりの</sup>御盃<sup>を御頂戴遊ばし、</sup>松竹梅<sup>に鶴をあしらつた、</sup>目出度<sup>き御人形を</sup>聖上・皇后<sup>様から一臺づつ御拜領なされて御退出になりましたが、</sup>其の折<sup>の尊く美しく御目</sup>出度<sup>い御様子は、</sup>畏れながら<sup>私共までも強い印象に残りまして、</sup>今日大内山<sup>の松の緑いよい</sup>よ濃く、<sup>今上陛下の御立派な御英姿を拜する度に、</sup>明治大帝<sup>の御尊靈も嘸かし御喜び遊ばす</sup>ことゝ、ひとり感激<sup>に堪へぬ次第で御座います。</sup>

愛の神の高き御姿

明治大帝<sup>の御高德を申し述べるにつけても、是非とも我が同胞の皆様にお知らせ致したいと</sup>思ひます<sup>のは、昭憲皇太后様の御懿徳で御座います。</sup>

昭憲皇太后<sup>様が、</sup>どんなに御淑<sup>に、御やさしくましましたか、</sup>とても筆紙<sup>では盡くされ</sup>ませぬ。<sup>全く日本婦人の鑑であらせられました。勿體ない事ではありますが、</sup>「此の<sup>天皇様に</sup>して此の<sup>皇后様</sup>——よく御揃ひ遊ばしたものと、私達御側に奉仕するものは、つね々々<sup>に申し合つて感激したことで御座います。威く雄々しき</sup>聖上と、御淑<sup>に、御慎ましく、</sup>さうして、御温<sup>に御内助遊ばされた</sup>皇太后様こそは、全く愛の神様<sup>その儘であらせられま</sup>



した。

議會開會中とか、或は政變の場合など 聖上が、表の御用多くして、御畫の入御が、御遅くなられます時などは、私共が御畫の御膳を持ちましても、皇后様は、

「聖上が御國のためにおつとめ遊ばすのに、どうしてわたしは……」

と仰せになつて決して御許しなく、たとへ三時が四時になりましても、聖上の入御になるまでは、キチンと御正坐遊ばされ、聖上の御身の上や御國のことを神々に御祈念なされつゝ、御待ち遊ばされます。さうして 聖上入御の後、始めて御一緒に御膳に御つき遊ばすのが常で御座いました。

### 紙石盤に御歌を書かせて

聖上が萬事御質素に遊ばされ、御製を奏上袋に御認め遊ばしたと同じ様に、皇后様にもよく 聖上の御心を體されまして、時折の御歌を御認め遊ばすにも決して、直ぐと紙に御認めになるやうなことは御座いませぬ。御下書は必ず、御掛硯の御蓋に態々造らせられた紙石盤に御認めになり、何度も、御氣に召さぬ所は御修正の上、始めて料紙に御認め遊ばされました。

一事が萬事、凡てを 聖上の御心と共に遊ばされたのは、畏れながら「夫唱婦隨」の模範を垂れさせられたものと拜します。

### 畏き御沙汰書

國産御獎勵の御趣意によつて、日常の御用度品は申すに及ばず、私たち女官の服地までも絶えず御注意を賜はりました。

明治二十七年三月九日、大婚二十五年の御祝典について、私たちは京都川島織物會社製の御服地を拜領致しましたが、その節香川皇后宮大夫を経て、左の如き御沙汰書を賜はりました。

婦女服制の儀に付、去る明治二十年一月十七日

皇后陛下より賜はりました思召書の御趣意は、専ら我が國産の織物を用ひ、美術の進歩を御獎勵被爲遊度御思召の處、年月を経るに隨ひ、自然と等閑に相成候 傾き有之、昨今の景況にては、本邦製の織物を用ふる者日を追うて減少し、隨つて右織物工業衰頽の状を來し、誠に我が國の經濟に取つて得策にあらざるは論を俟たざる儀に付、此の際斯の弊を洗除して挽回せざるべからず。就いては先年賜はりました思召書の御趣意をよく奉體し、服地を始め、其の



他附屬品に至るまで、成丈け國産を用ひ候様致し度思召に候。且又新奇美麗を好み、時の流行を逐ふは、人情の制し難き所よりして、殊更に異様の裁縫を好み、底止する所を知らざるに至るべきを、是又深く御憂慮被爲遊候に付、質素實用を旨とし、流行に走らず、精、國産を用ひ候様、猶又厚く思召候旨御沙汰候事  
これを拜讀するもの、誰かこの有難き思召に感佩せず居られませう。誠に畏れ多いことではございます。

繙帶卷の御いそしみ

もろこしの畑の高梁吹く風に

霜ちる夜半の寒さをぞ思ふ

國のため傷手おふ身の寫眞は

見るに涙ぞもよほされける

暑きにつけ、寒きにつけ、民草の上を御心づかひ遊ばすことは、皇后様とて聖上とお變りはござりませぬ。殊に戦争中などは、戦地にある士卒の上を深く御心配遊ばされ、傷病兵

のためには御躬ら繙帶卷までも遊ばされました。樹下範子様などの御話を承りますと、西南の役頃には、まだ繙帶が無く、石炭酸をしめして傷口に當てる綿撒糸を 皇后様御指圖の下に御内儀で造られたさうで御座います。日清・日露の兩役には、私も御側に奉仕いたしましたから、親しく御手傳ひ申し上げるの光榮を得ました。

御内儀の一室を消毒の上、皇后様始め女孺の人まで、同じ手術衣のやうな上衣を着し、昇汞水で手を清めつゝ、繙帶卷を致しました。

朝の間は神佛の御祈念や、外人との御交際で、なか／＼御忙しういらせられます。然るにその疲れの御身を以て、殊にあのお弱い御體にも拘らせられず、毎日午後一時頃から夜分御格子前まで、御卓の傍に繙帶卷の器械をお置きになり、御一心に、御國のために傷ついた人を憐れみて、孜孜として御つとめ遊ばされました。

今靜かに眼を閉ぢて當時を回想いたしますと、皇后様の繙帶卷を遊ばされる氣高い御姿が目の前に浮んで参ります。されば私たちも一心不亂、布をさく人、巻く人、包む人、ペーパー張る人と、各々分業にして、御部屋の中は一時はまるで工場のやうな騒ぎでございました。



又時折は、侍醫寮から、高階・桂などいふ侍醫の方々が見えられまして、負傷者の手當などに  
ついでに講話も御座いました。

衛戍病院へ御見舞の御供を致しました時、負傷者の一人々々の寢臺の傍まで御進み遊ばされ  
殊に重傷者に對しては長くも御涙をさへ浮べさせられた御心を拜しまして、實に勿體ないほど  
有難く存じました。痛手に苦しむ人々も、御情深い 國母陛下の御沙汰を、耳元近く大夫から  
傳へられた時には、どんなにか感激に胸せまつたことで御座いませう。

御英邁なる 明治大帝、御淑徳高き 昭憲皇太后、揃ひも揃ひ給うて、恰も天の日月の如く、  
その御光は長へに國民の仰ぎ慕うて已まぬ所、まして御側近く奉仕した私に取つては、宛ら  
の神そのまゝでいらせられます。偲どもく盡くることなき感激の源でいらせられます。

昭憲皇太后御歌

折にふれて 善き友にまじはる人はおのづから身のおこなひもたゞしかりけり  
夫婦有別 むつましき中洲にあそぶみさごすらおのづからなる道はありけり

皇化に霑ふ臺灣と南滿洲

子 爵 後 藤 新 平

身に餘る光榮

自分は、草莽の微臣であるが、明治天皇に咫尺し奉ることの出來たのは、日清戦争後で  
あつた。即ち大本營が東京に移されてから、臨時陸軍検査部事務官長として、臨時陸軍検査  
部の編制並に建設施行の要項を奏上し奉る光榮を荷うた。文官としては、異例であつたので  
自分も、感激して、御前を退出した。

それから後のことである。

『宮内省に來ることがあつたら、主馬寮に立ちよらないか』

藤波言忠子からさう傳言があつた。で、事の序に寮に子爵をたづねた。

『君が、臨時検査部のことについて奏上申し上げた際、非常に光榮に浴してゐるが、誰から



か聞かなかつたか』  
突然の問ひであつた。

『いや、承つて居りませぬ』  
すると子爵は、容を正して、かう言つた。

『陛下は、今日検査部の事について、後藤といふのが来て話したが、よく事情が分つた。あの男は相馬事件に關係して、出獄したばかりださうだが、どんなのか、と私に御下問がありました。よつて、私は、大體知つて居ることを申し上げると、さうか、過を觀て斯に仁を知るといふ話があるが、さういふ奇禍にかゝつて、初めて瓦と玉とを別つことが出來たのは、本人に取つて不幸の様で又幸福といふものかなと仰せられて、御笑ひになりました。それは君として、非常な光榮のことではありませんか。いつか話をしようと思つて、つい機會がなかつたので、今日改めてお話しした譯であります。』  
自分は、此の事を承つて、餘りの畏れ多い御言葉なので冷汗思はず背をうるほした。私事にわたつて、恐れ入る次第だが、此の事は、自分の終生忘却し得ざる事で、今以て腦裡に烙きつけられて居る。

「さうか、うん〜」

ついで、自分は、大阪博覽會に於て、臺灣の事情につき、親しく御説明申し上げた。陛下は、「さうか、うん〜」と仰せられて、莞爾と御笑ひ遊ばされてゐた。

その時は、田中光顯伯が供奉して居られたが、その中に、京都で伯にめぐりあつた。

『君は非常に光榮だぞ』

伯は、いつもの率直な調子で、いきなりさう言はれた。

『どうしたのですか』

『いや、此の間、博覽會の説明を申し上げられたが、陛下は、御感に入つて、「さうか、うん〜」と仰有つた。あんな勅答を得たものは、先づないと言つてよろしい、實に大變なことで、君はどう感じたか』

かう言はれた。

『わたしは、たゞ恐縮して居りましたので、別にどうとも感じませんでした』

『さうか、それなら僕が傳へる、陛下は、「あれはなか〜臺灣のことは勿論、經綸に對し



て答へてゐる様だ」と、かういふ御言葉があつたのだ』  
伯の御言葉を承つて、自分は心中深い感激に打たれた。

### 三國關係の中點

それから自分が、南滿洲鐵道總裁に任ぜられた際、特別に御沙汰を蒙つた。世に親任官はあり、勅任官はあるが、辭令を拜する時に、御言葉を賜はるといふことは、元老は、姑く措き他には先づない。その時、陛下は仰せられた。

『南滿洲鐵道總裁の職務は、重大であつて、又その困難な事に處するに當つては、深甚なる注意を要する。殊に三國關係の中點に位して居る故、各國民との間の意志の疏通に最も慎重をとるやうに努めよ』

隣國に對する重大關係に御軫念遊ばされた結果と拜察し奉るが、自分は重ねぐの光榮に唯感涙の胸に迫るを覺えた。

その後、自分は、南滿洲鐵道に關する、十年計畫の統計圖解を色分けにして作製し、就職當時、乙夜の覽に供へたことがある。

即ち、陸軍時代の經過、大藏時代の經過、及び自分就職して後の經過、都合三つのものと南滿洲鐵道會社の行政・産業・經濟總べての拓殖の豫算並に收入の全豫算に對する經綸を一目で分るやうに色分けにしたものである。それから半年後に、實際との比較をしたものを更に捧呈した。

自分が遞相となり、後任の中村是公君が、又、自分の經綸施行の跡を見るべき圖解を作つて上覽に供へてゐた。すると、陛下は仰せられた。

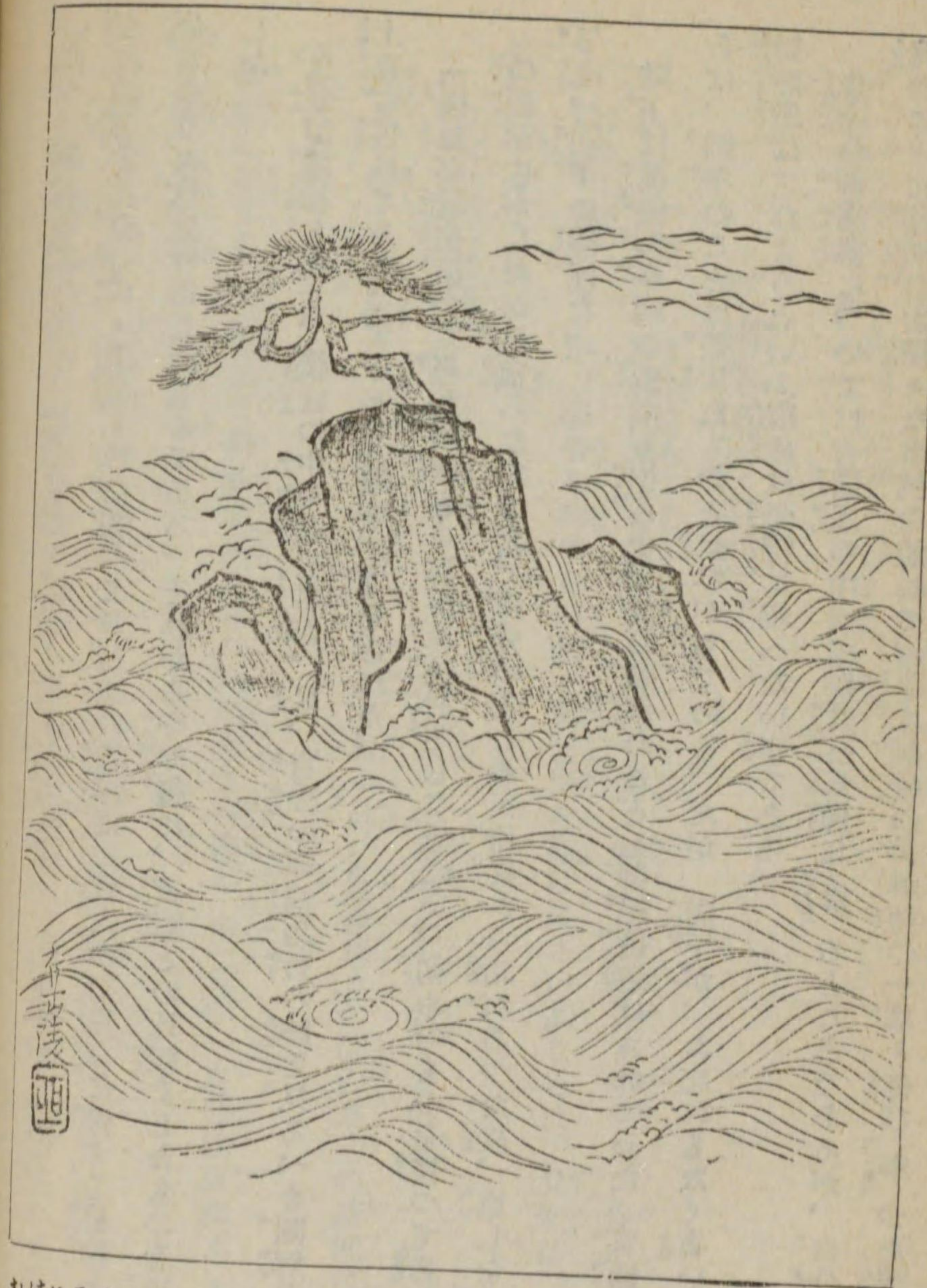
『後藤が最初持つて來た圖解とこれを比較對照して見たい、初めのものを持つて參れ』

侍従がさがしたが見當らなかつた。自分のところへ侍従から話があつた故、寫しを持參して早速、闕下に捧げた。

陛下は萬機御多端の折にも拘らず、此の圖解のことを御記憶遊ばされてゐた。普通のものならば、圖解のことは些末なものと思ひがちである。だが、陛下が、お忘れもなく古いものと御對照遊ばされようといふ叡慮は恐懼に堪へない事である。

先帝の御高德については、國民のすべてが欽慕景仰し奉るところであるが、自分はたゞ自身のことに関係した種々な事柄を通して、洪大無邊の御神徳の一端を偲び奉つた譯である。





孤島松の沖きかた浪 松島孤

中村岳筆

# 大帝を偲び奉りて

元侍従子爵 日野西資博  
宮中顧問官

## 英照皇太后様

明治十九年、十七歳の時から側近に奉仕する光榮を荷ひ、爾來崩御に至るまで、二十七年の久しきに及んで御恩寵を忝うした私が、大帝の御高德を偲び奉る時、特に感ずる事は御孝心の深くあらせられたことである。

明治六年五月五日、皇城炎上の後は、大帝は、赤坂假皇居におはしましたが、英照皇太后様のまします青山御所へは、御庭傳ひで成らせらるゝ事が出来るので、御政務の御多端の際にも、度々、皇太后様の御許へ、御機嫌奉伺を遊ばされて御いになつた。

大帝をお迎へ遊ばす皇太后様の御つゝましい御様子、御挨拶遊ばされる大帝の敬虔なる御態度、此の御二方の御親子の御間柄には、如何にもわざとらしからぬ御温かさがあふれにあふ



れて、私たちは覺えず感涙を催したことであつた。

夕刻の御奉伺の際には、屹度御夕食を御一緒に遊ばされ、私共にまで、傍の御卓で御陪食を賜はつた。そして御食事中に於かせられての御親子の御様子を拜見して居ると、如何にも和氣霽々たる御有様で、崇高なるそして、何とも言へぬ神聖な御態度に、景仰の情のそゞろに湧を覺えた。ツマリ天子としての最高御人格が、まのあたり孝子の情として表現遊ばされるので、到底拙き筆、拙き口に萬分の一も言ひ表し奉れぬ御親しさ、御床しさであつた。暑いにつけ寒いにつけ、皇太后様の御健康を御案じ遊ばされ、珍しいものがあれば、かならず先づ皇太后様にお差上げになつて御出でした。丁度、皇太后様御大患の時は、折悪しく、大帝は御風氣の御氣味で御假床にあらせられたが、醫師のお留め申すのもお構ひなく、押して御見舞にいらせられた。然るに御手篤い御介抱の御甲斐もなく、皇太后様には風寒き一月十一日、(明治三十年)終に崩御遊ばされた。その時の大帝の御嘆きは申すも長い極みであつた。やがて京都泉涌寺に葬り奉つたが、大帝はその四月より九月まで京都に御滞在遊ばされ、容易に東京へ御還幸の御模様が見えなかつた。蓋し皇太后様御追慕のあまりに京都を離れさせ給ふに御忍びにならなかつた御事であらうと拜察し奉つて、如何にも衷心感激に堪へなかつた。

「使へるものは使へるだけ使へ」

又、大帝の御儉素にわたらせられた事も、私共の常日頃畏れ多い事であると感激に堪へなかつた次第である。

御机の上の御硯箱は、鹿兒島産で、竹を二つ割にして中を黒塗にせられた御鹿末のものであるが、御在世中何十年となく御使用遊ばされた。

御墨の如きは、磨り減らし遊ばされて、手に墨汁のつくまで御用ひになり、御筆も穂先の磨り切れたのを厭はせ給ふ御様子もなく、永く御使ひになつた。

各省から奏上する重要書類其の他を御入れになる御座所に在る御箱は、御ワイシャツや御襦袢を入れた白ボールの空箱を御内儀から御持ちになつて、御代用遊ばされた。

御座所の如きも一見何等の御飾とてなく、御床間に美術畫をおかけになる事があるが、それも美術奨励のための御買上品で、御裝飾の爲ではなかつた。

又御机の上に緋羅紗のテーブル掛がかけてあつたが、いつといふ事なく、御煙草の火が落ち、澤山の焼痕が出来てゐた。それとても遂々御取替を御許しがなかつた。殊に日清の役に大本營



を廣島に進め給うた時は、一層の御儉素にわたらせられた。

御軍務を櫛はす御部屋も御寢所も一つ御室で、お目覚よりお寝みまで、決して肋骨のついた大元帥の御軍服をお脱ぎ遊ばすことなく、それも、初めから同じ一着の御軍服を召された限りであつた。その爲、終には御服の裏が破れて來た。

「御服の裏が破れて参りました。新しいのとお代へ遊ばされては如何で御座いませう」  
斯う申し上げても、なかく御許しがない。

「まだよい、今夜脱いでおく故、修繕つておけ」

さう仰せられる。

やむなく御旨を承けて、私は度々無器用な手つきで針をもち、御軍服の裏をつくろつた。初めの程は、針がうまく運ばず、随分困難をした。それでもどうかして、覺束ないながらも縫ひ上げて、普通の矢竹で作られたお粗末なお洋服掛にかけておいた。

「日野西、お前、仲々裁縫がうまい」

つぎの朝、御賞めの御言葉を下さつて、又々其の御軍服を召される。

一事が萬事、廣島行在所御滞在中は、本當に戦地にいらせられるお心掛けで、凡ての事を律

し給うたのである。

大帝は常に、

「使へるものは使へるだけ使へ」

と仰せられたが、これは我等國民が、造次にも顛沛にも忘れてはならぬ聖訓である。殊に今日の様には人心が日々に弛廢し行く有様を見るとき、大帝の御言葉はいつでも警鐘の如く我々の耳朶に響く。

### 功臣の子孫

今も世にあらばと思ふ人をしも

この曉の夢に見しかな

大帝が、國民一般に對して常に海嶽の御仁慈を垂れさせられたことは、今更申すまでもないことであるが、殊に功臣を思はせ給ひ、又その後を憐れませ給ふことが最も厚かつたやうに拜察する。例へば維新の鴻業を輔翼し奉つた功臣の如き、後々までも御心に留めさせられ、常に有難き御沙汰を賜はつた。



軍人に御陪食仰付けられる時、山縣・大山などの元帥連を御相手に、大帝の御得意とせらるゝ御話題は、西郷南洲が、九州御渡海に御供した時の逸話や、習志野行軍の時に妙な風をして馬に乗つた事などであつた。一旦は賊名を負つたけれども、南洲の忠誠は忘れ兼ねさせられたものと拜察する。

侍講元田永孚氏の功勞を思召されては、

「元田の親戚のものを側へ置きたい」

と宣はせられ、熊本高等學校の教授であつた落合爲誠氏を態々御召しになり、御側近く御用ひ遊ばすなど、嘗に功臣を思はせ給ふのみならず、推してその子孫に及ぼし給うたのである。聖恩枯骨に及び、又子孫に及ぶ。實に有難い極みである。

大帝の御信任厚かつた伊藤博文公がハルピン遭難の報の達した時は、私は丁度宇都宮地方に於て行はせらるゝ大演習地の檢分に旅立つ時であつた。一旦は參内して天機奉伺を致さうかとも思つたが、御命を奉じて出發する身であるから、たゞ命を畏んで其の儘に旅立ち、二三日後に歸京した。で、その復命と共に、

「伊藤はとんだ事で御座いますして、謹んで天機を御伺ひいたします」

と申し上げると、大帝は、いつも御同感の時に遊ばさるゝやうに、

「ふん」

と仰せになつたきり、他に一言の御言葉もなく、如何にも困つた事だといふ御様子であつた。諺にも「言はぬは言ふに勝る」と。私は 大帝のこの時の御胸の中を拜察して、眞に恐懼に堪へなかつた。

### 父君に成り代らせて

遠く御父君の許を離れて御遊學の李王世子殿下（今の李王殿下）に對しての御心づくしは又格別でおはした。

岩倉具定公を御教育主任に定めさせられ、絶えず種々の御注意を公に御沙汰あり、御父君に代つて 幼き殿下をいたはらせ給ふ御懇情は、お側で拜する 私共も涙ぐましい感激に打たれた。されば世子殿下御參内の折などには、御自身、いろ／＼の物を御選び遊ばされては御下賜があつた。世子殿下に於かれても、大帝を御父君の如く思召され、その間柄は全く御親子の御親しさに拜し奉つた。



二つとないもの

これは自分に關すること、恐縮に堪へないが、大帝がいに寛仁大度にましましたかを窺ふために申し述べ。

土方(久元)伯が宮内大臣奉仕中のことである、大帝は小石川の伯爵邸へ行幸遊ばされた。

伯は非常に光榮に感じ、心からいろくくと御慰め申し上げた處、大帝にも御満足に思召され、夜遅くまで打解けて御物語があつた。さうして夜半頃還幸仰出だされた。

その時天覽に供された品々の中に、天狗の面の形をした御盃が大層御意に入つて、(多分、鼻があるために下に置かれず、どうしても飲み干さねばならぬ所が御意に入つたものと見える)御所望になり、御供の私に、

「此の盃は二つとない珍らしいものだ、大切にして持ち還れ」

との御命。私は御沙汰通り頗る用心して御預り申し上げ宮城に御供した。表御座所に御着の際にも、

「よいか、二つとない盃ぢや、大切に持つて参れよ」

と重ねて御注意の御沙汰があつた。よく御意に召したらしい。私は更に注意に注意を加へつゝ表から御供して参つた。すると、今一步で御内儀に入らうとする時、どうしたはずみか、あまり緊張してゐたためか、この御大切な御盃をパタリと落してしまつた。無論御盃は二つに割れた。

一瞬間前に御注意を戴いた許りであるのに、自分は何たる粗忽者かと、自責の念に堪へられず、恐縮を通り越して、暫らくはたゞ呆然として立ちつくしてしまつた。

次の瞬間には、百雷の如き御叱りを蒙ることを意識した。その私の耳朶に響いたのは、

「日野西、心配するな。明日また土方に言つて、代りを探してもらはう」

このお優しい玉音であつた。私は夢でないかと思つた。その時の私の感慨、何と申さうか、あまりの勿體なさに、熱い涙が滂沱として下つたのであつた。

明くる日、土方宮内大臣を召されて、

「昨夜折角もらつた天狗の盃を、歸りに一寸粗相して、瑕つけてしまつた。洵に惜しい事をしたよ。何か變つた面白いものがあつたら呉れないか」と恰も御自身の御粗相のやうに御話し遊ばされ、私のことなど御一言も仰せられなかつたと



傳へ承り、私は又更に御仁慈の深きに感泣した。さうして一層慚愧に堪へなかつた。

### 御墨の乾く間

勳記御親署の如きも、毎日々々表に於ては申すに及ばず、御内儀に於ても、御政務の間々に、丹念に御筆を執らせ給ふのであつた。國の爲に盡くしたものを、一刻も早く喜ばせてやり度いと、の厚き大御心から、御休息の時間をさへ、かうして厭はせられぬのである。表では出仕の者(元の内監)、御内儀では女官が御墨を乾かすお手傳を申し上げた。御自身も彼方此方とお忙しさうに御席を立たれては、御墨を乾かされるのであつた。

平素とてもその通りである。まして日露戦争後の論功行賞の際の御多忙さは、實に申すも賢い程であつた。勳三等功五級以上といへば實に夥しい數であるのに、大帝は御苦勞に思召すやうな御様子などは露ばかりもおはさず、却つていつも御樂しさうに御筆を執らせられた。大帝の御心の中では、かくまで國のために盡くしてくれたものが多いかと、必ず御満足に思召したに違ひないと拜察し奉るのである。

### 洪大無邊の御聖徳

これを要するに、側近にあることの餘りに長かつたために、誠に勿體ない事ながら、遂には御徳に忤れて、御在世中は常のやうに思ひなしてさへゐた事も、今にして偲び奉れば、實に御一言御一行、悉くが洪大無邊なる御聖徳の發露であつたと思ふ、我々は平生太陽の恩を受けながらその恩を知らないでゐる。大帝の御聖徳は恰も太陽のそれと同じことで、あまりの有難さについ心付かすにゐるのではないかと、さう思ふと實に恐懼に堪へない。

たゞ私としては、御最後の御病床に至誠を盡くして、御看護申し上げる事の出來たのは、如何にも心残りのない事であつた。今御陵に程近い京都に閑居し、大帝のありし昔を偲び奉り、謹んで御聖徳の一斑をお傳へした次第である。

ル・ウユ・デ・フランセ紙(佛國巴里)曰く——大帝四十五年間の御治世中に於ける絶大なる進歩發展は全世界の不可思議とする所である。陛下御即位以來の日本の歴史は吾等歐人の常に金言と思ひたる白哲人種は他の人種に優ると言ふ持論を全く打破して一言の辭なからしめた。云々。



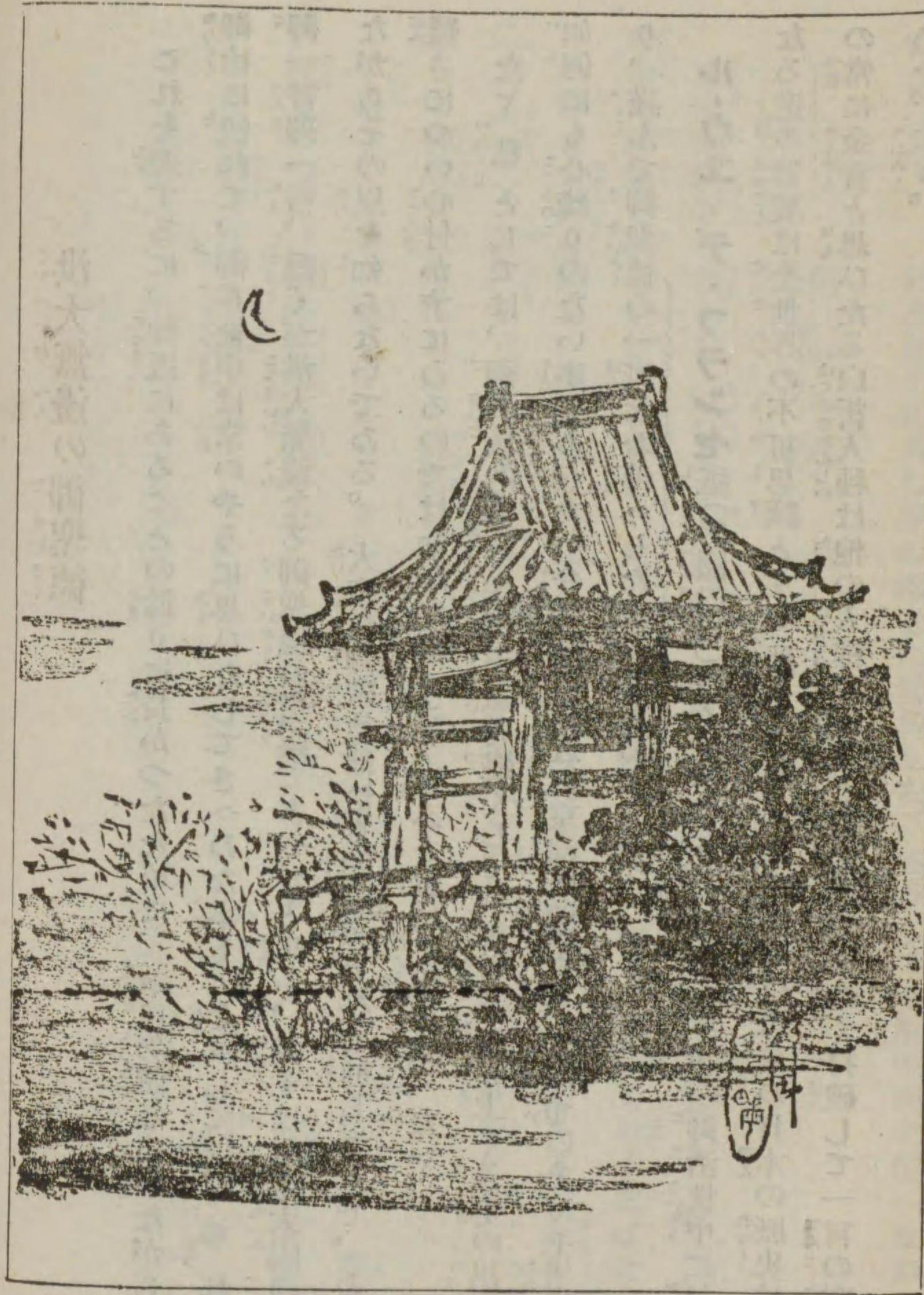
先代、慶喜、大政を奉還するに當り、帝室の格別なる御恩遇を賜はると共に、當時六歳の幼年の私——田安龜之助——に對して、特に家名新立の有難い御誕を賜はり、爾來身に餘る御優遇を忝うし、天恩の優渥なる、衷心感激に堪へざる所であります。

不肖家達、祖先家康の遺訓を奉じ如何にもして報效の誠を致し、聖恩の萬一にも報い奉りたいと、日夜孜々として微衷を竭し、敢へて失墜なからんことを努めては居りますが、何分にも、徳薄く才足らず、未だその萬一だに答へ奉ることが出来ず、洵に恐懼の至りに存じます。

私は、宮内大臣や、侍從職の人たちのやうに、日常、大帝のお側に奉侍する身ではないから、大帝の御日常等について、親しく拜し奉るといふことは出来ませんでした。併し御

赫として萬世を照らす

貴族院議長 徳川家達



なか音の鐘ゝるらやひ思へささ寒の人むらく撞てみふ霜

筆畝秀上池



在世中の御高德の數々は、時に方り折にふれ、今なほ常に念頭に浮んで、追慕措かざる次第であります。

中にも明治二十年の秋、龍駕親しく小邸に臨幸の光榮を得たことは、一族の名譽として永久に傳へて感佩する所であります。(一昨年火災に遭ひました後、假住居を致して居る所は明治二十年 聖上・皇后・皇太后陛下の行幸啓あらせられた所で、其の事を子孫に忘れさせないやうに此の庭に記念碑を建てました。)

殊に明治四十五年五月の頃、麝香間祇候として御陪食の榮に浴したことは、後より思へばそれが最後の御賜宴であつただけに、當時の御模様など、とりわけ歴々と印象に残り、私に取つては誠に盡きせぬ思出であります。

御健なりし御顔といひ、御元氣に満ち給ひし御動作と申し、今尙眼前に髣髴として思ひ浮べ奉ることが出来ます。皇族の方々、宮内大臣等をも交へさせられての御席上、四方山の御物語、高らかな御笑ひ、それ將た耳朶に留まるが如く覺えて、嗚呼、あの時が、私の親しく拜した最後であるかと思ふと、感慨無量おのづから眼瞼の濕ふを禁じ得ないのであります。

○

國の内外を問はず、人皆、明治大帝と崇めたてまつるも決して偶然でない。實に、我が明治天皇こそは、古今を通じ世界に比なき聖天子にあらせられました。然るにその御治世の隆昌を記念し奉るべき御即位五十年記念博覽會の準備も略成つた時、突如として神去りましたといふことは、國民をして如何に悲歎の涙にくれさせたことでありませう。英國のピクトリヤ女王の如きは、即位六十週年の祝典をも擧げさせられたのに、天、此の聖天子に寶壽を假し給はず、返すくも痛惜に堪へない所であります。さりながら、大帝の聖徳は炳として日星の如く、赫々として後世を照らし給ひ、これを仰ぎ、これを慕ひ奉る國民は、桃山の御陵に、代々木の社頭に、御世のまゝなる 大帝に事へまつるが如くに集ひ聚まること、年を経て愈々多きを加ふるのみであります。御徳望の盛且大なること此の如きは、蓋し世界に比なき所と存じます。

げに 明治天皇は神ながらの聖天子にあらせられました。我等はその御高德を偲び奉ると共に、これが報效を期することを忘れてはならぬのであります。



## 明治大帝の印象

米國 文學博士  
神學博士William Elliot Griffis  
William Elliot Griffis

## 初めて九段で

私が初めて日本へ来たのは、忘れもせぬ明治三年（一八七〇年）も押しつまつた十二月二十九日であつた。在京僅かに七週間、私は福井藩の新教育制度創設の委囑を受けて福井へ行つたし、また 大帝は餘り外へお出ましもなかつたので、かたぐ御顔を拜する機會がなかつた。當時東京にゐた薩摩武士などは、朱鞘の大刀を横へ、腕をまくりあげて市中を練り歩き「いつでも来い」と言はんばかりの權幕で、我々の目には随分亂暴に見えた。西洋人は拳固で闘ふが、サムラヒは直ぐ刀に訴へるのだつた。で、私など狭い通路で彼等に出會ふことは本當に厭だつた。彼等も亦新政府の役人たちを好んでゐないらしかつた。

福井から歸つた後は、時々 大帝を拜することが出来た。質素な一頭立の馬車で、よく九段

あたりをお通りになつた。或朝なぞ、私が妹と二人で九段を歩いてみると、大帝が通御になつたので敬禮をすると、有難くも 私共に御命をさへ賜はつた。私は誠にお優しい、御友情に厚いお方だと直感した。

當時私は大學の理學部長を勤めてゐたが、間もなく、宮中に於て拜謁を仰付けられた。その時 大帝は、繪で見るやうな古風な装束をお召しになつてゐた。新政府の人々も羽織に袴、ただ靴だけは西洋の物を穿いてゐた。拜謁は二三分で終つた。

その次に 大帝を拜したのは、一ツ橋御門外に新築された大學校舎の落成式に臨幸になつた時である。今では其の跡に家屋が立ち並んでゐるが、その頃はたゞ茫々とした廣場であつた。

その時、大帝は洋服をお召しになつてゐた。尤もそれは今日我々の拜するやうな御服ではなく、海軍士官の着るやうな紺服であつたと記憶する。

私は 大帝のお側に坐つてゐたが、御訓示が終ると、侍従を通じてその御草稿を私に賜はつた。私は今もなほそれを大切に保存してゐる。

私が 大帝から謁見を賜はつたのは、前後六回であつたから、その御顔や御體格はよく熟知してゐる。又宮中近侍の人々から御日常の事をも聞くことが出来た。尤も近侍の人達は餘り多



く語らぬ方だつたが、何時でも 大帝を御褒め申して、至尊たるの御位は別として、御優しい御親切な御方だと、皆が言つて居た。我々西洋人の大部分は、大帝は支配者で在らせられるばかりでなく、御同情深い人間味の豊かな紳士であらせられると考へて居たらうと思ふ。私は明治三年から明治七年まで日本に居たが、大帝を初めて拜した時は、御歳十八歳であらせられたかと記憶する。普通の日本人よりは高い方で、私と同じ位の御身長と拜した。私は當時廿八歳であつた。

パークス卿の遭難

明治大帝が始めて東京へ御出でになつた當時は、神官が非常な勢力を有つてゐて、神道の復興が行はれたやうであつた。兩部神道を廢めて、佛教を神道から分離した。それが爲一部の佛教徒は非常に怒つた。或大晦日の晩に、僧侶が、分離された芝の兩部寺院に火を放つて復

讐し、大火、天を焦したことを覚えて居る。大帝が東京で初めて英國公使に謁見を賜はつた時、式後直に、淨を受けられたといふのも、神官が勢威を振つて居たからであらう。お淨といふのは沐浴と燻蒸とによつて元の清淨に復される式であると聞く。これによつて見ても、古い傳統の下に育てられた人達が、新法式を採用するにはどれ程の困難があつたかが想像されようと思ふ。いにしへの信念では、天皇は天の子であらせられるから、外國人と會ふのは自らを汚されるものと考へられて居たのである。是を思ふとき、その後に於ける日本人の自由精神の進歩は、何と偉いものではないか。

京都に起つた歴史的一例が思ひ出される。私が日本に來た一年前の明治二年一月の事である。京都に於て初めて 帝が外國公使たる英國のハレー・パークス卿に拜謁を賜ふことになつた。初めての御謁見と言ふので、パークス卿は十二人の騎馬護衛兵に護られて出かけた。とある道を曲ると、突然現れた二人の宗旨狂は、一杯機嫌で、兩刀を引抜いて切りつけた。何が何やら分らぬ間に、九頭の馬と十一人の兵士は負傷して居た。——時に卿を此の難より救つたのは、大人物であり忠臣であつた後藤象次郎氏であつた。始め氏は何の騒か一向見分が付かなかつたが、それと知るや、直ちに馬を降りて混亂の中へ飛込み、一人を首斬り、他を捻ぢ



伏せて捕縛した。

此の捕虜の自由によると、天皇が外國人に謁見されることは至尊の恥辱であるといつて、それを喜ばない者たちが集つて、外國人の殺戮を企てたのだといふ。當時神官等は、西洋人を野蠻人と思つて居たのである——彼等は我々に學ばねばならなかつた、と同様に我々も彼等に學ばねばならなかつた。

とにかくパークス卿は此の出来事で、全く度を失ひ、参内を止めて家に歸つた。數日後アメリカ公使が拜謁を賜はつた時は護衛兵なしで参内した。

### 國事多難の時

アジア諸國民は征服されるか、或は屬領にさるべきだといふことは、當時歐洲の主權者達の間の定説となつてゐた。ドイツが臺灣を購入しようとして企てた事もあつた。然るに一方、英國の政治家及びモンロー大統領によつて唱へられたモンロー主義は、アメリカ諸國民は征服せらるべからずと説き、歐洲諸國民のアメリカ侵襲を停止すべき時が來たと主張した。さうしてアメリカに於ける此の主義は、遂にアジアにも推し及ばさるゝに到つたのである。

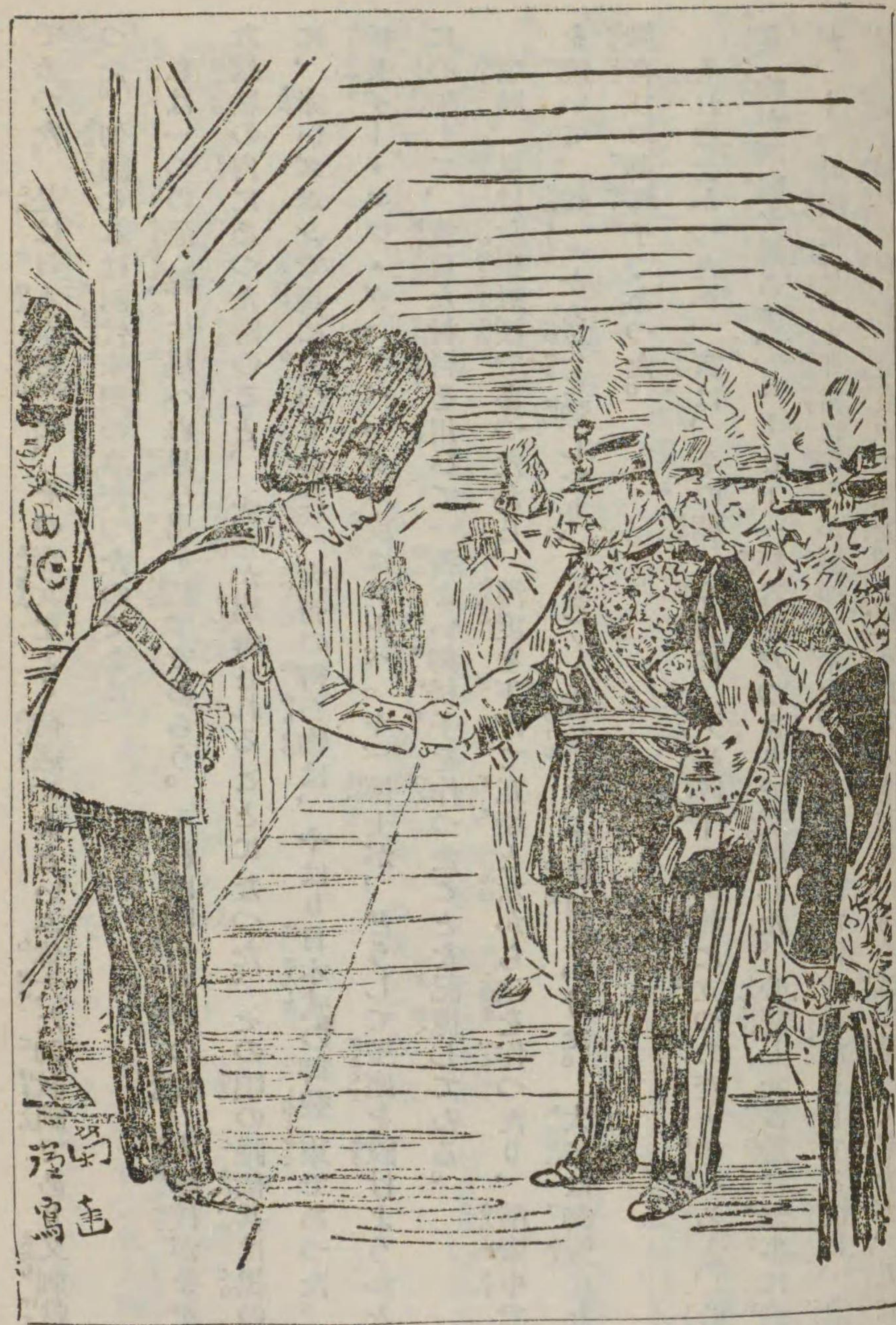
此の主義はアメリカに於て非常に勢力があつたが、その結果、ファイルモアが大統領となつた時には、

「モンロー主義は支那及び日本に適用されねばならぬ、歐洲がアジアを征服する權利は無い」と大いに主張したものだ。一八五九年タウンSEND・ハリスが日本との條約を作つた時、「日本は歐洲人より征服さるべきでない、獨立國である、合衆國は日本の被征服排除の決定を支持するものである」

といふ意味が記載されて居た。最近、鶴見教授が米國に於ける講演其の他を集めて出した本にも、此の事が明らかにされてゐる。

ファイルモア以後の大統領は、此の主義を更に支那に擴大し、日清戦争中にも之を主張した。日本は滿洲を要求し、これに鐵道を敷設の機會があつた。茲に於てドイツ・フランス・ロシアは聯合して反對し、英國はそれに加はらなかつた。日本の武裝せざる小さな商船が、支那使節と會見するため芝罘に向つた時、獨・佛・露の軍艦が居て盛に發砲したので、此の小さな平和船は砲煙の中を潜り抜けねばならなかつた。かくの如くにして彼等は、日本をしてアジア大陸所有の考を抛棄させ、大帝は滿洲を取らないと約束した條約に署名されねばならなかつた。





明治三十一年新年橋頭ノコトニ殿下をお出迎へ遊ばさる  
 小山榮達筆

アメリカはこの三國の處置に對して大に激昂し、日本は次の戦ひの準備をしたが、遂にロシアとの戦争となつた。

若い 大帝が御學びにならねばならぬ事は實に多かつた。その皇位に即かれた時は、御先祖方の場合と違ひ、決して太平の世ではなかつた。前述の通り新舊思想の衝突から日本は實に一大危難に遭遇してゐた。それから引續き日清・日露の外交上に於て、悪くすれば日本は屈辱の危険に直面せねばならぬ時であつた。清國との戦争が開かれた時、大帝は樂しき東京を捨て、戦場の兵士に近づかんがために、海陸の兵士を慰撫し激勵せんがために、廣島に行幸されたといふ事は、その國民に取つて、驚くべき模範であり靈感であらねばならなかつた。

恐れ入つた失敗

私は馬上に於ける 大帝の御英姿を拜した事は無かつた。然し御即位の初めから、時々宮城外にお出ましになつた。宮廷の詩人や女官たちを御相手に宮殿内に止まる事をなさらず、國民が仰いで龍顔を拜する事のできるやうに。

その中でも一つ大きな事は、美しい馬車が新調されたとき、皇后様と御同乗遊ばされた事



であつた。是は日本の男子に、その妻女をよく待遇せよといふ偉大な御教訓であり又刺戟であつた。勿論これは前代未聞の事だつたのである。

私は一つの恐縮に堪へぬ思ひ出を話すであらう。それは明治五年の春、大學校がまだ粗末な建物の内にあつた時のこと、大帝が臨御されることになつた。その頃の護衛兵は黒の上衣に、赤いズボンで馬に乗つてゐた。大帝の御召物は、やはり日本式の御装束であつた。時の校長デー・エフ・ヴァーベック（或はフルベッキ）博士が、どうして玉座を設けようかと大いに心配して、貴重な材料を用ひて一番よい御椅子を作つたことを記憶してゐる。

當時、私は化學教授であつたから、温度を下げて瓦斯と水から氷を作つたり、酸素中で鋼鐵を焼いて、煌々たる光を發したり、いろいろ實驗をして御目にかけて。大帝は御覽になつて御喜びの御様子であつた。

それはよかつたが、實は、その朝、今日は天皇陛下の御前に立つのだと考へると、心配で食物が咽喉を通らず、コーヒー一杯呑んだつきりで登校した。心配した實驗は無事に済んだが、十一時頃になると非常に御腹が減つて來た。そこで生徒が御前講演をしてる間に、急いで家に走り歸つて何か一寸食べて來た。式場へ歸るときには、もう式が終つて居たが、私はそれ

を知らなかつた。長い廊下を急ぎ足で行く。途端、大帝がもう此方へ歩いて御出でになる所であつた。丁度、小さい廊下から廣い廊下に出る曲角のところで、あはや、大帝にぶつからうとした。私は危く侍従の者に斬られる處であつた。咄嗟の場合、はつと思つて恐縮したが、幸ひその横に小さな戸があるのを知つて居たので、其所から素早く庭に出て、一目散に家に歸つて隠れて居た。——去る水曜日（昭和二年五月）には、今上天皇陛下に拜謁を仰付けられ、敬拜の後、靜かに後退りをして御前を退出したが、其の時は、そんな禮儀の暇がなかつたのである。本當に恐懼の外なかつた。

然るに後で聞くと、狂人が御通路を切つたといふので、校舎の内外を搜索したさうであるが、誠に御寛大の御處置に預つて、今もなほ有難く、感激に堪へぬ次第である。

### 君臣ごもに偉大

明治大帝の御特質は寛容と同情心であつたと思ふ。此等の點について多くの人の話をも聞いて見たが、誰も皆お思ひ遣りの深い立派な人格のお方だと話して居た。世には偉大な人物でも随分亂暴な人がある。しかし 明治大帝は偉大性と同時に人間味が豊かであらせられた。その



點が痛く私の心を惹いたのである。その御治世が斯くも長かつたといふことは日本の歴史中にあつても驚異すべき特徴であるが、世界においてもこれほど長く治世の續いた主権者は少い。政治上に大變化のあつた時代に當つては殊にさうである。

明治大帝は幾多の偉人を引附けられたが、それは大帝御自身が偉人であらせられたからである。全く新政府設立の當時、大帝の周圍に、あれ程多くの有力者がゐたことは確に驚異であつた。彼等は異常な人であつた。年が経つて見るからさう思へるのかも知れないが——然しその爲ではないと思ふ。彼等はみな王陽明哲學の信徒であつた。その上に外人教師ヴァーベック博士といふ利益を持つて居た。王陽明哲學は餘り進歩的であるために支那では深く根を下した事はないが、日本では私の所謂「五十五人の明治創設者」の悉くがその信奉者であつたと思ふ。

私 はこゝでヴァーベック博士のことを一言せねばならぬ。博士は四十餘年間日本に居り、明治天皇に對しては非常な敬意の念を抱いてゐた人であり、日本の最良の友人であつた。すべての文化の移植について、明治の新政治家に、親切な獻策をなしたのは博士であつた。また多くの人材を養成し、博士の建言によつて日本の使節が歐米へ派遣されたとき、その四分の三ま

では博士の養成した弟子であつた。

博士の葬式には、日本皇室から其の費用にと金貨五百を御下賜になり、近衛兵二中隊を護衛兵として遣はされた。東京市は墓地を贈り、その門下生は記念碑を建てた。外國人でこれほど尊敬を受けた人は無からう。數年前、澁澤子爵を團長とする實業視察團が米國に來られた時、一行は謝意を表するため、ヴァーベック將軍（ヴァーベック博士の令息で少將）の學校があるマンリアスへ行かれたが、其の時私も何か演説するやうに頼まれたので、私は明治天皇の御人格と御事業に就いて一場の談話を試みたことであつた。明治天皇の御創業時代に於て、この人が貢獻したことは、蓋し少からざるものであつた。

### 西郷に對して

明治大帝の御高德として我々西洋人がまた一つ稱讚に堪へないことは、西郷の叛亂に就いてである。歐洲諸國では主権者に叛いた者は斬首した上、四肢を切斷するのが習慣であつた。日本では明治大帝が西南役に於ける多數の謀叛人を赦された上に、その首領たる西郷の銅像を上野に建てることを許された。それには、我々外國人も驚いた。



また歐米の首都では、兵士が戦場から歸るとき、群集は熱狂して萬歳を唱へて迎へるのだが、帝の兵士が西南役から歸つた時は、凱旋兵士に對して萬歳を叫ぶことを控へよといふことであつた。それで兵士等は船から上陸するや、常の如く靜かに兵營へと歸つて行つた。人出もなく、示威運動もなかつた。平常と何の變りもなかつた。クリスト教國民は、不思議な事だと考へたが、實際不思議な事件であつた。

これは 明治天皇が、その人民中から所有悲哀を取除き、皆忠義心によつて一致せんことを望まれたからである。これは自分の兄弟と戰ふことがあつても君を愛するだらうといふ事實を承認したものである。君といふものは己の子や兄弟以上だといふ信念が日本歴史を一貫してゐる事實だ。明治天皇は武士道の傳説の粹に從はれたものである。

武士道の主要點の一は、第一に君に忠なることであるが、第二には、戰つた後は凡ての憎惡心を忘れよといふことであると思ふ。日露戰爭の時に下された御詔勅には「戰に於ては汝の敵を倒せ、しかし戰終らば敵を助けよ」と仰せられた。換言すればロシア人が倒れて居て水を求めたら、彼に水を與へよ、負傷して居たら手當をしてやれ、といふのである——確かかういふ意味だつたと思ふが、兎に角 明治天皇は斯う教へられたのである。凡ての日本人はこれを

を光榮に思はなければならぬ。

### 驚異に値す

外國の使節が條約締結のために日本に來たとき、日本の 天皇がまだお年若い青年でいらせられ、新事物、新思想に對しても十分の御理解があらせられたといふことは、お互の爲に非常によいことであつたと思ふ。

人は誰しも同じことだが、青年は新しいものを理解し、變化を好むものであり、老年はその反對である。私の友人エドワード・ワレン・クラーク君は、宮中で幻燈を天覽に供したことがあつたが、その時の話に、百人近い女官が居られたが、多くは六七十歳の老婦人であつたといふ。さうした中に於て、大帝が宮廷の服装や用度を一變して洋式になされたことは、種々の事情から餘程御困難であつたらうと思ふ。

然るに少しの騒ぎどころか、何等の異状なしに、この一大改革が行はれたといふことは、確かに驚くべき事實であつた。然り斯様な大變化を戰爭や流血の慘なしに、どうして行はれたかは、外國人に取つて不思議な事であつた。現に支那では少數の外人や一部有識者が、たつた六



マイルの鐵道を敷設したところ、支那政府はこれを買ひ上げて海に投棄てしまつたではないか。支那は老大國であるが、日本は歴史的には若年國である。明治人は流血の慘なしに古代文明から近代文明へと一足飛びに變化することが出来た。西郷の叛亂さへも異國的新の問題で起つたのではなかつたのである。

### 日本の青年へ

この際、私は日本青年に對して一言したい、諸君は日本の將來と安全のために、常に天皇に對する敬虔の念を保持し、其の貴い傳説を愛慕せねばならぬ。同時に政府は勞働階級、及び彼等が安全と進歩のために作つた勞働團體を躊躇なく喜んで認めねばならぬ。さうしてそれが爲には一層教育を進歩させることが必要であらう。教育は國防の背景である。私は日本の將來に對して大なる希望を持つてゐるが、五十七年後の今日、再び日本に來つて全國を視察した結果、益々その自信を確めた。私はこの旅行中、約二百五十回の演説をなし、數十の學校を訪問した。そして日本は今やアメリカ議會の不名譽な排斥法があつたにも拘らず、日米の國交は依然として安全である事を了解した。彼の排斥法の如きは眞の米國人の意志でない。日本の

最上の人物が軍備縮小のため華府延長會議に出席してゐる事實を以て見ても、兩國間の不安は過去のものであることが確認される。

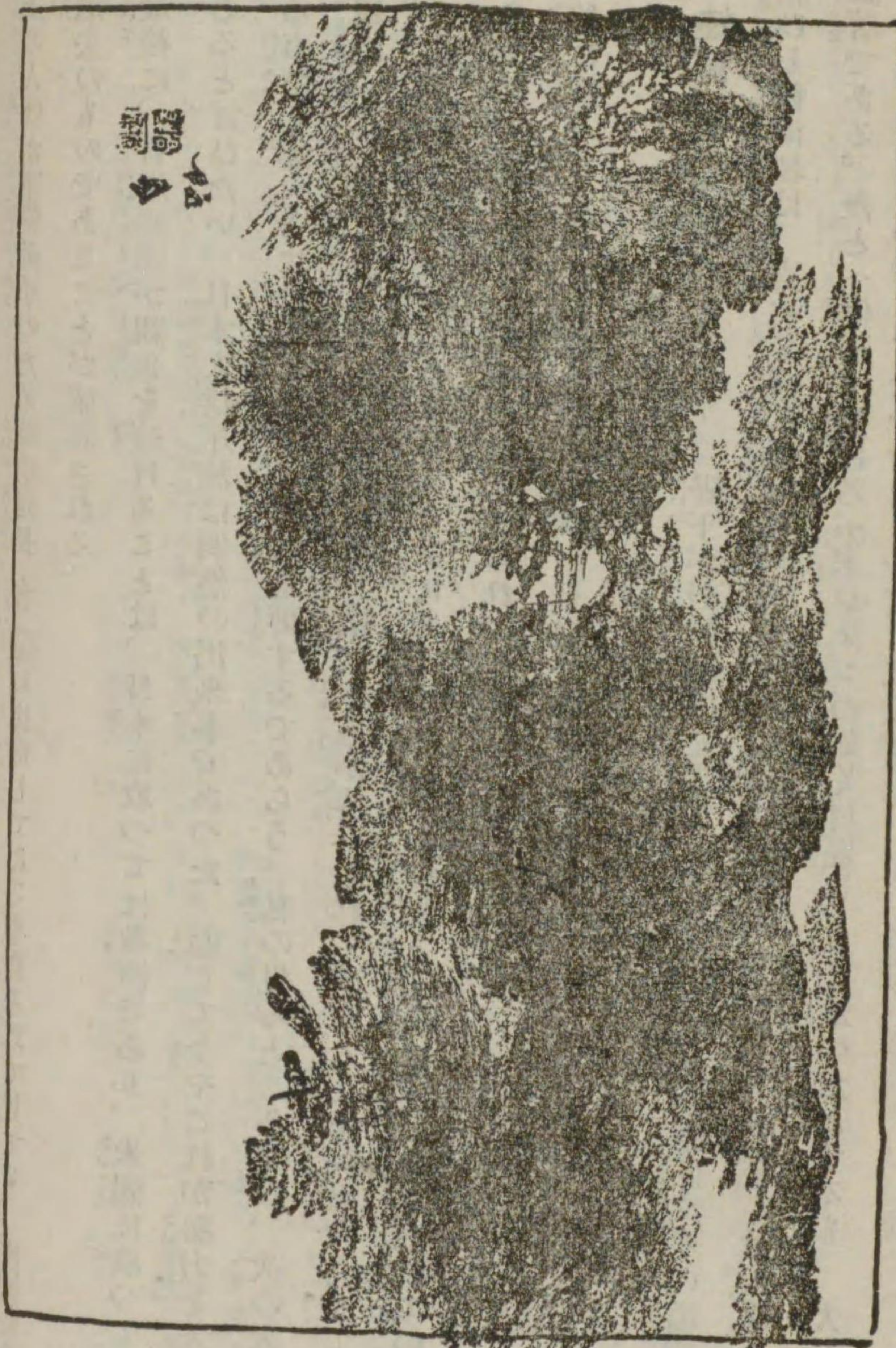
最後に、日米兩國が親善を續けることは、日本に取つては救済であり、米國に取つては福音であると言ひたい。日本人排斥法は偶然の出來事であつた。而して今やこれが勢力を失ひつゝある事情を述べるには、なほ多くの時を要するであらう。私の見るところでは、次の大統領選挙直前に當つてワシントンから不思議な報道が傳へられて來ることを諸君は待つて居てよと思ふ。アメリカ人の心は日本と共にある。又日本の進歩と安全は、我々に取つての福利である故に。その進歩は同情を以て視られて居る。

終に臨み日本國民のために「萬歲」を唱へよう。更に「神よ、天皇の上に恩寵を垂れ給へ」

### 紐育イーグル曰く

陛下が封建制度を顛覆し、日本を確然と泰西文明の道程に導き給ひし御治績は、實に英國に於けるエリザベス、露國に於けるピーター大帝の治世よりも一層顯著である。たとへ佛國に於けるナポレオンの如く目覺しくなかつたとするも、大帝はナポレオンさへ企て及ばない永遠無窮の偉業を成就されたのである。





横山御陵の遺聖

竹内龍鳳筆

### 大帝を偲び奉る民草の聲

畏くも「明治大帝」出版の計畫を立て、其の完璧を期せんがため、廣く大帝の御逸事を天下に求めました所、各方面より續々稿を寄せられたことは、誠に感謝に堪へません。されど遺憾ながら其の全部を掲載することを得ず、次の二篇及び他の數篇を輯録することになりました。御多用中御寄稿を賜はりし各位の御厚情を謹んで感謝致します

### 百萬の貔貅を齎はす

陸軍運輸部長 赤井春海

私は、嘗て永い間參謀本部に職を奉じたために、明治大帝御在世中の大演習に参加するの機會多く、随つて、演習中の大帝の御言動について親しく拜し奉る光榮に浴しました。其の中で私が終生忘れんとして忘るゝ事の出来ない——明治四十二年、宇都宮地方に於て行はれた、大演習の思ひ出を謹記して御高德の一端を偲び奉ることとする。

大演習の思ひ出



陛下が、栃木縣廳の大本營に御着になつたのは、十一月五日であつた。

翌六日には、那須野平野の眞只中、黒磯・鍋掛・寒川の線に於て、西大將の率ゐる南軍と、長谷川大將指揮の北軍とは豫期の如く大衝突して、爰に特別大演習の火蓋は切つて落された。

此の日は唯さへうすら寒い霜月の初め、殊に小雨交りの名物那須下しの寒風は、朝から遠慮もなく吹き捲り、戦將に酬ならんとする十一時頃には霰さへ加はつて、寒さは一層加はり、統監部附の少佐として、御野立所にあつて各地からの情報を筆記してゐた私は、指が凍えて筆とることも困難な位であつたので、大帝には、如何に御在すらんと密に仰ぎ奉つたところ、畏くも寒風吹き荒ぶ丘の上に、外套をも召させ給はず、毅然として戦況を天覽あらせらるるのを拜し奉り、何とも申し上げやうなき感に打たれ洵に恐懼に堪へなかつた。

翌日は、前日と打つて變つて天氣極めて清朗、小春日和の好天氣であつた。此の日の御野立所は、箒川の鐵橋の南方にある崖の上で、那須の大平原を一日に展望することの出来る絶好の場所であつた。

正午時分になると、北軍の攻撃は一きは猛烈を極めて來た。大帝には絶えず雙眼鏡を採つて兩軍の行動を觀覽あらせられ、折柄伺候の總理大臣西園寺侯に親しく戦況を地圖と對照し給

ひつゝ、御教示遊ばさるゝのを拜せられた。

二時頃から戦鬪は愈々激烈を極め、御野立所の西方、陸羽街道を隔てた高地から北軍の砲兵が大砲の筒先を揃へて打ち出すと共に、右手五十米突と離れぬ處からは歩兵の機關銃が猛射を始め、御野立所附近は、砲聲の轟銃聲の響、殷々として耳を聳する許り、實に物凄い光景となつた。此の光景を見そなはせられた大帝には龍顏殊に麗はしく、如何にも御満悦の體に拜せられた。其の御様子は今だに私の腦裏から消え失せぬ印象である。

○ 此の夜、奥參謀總長は例の如く、還幸後の戦況を奏上するため伺候するに當り、總長には老眼にて夜分精細なる地圖の説明は思ふ様にならなかつた爲、特に御許しを蒙り、演習全般の状況を熟知してゐる私を随行せられた。晝間、御野立所にあつては、幕僚として將又審判官として大帝に咫尺し上奏の榮を荷つたことも屢々あつたが、夜間、御座所に於て而も至尊に咫尺して、總長を助けて演習状況を上奏することの光榮を想到した時、私の胸は高鳴つて感激措く所を知らなかつたのである。

御居間は縣知事の室を其の儘御使用遊ばされ、御椅子の前方には一個の細長い机が丁字型に



配置されてあるのみで、極めて御質素なものであつた。

やがて、奥參謀總長は、入口近き所に在り、私は總長の奏上につれ、地圖上に隊標（戦術研究の場合、歩兵・騎兵・砲兵等を現す焼物の小き駒）を移動するの必要から總長より稍前方に進み、丁字型の御机の凹角の處に起つた。

すると今迄、御椅子に倚らせ給ひし 大帝は、總長の上奏が始まると同時に、つと、御椅子を離れさせ給ひ、御起立の上、兩の御手を御机の上突かれ、玉體を稍前方に乘出させ給ひ、總長が『第二師團歩兵第何聯隊ハ午後何時、再ビ猛烈ニ敵陣地ヲ攻撃セシモ撃退セラレタリ』と奏上する聲に應じ、私は、隊標を動かしながら『此の聯隊は此の高地を奪取しようと致しましたが、撃退されたのであります』と小聲で恐るゝ申し上げる。それに對して、

『撃退したか！ さうか』

とか、或は又『某聯隊ハ晝間ノ失敗ニ鑑ミ本夜何時ヲ期シテ夜襲セントス』と奏上する時には、

『夜襲をやるか、夫れはえらからう』  
とか、一々御明快に、御底力ある玉音を以て御受け答へ遊ばされ、而も一時間餘に亘る奏上

を御起立のまゝ御聴取になつたのである。

大帝が軍事に大御心を止めさせ給ふことの深きは、豫て萬民と共に承る處であつたが、行在所の夜間御寛ぎの時に於てさへ、斯くも御熱心に御統裁遊ばさるゝ御態度を眼のあたり拜し奉つた私は、今更ながら御高德の尊きに打たれたのである。

時を尊び給ふ

岡山縣 勳六等 安井忠治

明治大帝が時に對して御注意深くあらせられたことにつき、私が大いに感激した一實話を申し上げたいと存じます。

時は今を去る三十四年前、日清兩國は端なくも戦端を開き、八月一日には宣戰の詔勅下り、越えて九月十三日には畏くも大森を廣島に進めさせられ、廣島師團司令部の不便なる一室を行在所に充てさせられて、軍國の大機を御親裁あらせられし當時の出來事であります。其の頃神戸を起點とする山陽鐵道は丁度糸崎より廣島までの工事の進行中でありましたが、日清間の風雲が次第に險惡を加へて來たので、夜を日に繼いで工を急いだ結果、漸く廣島までの竣工を見たのであります。



私は廣島驛竣工と同時に雇員として採用され、間もなく同驛助役を命ぜられ、過分の重責を負はされる事となりました。各地より集まる幾十萬の將卒・軍夫・馬匹其の他軍需品を満載せる軍用列車は陸續到着、各部隊は少くも數日間の滞留をつゞけ、間もなく風聲を迎へ、多數の文武大官扈從して來着。其の宿舎にさへ不足を告ぐる折柄、臨時議會開催せられ、貴衆兩院議員多數入市のため、市内は人馬で埋まるの有様で、沸き返る騒ぎでありました。此の混亂の廣島市の玄關口である驛の雜沓繁忙は實にお話の外でありました。隔日勤務の私達も非番日の午後二三時頃迄は居残りつて働かなければならない有様でした。

斯かる多忙の際、毎日時をたがへず、人品風采賤しからぬ、禮儀の正しい六十歳許に見受けられる老人の方が大形のスイツル製の懐中時計をお持ちになつて、驛長室に御越しになり、驛長か私に慰勸の態度で、此の時計の時間を合はせて下さいと自らお直しにならず、必ず私共の手許に時計をお出しになります。初めの間は別段意にもとめずおもとめのまゝに驛備付の時計に合はして御返しして居たのであります。

當時は神戸廣島間に一日一回時計對照列車といふものが指定され、其の列車の車掌が神戸驛の時計に自己の時計を合はせて乗務し、順次以西の各驛長助役の時計と對照し、時分を齊正す

るといふ極めて幼稚な時代でありましたから、中々時分的的確を期することは容易の業ではなかつたのであります。

其の後引續き、前の老人が日課の如く、同一用向で御見えになりますので、私達も終には不審を抱き、或機會にお尋ねいたしました結果、明治大帝に御近侍なされる侍從職の方(お名前前は確と記憶いたしませぬが多分北條侍從殿であつた様に存じます)であることが判つたのであります。

その御話に依りますと、大帝には御座右に、高價なる幾多のクロノメーターをお備付になつてゐらせられますが、鐵道の用向は鐵道の時間に依らなければならぬから、内一個は驛の時計に合はせて置くやうにとの御諒を畏み、日々御邪魔をする次第であつて、若し側近の奉侍者或は參殿の高官達が廣島驛に向ふ場合、これをお氣附になりますと、大帝には驛の時計は今何時何分であると常に御注意下さる旨の有難き御高話を拜聴しまして、茲に始めて御事情を詳かにすることを得、恐懼措く所を知らず、尙此の軍國多事の際、格別御宸襟を惱まし給ふ折柄なるに、只管供奉の諸官を慈しみ憐み給ふ大御心より、斯かる儀にまで御軫念遊ばされる事の尊さ、其の御仁慈の洪大無邊なるに深く、感激に満たされ、感涙に咽んだ次第であります。



明治盛德餘光三首 各有引

犀東國府種德

明治天皇御寓。第四十四年秋。侯爵西園寺公望公。爲内閣總理大臣。囑託以內閣記室之事務。十一月。車駕西幸。閱武於筑肥之野。贈下位西陲所起幕末勤王之士。與有功勞于國家。所授益文敬之故賢。傾私費。興公益。之人。亦進之。聖恩之及于枯骨者多矣。還幸之後。傳命。內閣使。上地方廳所具申。諸賢事歷之二三資料。賜乙夜之覽。宸慮及于古賢侯明主節義孝貞之深。往往有如此。龍飛天子兩朝前。下問名臣又故賢。恩露殷勤。霜朽骨。侍從咫尺奉陳編。

允武允文

男爵高崎正風翁。仕明治天皇爲御歌所長。不肯以文事。夙得。知。當時男爵米田虎雄翁。爲侍從。高崎翁語曰。一夕與米田侍從。奉侍在側近。上先于御膳。正命。晚酌。顧侍從。使取酒杯。侍從性來不嗜。飲。拜辭。上笑命。宮人。別齋。坤宮所貯之珍珠。宮人復命。跪奉。巨饅頭。盛在。一豆。上親取其一。命侍從。取他之一。上既取酒杯。今又賜味及于饅頭。侍從乃恭拜曰。陛下嘉酒又嘉饅頭。併難兼之兩味。臣始知。允武允文之語。眞不溢美矣。上破顏稱善。後不肯以。大喪使事務。囑託。供奉。靈柩。抵。桃山陵。投于京都客舍。無端與侍從。話。因質以前事。侍從大喜。須臾。無然。無語。

九重

天皇登霞。黎明大霧不辨。咫尺。先是數日。御溝之外。士女子來。仰天俯地。祈。御惱之平癒。至是。號泣尙不去。宮門之外。內則有。皇親重寄。舉伺。候。丹墀。日夜奉仕。不。退。時正盛夏。以上林多。蚊。軍。衝。閣。來。襲。奉。仕。之。諸。臣。而。皆。能。肅。然。堅。坐。不。動。無。復。一。人。打。蚊。蚊。因。恚。擊。刺。紅。血。往往。流。手。背。而。無。有。一。人。之。動。當時。宮。中。不。用。電。燈。點。蠟。燭。自。有。古。王。朝。之。遺。風。鳥。渡。引。塵。鼎。調。燭。年。選。炎。歷。一。乘。白。雲。遺。德。冥。冥。人。若。望。肅。然。不。打。九。重。蚊。

明治大帝御一代御年譜

- 九月二十一日(陽曆十一月三日)御降誕。
- 九月二十九日(陽曆十一月十一日)御命名。
- 同 六年(御年二歲)
- 中山忠能卿御養育の任に當る。
- 米盛浦賀に來る。
- 安政元年(御年三歲)
- 四月六日皇居炎上。桂宮を假皇居と定め給ふ。
- 旭日を國旗の章と定む。
- 同 二年(御年四歲)
- 十一月二十三日桂皇居より新造の内裏に遷御。
- 同 二年(御年五歲)
- 仙洞御所に隣れる親王御殿に移らせらる。
- 正親町實德卿傳となる。
- 同 四年(御年六歲)
- 岩倉八千丸・裏松良光等御學友を命ぜらる。
- 同 五年(御年七歲)
- 同 六年(御年八歲)
- 萬延元年(御年九歲)
- 七月十日皇太子に立たせ給ふ。
- 九月二十八日親王宣下。御名を睦仁と賜ふ。
- 文久元年(御年十歲)
- 十月二十日和宮親子内親王御成婚。十二月十一日江戸御入城。
- 同 二年(御年十一歲)
- 五月二十七日御讀書始をなし給ふ。
- 同 三年(御年十二歲)
- 元治元年(御年十三歲)
- 新聞紙始めて發行する。
- 慶應元年(御年十四歲)
- 十月十五日皇權回復の勅あり。
- 同 二年(御年十五歲)
- 十二月二十九日天皇(孝明)崩御。
- 同 三年(御年十六歲)
- 正月九日御踐祚。
- 正月二十七日先帝を後月輪東山陵に葬り、二月十六日證を上り孝明天皇と申す。
- 五月二十八日一條忠香公女美子姫女御に御決定。
- 十月將軍慶喜政權を返上。十二月十日王政復古の令を下し給ふ。
- 明治元年(御年十七歲)
- 慶應四年正月三日徳川慶喜朝命に抗す。依つて仁和寺宮を征討大將軍として追討せしむ。
- 同 三月始めて大政官を九條道季邸に置く。
- 同 四月天皇元服ありて大政を行はる。
- 同 七月職制を定め、總裁・議定・參與の三職を置く。
- 三月十四日天皇南殿に出御ありて、遍く公卿諸侯を召し、親ら天地神祇を敬祭して、五箇條の御誓文を發し給ふ。
- 八月二十七日御即位式を挙げさせらる。
- 九月八日明治と改元。
- 九月二十日京都御發登十月十三日江戸御着。
- 十二月八日江戸御發登京都へ御還幸。
- 十二月二十八日皇后册立。
- 江戸を東京と改稱す。
- 同 二年(御年十八歲)
- 正月十八日東京行幸の詔あり、二月七日京都御發登三月御着、後東京を帝都と定め給ふ。
- 六月二十八日神祇官に行幸ありて、天神地祇及び列祖に國是一定の奉告あり、爾後日々御學問所に出御ありて、國政を總攬あらせらる。



- 列藩々籍を奉還す。
- 同 二年庚(御年十九歳)
- 徴兵令發布せらる。
- 全国に小學校を設く。
- 同 四年辛(御年二十歳)
- 七月十四日廣瀨置縣。
- 散髪脱刀令出づ。
- 司法、文部の兩省を置く。
- 岩倉具視等を歐米に遣す。
- 同 五年壬(御年廿一歳)
- 五月二十三日西巡あらせられ、七月十二日還幸。
- 九月京濱間鐵道成る。
- 十一月大陰曆を廢し太陽曆とす。
- 神武天皇即位元年を紀元とす。
- 近衛兵を置く。
- 始めて博覽會を開く。
- 同 六年癸(御年廿二歳)
- 三月陛下御新髪あらせられ、皇太后・皇后兩陛下、薨を廢し温齒を罷めさせらる。
- 四月廿九日近衛兵引率千葉縣大和田へ行幸。
- 五月五日皇城炎上、赤坂離宮を假皇居と定めさせらる。
- 五節句を廢し三大節を大祝日とす。
- 復仇を禁じ、外人との婚嫁を許す。
- 銀行紙幣を發行し、銅貨を鑄造す。

- 内務省を置く。
- 始めて公園を設置す。
- 同 七年甲(御年廿三歳)
- 一月青山御所成り、皇太后徒御あらせらる。
- 始めて軍旗授與式あり。
- 二月佐賀に江藤新平の亂あり。
- 五月臺灣を征す。
- 警視廳を置く。
- 北海道に屯田兵を置く。
- 同 八年乙(御年廿四歳)
- 四月十四日、元老院・大審院を置く。
- 六月二十日始めて地方官會議を開く。
- 法制局設置。
- 露國と千島樺太交換條約を結ぶ。
- 同 九年丙(御年廿五歳)
- 六月二日御發聲東北地方御巡幸、七月二十一日還御。
- 九月六日憲法取調を命じ給ふ。
- 熊本・秋月・山口に亂あり。
- 同 十年丁(御年廿六歳)
- 一月四日減租の詔あり。
- 二月西郷隆盛亂をなし、九月二十四日に至りて鎮定す。
- 學習院成る。
- 同 十一年戊(御年廿七歳)

- 近畿北陸御巡幸、十一月還幸。
- 春秋二季皇靈祭を設けらる。
- 始めて府縣會を開く。
- 同 十二年己(御年廿八歳)
- 八月三十一日皇子嘉仁親王御降誕。
- 琉球を廢し沖縄縣を置く。
- 自由黨起る。
- 十二月二十九日國會請願書出づ。
- 同 十三年庚(御年廿九歳)
- 六月山梨・三重・京都に御巡幸、伊勢大廟・涌寺先帝御陵に御參拜あり。
- 國會期成有志會起る。
- 同 十四年辛(御年三十歳)
- 七月二十九日御發聲東奥、北海道御巡幸、一月十一日還御。
- 十月國會開設の勅を下し給ふ。
- 皇居の造營始まる。
- 布哇國王來朝。
- 各地に政黨起る。
- 同 十五年壬(御年卅一歳)
- 一月四日陸海軍人に勅諭を下し給ふ。
- 陸軍大學校設置、郵便條例發布。
- 改進黨起る。
- 同 十六年癸(御年卅二歳)
- 日本銀行創立。

- 立憲政黨起る。
- 徴兵令改正。
- 同 十七年甲(御年卅三歳)
- 三月十七日宮中に制度取調局を置き憲法取調をなさしむ。
- 七月七日華族令を定め、公・侯・伯・子・男の五爵を設く。
- 同 十八年乙(御年卅四歳)
- 七月二十六日山陽道へ御巡幸、八月十六日還幸。
- 十二月太政官を廢し、内閣組織成る。
- 逓信省を置く。
- 天津條約を結ぶ。
- 日本郵船會社起る。
- 同 十九年丙(御年卅五歳)
- 各省官制發布。
- 帝國大學令諸學校令發布。
- 萬國赤十字社に加盟。
- 同 二十年丁(御年卅六歳)
- 皇居成る。
- 嘉仁親王皇太子とせらる。
- 海防費獻金の勅下る。
- 日本赤十字社成る。
- 同 二十一年戊(御年卅七歳)
- 九月卅日皇女昌子内親王御生誕。

- 樞密院を置かせらる。
- 同 二十二年己(御年卅八歳)
- 伊勢大廟御遷宮。
- 一月十一日兩陛下赤坂離宮より新皇居に徙らせらる。
- 二月十一日憲法發布式舉行。
- 十一月三日立皇太子の儀あり。
- 條約改正のため御前會議あり。
- 同 二十三年庚(御年卅九歳)
- 一月二十八日皇女房子内親王御生誕。
- 金鵄勳章制定。
- 六月十日貴族院議員選舉を行ふ。
- 七月一日衆議院議員選舉を行ふ。
- 八月二十五日立憲自由黨成る。
- 十月三十日教育勅語を賜ふ。
- 十一月二十五日始めて帝國議會を開く。
- 十一月廿九日帝國議會開院式を行はせらる。
- 同 二十四年辛(御年四十歳)
- 五月十二日天皇京都へ行幸ありて、大津にて遭難の露國皇太子を御慰問あらせられ、御同車神戸へ行幸。
- 八月皇女允子内親王御生誕。
- 十一月二日濃美地方大地震、侍從侍醫を差遣はし、被災民を慰問せしめ給ふ。
- 同 二十五年壬(御年四十一歳)
- 陸軍大演習御統監のため栃木縣へ行幸。

- 同 二十六年癸(御年四十二歳)
- 同 二十七年甲(御年四十三歳)
- 三月九日兩陛下大婚、二十五年銀婚式祝典御舉行。
- 八月一日清國に對する宣戰の詔勅公布。
- 九月十三日大韓を廣島に進め給ふ。
- 臨時議會を廣島に開く。
- 同 二十八年乙(御年四十四歳)
- 四月十七日講和條約成り、遼東半島及臺灣我が版圖に歸す。
- 四月二十七日廣島御發聲、大本營を京都に移され、五月三十日東京に還御。
- 五月十四日遼東還付の詔勅を發せらる。
- 同 二十九年丙(御年四十五歳)
- 五月十一日皇女聰子内親王御生誕。
- 陸軍を擴張し十三師團となす。
- 同 三十年丁(御年四十六歳)
- 一月十一日英照皇太后陛下崩御。
- 勸業銀行設立。
- 同 三十一年戊(御年四十七歳)
- 京都三十年祭舉行。
- 元帥府設立。
- 同 三十二年己(御年四十八歳)



- 新に貿易場二十二港を開く。
- 各締盟國との新條約實施。
- 同 三十三年庚(御年四十九歳)
- 二月十一日皇太子殿下九條節子姫と御成婚。
- 五月三十日北清事變起る。
- 九月十三日立憲政友會成る。
- 同 三十四年辛(御年五十歳)
- 四月二十九日第一皇孫迪宮御生誕。
- 九月六日伊勢神宮御遷座式。
- 同 三十五年壬(御年五十一歳)
- 二月日英同盟成る。
- 六月二十五日第二皇孫淳宮御生誕。
- 同 三十六年癸(御年五十二歳)
- 東北餓饉にて兩陛下より御下賜金あり。
- 同 三十七年甲(御年五十三歳)
- 二月十日露國に對し宣戰の詔勅を發せらる。
- 露國太平洋艦隊全滅。
- 同 三十八年乙(御年五十四歳)
- 一月一日旅順開城。
- 一月三日第三皇孫光宮御生誕。
- 五月二十七日日本海大海戰、バルチック艦隊全滅。
- 八月日英攻守同盟成る。
- 九月五日講和談判調印。
- 日韓協約締結、韓國我が保護に關す。
- 十月二十三日東京灣にて大觀艦式舉行。
- 同 三十九年丙(御年五十五歳)
- 四月三十日青山練兵場にて凱旋大觀兵式舉行。
- 英國コンノート殿下來朝してガーター勳章捧呈。
- 韓國に統監府を、遼東に關東都督府を置き、滿韓經營をなす。
- 同 四十年丁(御年五十六歳)
- 二月、英國に伏見宮貞愛親王御差遣。
- 中山一位局薨去。
- 日露協約、日佛協約成立。
- 鐵道國有。
- 同 四十一年戊(御年五十七歳)
- 四月二十七日昌子内親王竹田宮恒久王と御成婚。
- 十月十三日戊申の詔書出づ。
- 日米協約成立。
- 同 四十二年己(御年五十八歳)
- 四月二十九日房子内親王北白川宮成久王と御成婚。
- 皇室令御發布。
- 同 四十三年庚(御年五十九歳)
- 三月三日皇族身位令發布。
- 五月六日允子内親王朝香宮鳩彦王と御成婚。
- 八月二十二日朝鮮併合條約成り、二十九日併合。
- 十月七日李載定氏以下朝鮮貴族に授爵。
- 同 四十四年辛(御年六十歳)
- 一月十日英皇戴冠式御名代として東伏見宮・同妃兩殿下差遣さる。
- 二月十一日●施樂教養費として百五十萬圓下賜せらる。●經濟生會成る。
- 暹羅皇帝戴冠式につき御名代として伏見宮を差遣さる。
- 四月四日日米新條約發表さる。
- 四月六日日英新條約發表さる。
- 七月十五日改訂日英協約發表さる。
- 十月三日伊土開戦につき中立を宣告す。
- 同 四十五年壬(御年六十一歳)
- 二月十二日清帝退位、袁世凱直ちに共和國臨時政府を組織し大統領となる。
- 五月三十一日京都泉涌寺總明殿に奉安の御尊牌並に御尊像保護料として金四千八百圓御下賜。
- 七月十日帝國大學卒業式に臨御。
- 七月十五日京都大學卒業式に御差遣相成りたる北白川宮成久王の復命を聽かせられ、午前十時半樞密院會議に臨御。
- 七月十四日より腸胃に御故障あらせられたる陛下は腎臟炎に糖尿病併發、遂に三十日午前零時四十分心臓麻痺にて崩御あらせらる。

天下一品 日一本

製造高 五十萬石  
資本金 三千萬圓

宮内省御用

萬 キッコーマン 醤油

マン ジョウ

万上味淋

千葉縣野田町  
野田醤油株式會社





# の 一 本 日 報 新 事 時

## 問 題

が 起 れ ば ……

先 づ 第 一 に 時 事 新 報 の  
所 論 を 見 よ !

之れ政治家と云はず、實業家と云はず、  
社會一般識者の等しく稱ふる所である。  
而して之れ正に本紙が權威あり、信用の  
絶大なる所以である。

よ く き く  
廣 告 法

信用ある新聞、購買力豊かなる讀者を多くもつ  
新聞に掲載さるゝ廣告の最も効果あるは、之又  
當然である。

◇ 増 激 者 讀 …… 大 増 力 刷 印 …… 成 落 館 新 ◇

## 日 本 一 の 標 準 新 聞

理想は飽くまで高遠に、實行は  
どこまでも常識的に！  
各方面の最高常識を代表するこ  
とをモットーとして五十五年！  
終始一貫變らぬ歴史によつて、  
現在の報知新聞は築き上げられ  
た。歴史の光輝と不斷の努力と  
相待つて現在の新聞界に、最高  
の地歩を占めてゐるのが報知新  
聞である。

圓 壹 料 讀 購 ・ 頁 二 十 ・ 刊 夕 一 刊 朝

刊 創 年 五 治 明

社 會 式 株

# 報 知 新 聞

内 の 丸 市 京 東

番 九 三 七 京 東 替 振



お端書次第

懸賞募集

見本を贈る

讀賣新聞は常に左の各種を一般讀者より募集發表して居ります

短篇小説 廣津 和郎選  
ラヂオ脚本 小山内 薫選  
詩及小品 文藝部選

客 正宗白鳥  
員 武者小路實篤  
招 小山内薫  
聘 廣津和郎

和俳歌 若山 牧水選  
俳句 村上 鬼城選  
笑話 寺尾 幸夫選  
川柳 矢野 錦浪選  
警句 中尾 龍夫選  
冠句 久佐太郎選  
も句 井上 貞十選

讀賣新聞の特種讀物

長篇小説 珊瑚 田山花袋  
探偵小説 魔人時三郎 前田曙山  
秘密小説 膽さし武助 浪上義三郎

圍碁 野澤鈴木兩七段の  
争ひ十番碁大手合  
更に日本棋院對正社の對抗戰 新進者將慈  
くを網羅した大亂闘蓋し日本棋界矚目の焦點  
である

將棋 木村花田兩八段の  
決死的十番碁大試合  
更に全國六段を網羅した優勝大血戰は甲去乙  
來各其秘術を盡し昭和の棋界に新記録を作り  
つゝある

本紙の 宗家庭日ラ  
教欄欄夕才  
欄欄刊版

郵送は三月二十日  
電話は東京一六二二番  
振替は東京六一二番  
京橋西紺屋町  
讀賣新聞社

民衆之友 朝夕刊十二頁



京橋區 加賀町

- 紙面大刷新陣容整備。
  - 趣味豊富報道正確にして敏速。
  - 言論界の最高權威
- 蘇峰徳富社長の論評は毎日  
掲載されます。
- 斯界の重鎮國民新聞  
の眞價を御覽下さい。



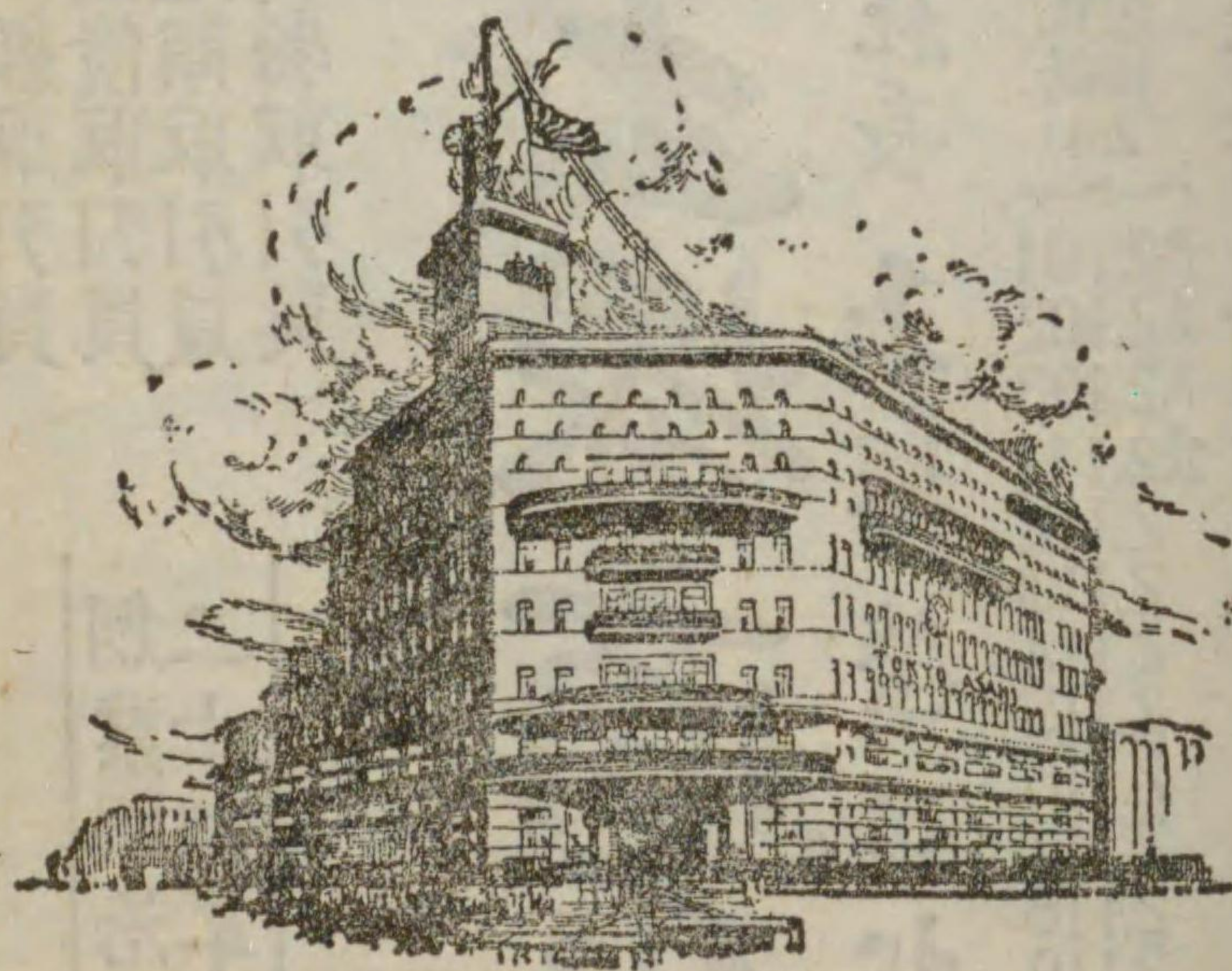


### 信用のある新聞に

廣告をせらるゝことはその商品  
 の社會的聲價を高める所以です  
 然もその新聞の發行部數が帝都  
 隨一で讀者の購買力が無比と來  
 れば三拍子そろつて完璧です。  
 これ東京朝日新聞が帝都新聞中  
 最大の廣告を掲載する所以です。



朝日刊二十頁  
 (一月一圓)



東京朝日新聞社

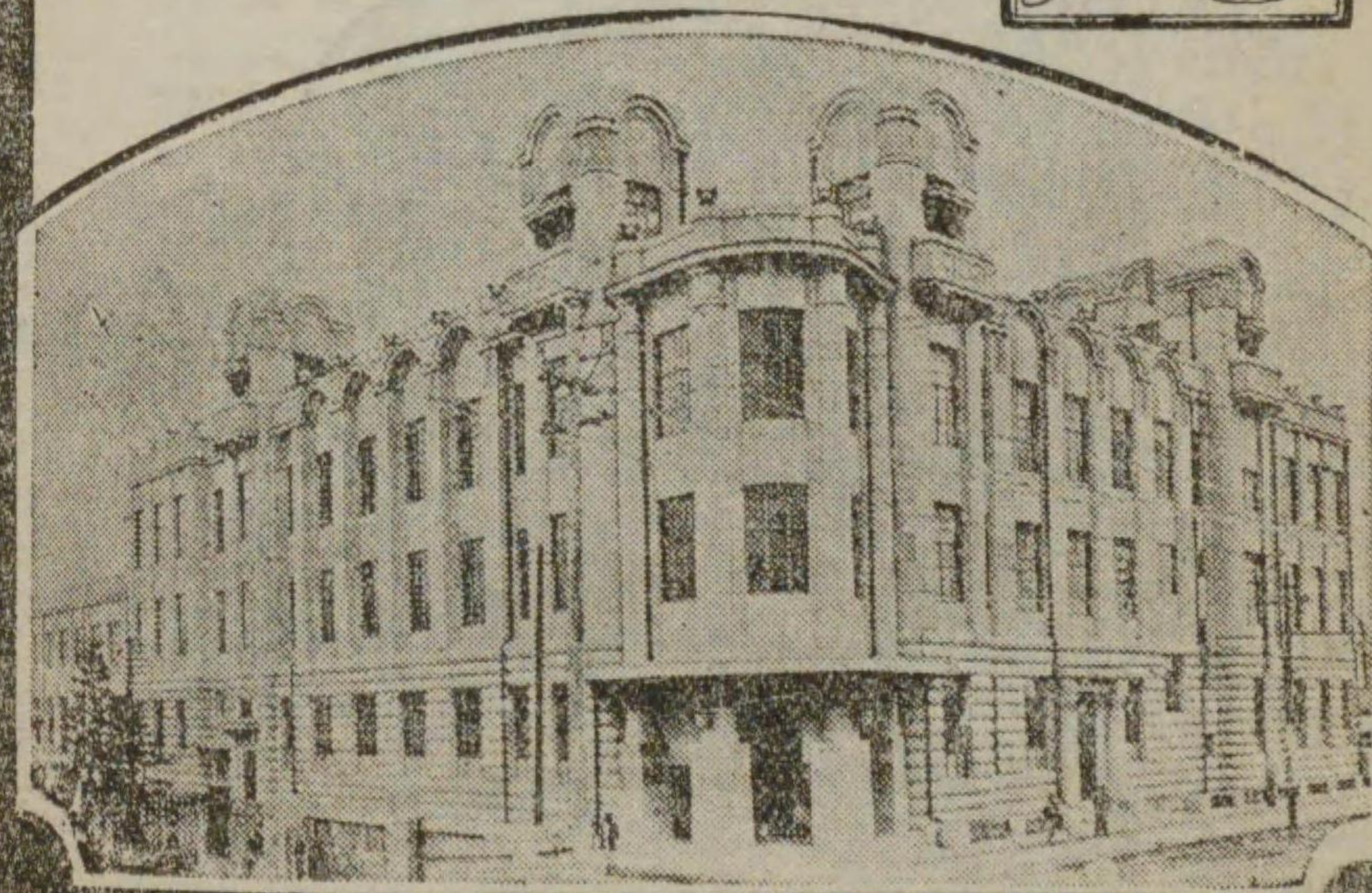
明治十年創立  
 年中無休



### 斯界の權威

報導迅速  
 記事正確  
 中正穩健

福岡市須崎土手町  
 福岡日日新聞社





東京株式取引所一般取引員  
 國債取引員  
 短期取引員  
 實物取引員

創業明治二十四年

# 玉塚商店株式會社

社長 玉塚榮次郎

營業科目  
 國債、地方債、社債、株式、賣買及發行、證券、關及一切業務

玉塚旬報 營業案内贈呈

電話  
 東京市日本橋區本材木町一丁目九番地  
 長橋(24)  
 2.101  
 長 2.102  
 長 2.103  
 袋 2.111  
 2.112  
 2.113  
 2.114  
 2.115  
 2.116  
 2.117  
 2.118  
 2.119  
 市外專用 8  
 浪花(67)



## 明治美談



明治美談目次

561

後藤象次郎の膽ツ玉……………(五五五)  
 勝海舟の面目……………(五七〇)  
 前原一誠涙の別れ……………(五七〇)  
 徳川慶喜公の心事……………(五七九)  
 副島種臣風伯に祈る……………(五七九)  
 伊藤博文とマデソン翁……………(五八〇)  
 情の子、涙の人西郷南洲……………(五八三)  
 芳崖とフェノロサ……………(五八六)  
 川上音二郎の立志奮闘……………(五九〇)  
 黒田清隆と榎本武揚……………(五九二)  
 中村敬宇先生の面影……………(五九四)  
 板垣退助の「辭爵の表」……………(五九九)  
 岩倉公の沈毅……………(六〇二)

山岡鐵舟の活人劍……………(六〇五)  
 大木喬任の卓見……………(六〇七)  
 兄の孝行に改心した野村靖……………(六〇〇)  
 機智縦横の鳥尾小彌太……………(六二二)  
 我が子を犠牲に貧兒教育に盡くす……………(六二五)  
 岩崎彌太郎の風采……………(六二七)  
 木戸孝允朝の禮拜……………(六二九)  
 快傑大村益二郎……………(六三〇)  
 誠忠無二の原敬……………(六三九)  
 堅牢で大膽な若尾逸平……………(六三二)  
 兵式體操の開祖森有禮……………(六三九)  
 橋本雅邦と「瀟湘八景」……………(六三六)  
 大徳福田行誠師……………(六四〇)



快傑頭山満翁……………(六四二)  
 青年よ、志大なれ……………(六四九)  
 佐藤進の活人刀……………(六五三)  
 宵越しの仕事は大嫌ひの兒玉大將……………(六五七)  
 銀行界の偉傑中上川彦次郎……………(六六〇)  
 護法の神兒鳥惟謙……………(六六七)  
 福島大將西比利亞愛馬の訣別……………(六七〇)  
 伊東祐亨と丁汝昌……………(六七三)  
 己を鞭つ新島襄……………(六七六)  
 才氣煥發の梅謙次郎博士……………(六七九)  
 品川彌二郎の偽作……………(六八二)  
 團十郎晴れの舞臺……………(六八六)  
 穂積八束博士の沈黙……………(六八八)  
 流石は川上操六……………(六八九)  
 東郷平八郎決死の一弾……………(六九一)

民法の大恩人穂積博士……………(六九二)  
 日本のルソオ中江兆民……………(七〇〇)  
 大隈參議の熱辯……………(七〇三)  
 豪僧南天棒の眞情……………(七〇八)  
 小節に拘泥せざる末松謙澄……………(七一三)  
 一言一句苟もせざる山縣有朋……………(七二五)  
 正岡子規の奇蹟的精神……………(七二七)  
 幾何學では世界の第一人者……………(七三八)  
 井上毅の大文章……………(七四〇)  
 村井吉兵衛の城明渡し……………(七四三)  
 尾崎紅葉の苦心……………(七四四)  
 貞烈無比の税所敦子……………(七五五)  
 野津道貫の武士道……………(七五八)  
 川村純義の誠忠の祈願……………(七五九)  
 樺山大將の沈勇……………(七六一)

26  
30  
30  
28  
84

鐵砲の神、村田經芳……………(七四四)  
 樞一の義俠傳三郎を發奮せしむ……………(七五五)  
 廣瀬中佐と財部彪……………(七四三)  
 常陸山心張棒の咎……………(七四九)  
 素童禪師の大英斷……………(七五一)  
 芳賀先生の片影……………(七五三)  
 哈爾濱原頭の兩志士……………(七五八)  
 一日一里の桂公……………(七六〇)  
 豪爽山本權兵衛……………(七六一)  
 ポテト王牛島謹爾……………(七六六)  
 一世の師表杉浦重剛……………(七六七)  
 英雄の心境誰か知る……………(七七〇)  
 女傑奥村五百子……………(七七三)  
 所信を貫く濱尾新……………(七七七)  
 硬骨の争臣田中光顯伯……………(七八九)

出世の縁結……………(七六一)  
 報恩の念深き寺内正毅……………(七六五)  
 義人田中正造翁……………(七六七)  
 明治の大久保彦左三浦觀樹……………(七九〇)  
 田尻北雷子爵の田牛……………(七九五)  
 大倉喜八郎とライト……………(七九八)  
 夏目漱石の風變りな親切……………(七九九)  
 國木田獨歩の信念……………(八〇二)  
 筆まめ口まめ足まめの井上圓了……………(八〇三)  
 藝界の巨人雲右衛門……………(八〇八)  
 棧橋事件と鳩山和夫……………(八〇九)  
 三越の店員を驚かした乃木夫人……………(八一三)  
 乃木將軍……………(八一四)

84





後藤象次郎 伯

後藤象次郎の膽ッ玉

人が蓬萊舎を經營して居る時分に、金が無くて差押へを食ふなどと言ふ騒ぎがあつた。其の時の金の工面にこれが又面白い、其の方にはあまり得意でありさうにもない板垣退助さんの所へ行つて、

『どうも今度はおれも困つた。何とか一つ金策をして貰ひたい』といふ話をした。

いやさう言ふ事であれば何とか私も心配しなければならぬと言ふので板垣さんが八方奔走をして、やつと金が出来た。そこで後藤の所へ行つて、金が出来たら喜ばしてやらうと思つて行つてみると家に居ない。何處に居るかと言へば新橋の待合に居るといふ話。板垣伯も少々腹が立つた。その待合に乗着けて行つて座

敷へ通るや否や、

『人に散々金の奔走をさせて、自分は待合に行つて遊んで居るといふのは實に怪しからんぢやないか』

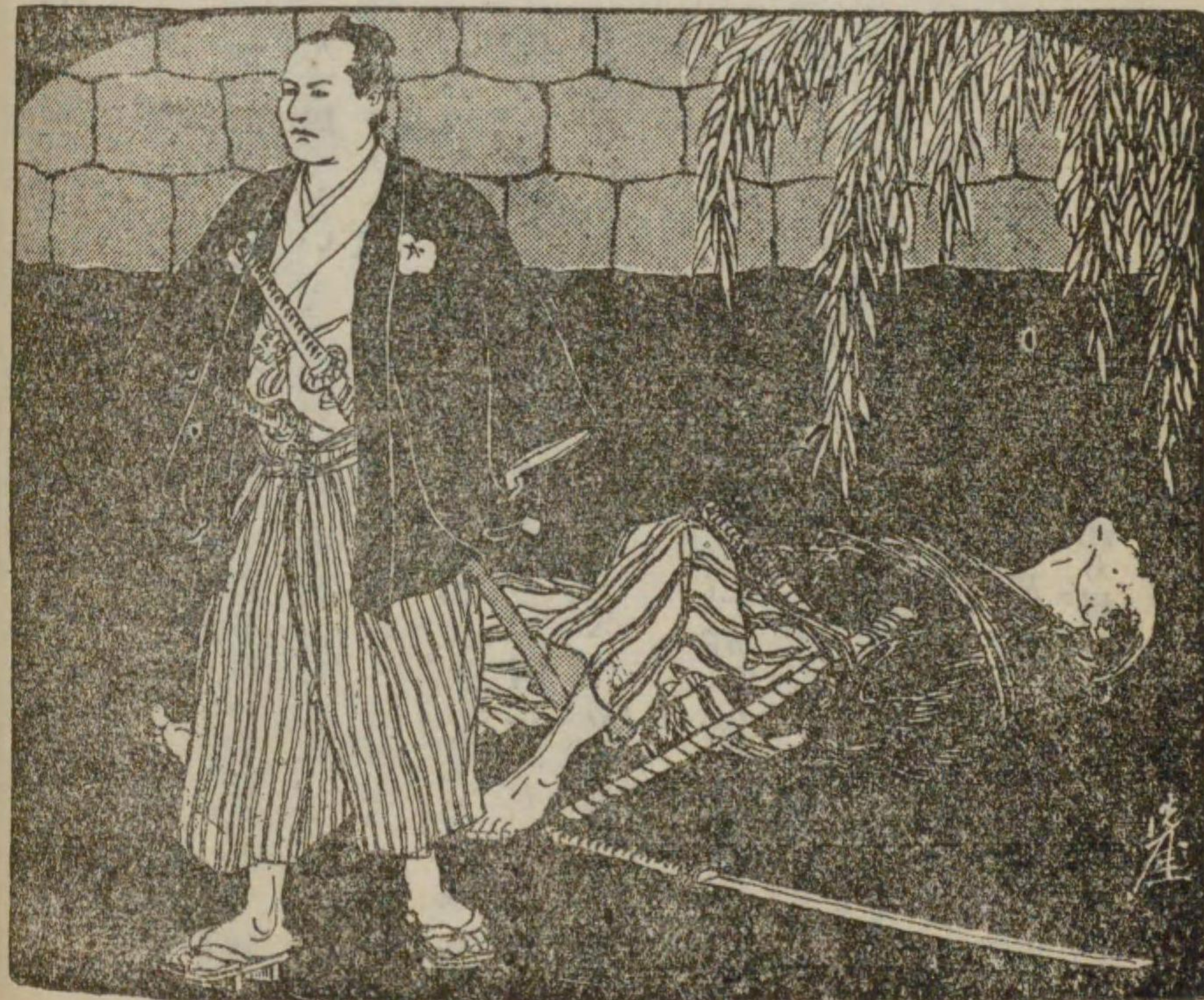
と言つて文句を言つた。さうすると後藤は、

『いやさうではない。どうも金の工面位のことです。佐の豪傑が二人も揃つて齷齪したと言はれちやみつともないから、それでわしはこゝで殊更遊んで居るんだ』

と答へた。かう言ふやうな調子合の人で、奇智縦横とでも言ふか、また膽略家とでも言ふか、随分膽の太い敏捷い方の人であつたやうに思ふ。この後藤象次郎がまだ維新の前、膽ッ玉は後年になつても自慢げに見えた人であるが、其の人が或夜高輪の、後には自分の屋敷になつて居る彼處の所を通り掛かると何者か知らぬが、突然抜刀で斬つて掛かつた。すると後藤はそれを



即座に取押へて、グル／＼ふんじばつて了つた。そして再び歩き出した。所が後藤がそこへ來掛かつた時には、大きな聲を出して詩を吟じてゐたのださうだが、今拔身で斬つて掛かれた其の後で、再び先の詩を吟じて續けて行かうとしたが、道がの後藤も何と聲を張上げてやらうとしても、どうしても先のやうな吟聲が出ない。其の事を後にもよく話されたやうであるが、どうしても先のやうな聲が出なかつた。さう言ふと後藤象次郎のやうな膽ツ玉自慢の人でも、一度さう言ふやうな事に出會はせると、直ぐ立直る事が出来なくて、先のやうな聲が出なかつたか、と誰もが想像するが、さうではないので、大抵な人であつたならば、そこで詩を吟じて續けることが出来ても、其の聲が前のはと變つて居るかどうかと言ふ事は迎も氣のつくものではない。それを知つて居るだけ、後藤さんはやはり膽略家であつたと私は思ふ。この話は多少味はつて見ないと味が出ないかと思ふのである。丁度この場所が、後の後藤の屋敷の跡であつて、其の事あつて以來、折々その場所



大臣になつた時に親任式があつて御前へ出た。辭命を頂戴して後へ退る拍子に、あの酢でも弱弱でも喰へないやうな人が仰向さまに引繰返つた。すると 陛下が『あれは岩村の弟だつたな』

へ行つて、追憶に此ける事もあつたさうであるが、それから維新後、参議にもなると言ふやうなことで、出世をせられたので記念地の意味であの屋敷を買つて、晩年まで其處に住つて居られた譯である。その後藤が一番困つた話としてよく語られた話がある。それは 明治大帝の時、さる年の議會で 陛下が玉座をお立ちになつたので、参列諸員も一同退場しかかつた。其の時に農商務大臣たる後藤は、總理大臣も立つたから、自分も起たうとして、立つはずみに放屁した。もう 陛下は向ふへ闔を排して入つてお終ひになつたのではあるが、夫でもまだお在でになりはしないかと言ふ懸念もあつてハツと思つた。それから靴の踵にウンと力を入れて、踵を捻ぢるやうにして音をさせながら退場した。家へ歸つて來て服を脱いでみると、大禮服の上まで汗が通つてゐたが、これ程困つたことはなかつたと言つて、よく困つた話の時に語られた。陛下の前へ出ると、餘程の豪の者でも固くなつたものと見えて、土佐の林有造が後藤よりずつと後に農商務

と仰せられた。さう言ふお聲がしたから、尙恐縮したと言ふ話を聞いた。それから尾崎行雄が文部大臣で、帝國大學の卒業式に、陛下が行幸になつた其の御前で式辭を讀んだ。恐らく尾崎君としては御前でものを讀む事は其の時が初めてであつたのであらうが、あの達辯な人が、支へるだけ支へて、甚く聴苦しいものであつたさうである。又西郷隆盛が、孝明天皇に初めて拜謁する時に、隆盛は身分が卑いから、正式に拜謁することは出来ない。それで 陛下がお廊下をお通りになる時に、それとなく拜謁する。無論、これが西郷隆盛なんて言ふことを申し上げる譯ではないが、豫めお目に觸れる者が、吉之助であると言ふことは、陛下は御存じの譯で、お庭に荒狐を敷き、其の上に隆盛が長まつて居ると、お廊下をお通りになりながら、

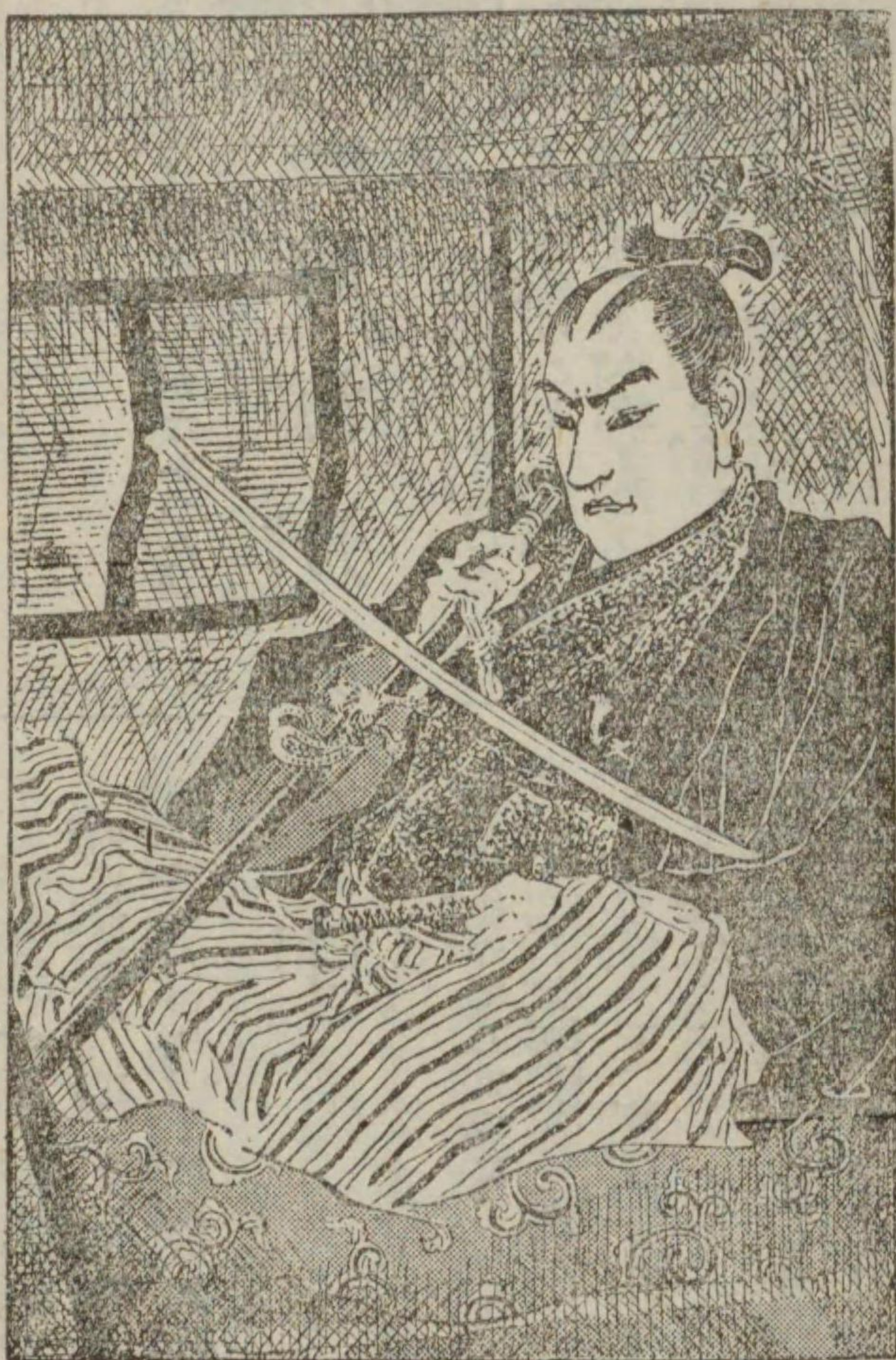


陛下が御覽になり、隆盛の方ではそれを拜むといふ段取になつてゐた。さて愈々陛下がそこを御通御になる時に、流石の隆盛も顫へ上つた。別にものを言ふ譯ではないが、思はず身體がブル／＼と顫へたと言ふ。そんな風で、どんな偉い人でも陛下の前へ出ると餘程恐縮するものと見える。それで後藤のやうな人でも、陛下がお立ちになつた後とは思ひながら、恐れ入つたものらしく想像される。(三田村高魚)

後藤象次郎伯は土佐藩の俊才吉田東洋の甥に當る。文久二年四月八日、東洋が、武市半平太の率ゐる勤王黨同志の爲に暗殺されて以來、近習目附の職を辭して、元治元年、航海術研究の爲、江戸に遊學した。その頃の土州藩は、佐幕・勤王兩派の軋轢が激しかつたので、伯も、東洋の姻戚である關係上、身柄をつけねらはれてゐた。だが、豪膽な伯は、一向そんなことに頓着しなかつた。

以黨で、人殺しの名人といはれた男である。もし伯が一寸でも動くか、狼狽して駕籠から躍出すかすれば、パッサリやられると言ふ危機一髪の處だつた。

大政奉還の建白から民選議院設立の提唱さては大同團結の運動に至る迄伯の一生は「男らしい」といふ一語に盡きてゐる。日清戦争がすんだ翌々年、即ち明治三十年八月四日朝、伯は、六十年の傳奇的生涯を封じた。その臨終も亦、いかにも日頃の伯らしい。心臟病であつたが、重態に陥つても、苦しさを訴へず、唸き聲



をあげず、慨然として、笑ひ興じてゐた。『今度、日本のものとなつた臺灣は、わしの活躍舞臺だが、天命と言へ、こゝで死ぬのは、どうも口惜しい』

これだけが、残念だつたと見える。臨終の前夜だつた、ふと枕をもたげて、附添の醫師の顔を見た。『お苦しいございませうか』 『いや、別段、苦しくはない。少し唸つてもよろしいか』

『どうぞ、御遠慮なく……』 『しかし、天下の後藤ともあらうものが、死際に、呻吟したとあつては、面目ない。唸るなら、いつそ、詩

『一人歩きは危い、氣をつけるがよい』 かう注意されても、格別氣に止めなかつた。その年の秋口、伯は辻駕籠につて、八ツ山下にさしかゝつた。夜が更けて、人通りはパツタリ跡絶えてゐる。丁度、此の時、 『待て』 切裂くやうに叫んで、駕籠の前に立塞がつた覆面の刺客、駕丁は、ドキリとして逃げ出した。 『えゝいッ』 駕籠の垂を突き通して、電の如く、白刃が突き入つた。 ところが不思議、更に手答へがない。 刺客は、空駕籠と思ひこんで、そのまま、疾風の如く、闇の中に姿をくらました。白刃は、駕籠の中に安坐してゐた伯の胸元をかすめ、着て居た羽織の紐を切つたのだが、泰然として、恰も人なきが如くに装束を束ねた。それが爲、危いところを助かつた。 伯を刺つたのは、同黨の中でも、名打ての刺客岡田



でも喰つてやらうか』  
さう言ひ乍ら、吟じ出した。  
『漢皇、色を重んじ、傾國を思ふ、御宇多年、求むれども得ず……』  
白樂天の長恨歌である。  
中頃迄吟じ終つたが、後ば聲がつまかなかつた。



勝海舟 爵伯 安勝 芳

### 勝海舟の面目

勝海舟が赤坂にゐた時分のこと、蘭書に基いて、小銃を造つたりまた唐津などの諸藩から頼まれて野戦砲を造つたりしたが、それには鍛冶工を雇つたり、武州川口の鑄物師を指圖して造らせたのであるが、鑄物師どもが兎角狡猾で、鑄銅の分量をごまかしたり、或は填銅を用ひたりして巧みに人目を瞞まして、しやうがなかつたが、眼の光つてゐる海舟は、そんな事では欺かれな

枕頭に並み居る人々は、暗然として涙を呑んだ。  
短か夜は、早白々とあけそめて、伯の容態は、刻々と險悪となる。長恨歌の末句には、「天長く、地久しきも時あつて盡く、此の恨綿々絶ゆる期なし」とある。伯の最後が、正にそれ。快男子遂に起たず、永遠の眠に入つたのは、丁度朝の八時であつた。(望月紫峰)

直ぐ看破つてしまつた。  
それには鑄物師達も閉口してゐたが、一日、鑄物師ども打ち揃つて、神酒料と稱し、五百兩の包をもつてやつて來た。  
『鑄砲が無事に納まる事をお祝ひしまして、謹んでこれを先生に献上いたします』  
と言つて、差出した。眞銅などを見て見ぬふりをして通してくれと言ふ臭い金なのだ。  
すると、海舟烈火の如く怒つて、五百兩の金を呷き

つけ、  
『お前等には、もう仕事はさせないぞ』  
と、仕事をすつかり取上げてしまつた。鑄物師達は驚いていろ／＼謝まつたが、海舟は肯き入れない。遂に人を仲に入れて、やつと仕事だけは續けさせて貰ふ事になつたが、海舟は鑄物師達に對つて、  
『お前達は、こんな金を持つて來るところで、それだけ鑄銅をまし、力めて精巧なものを造つて、わしの名前を辱かじめないやうにしてくれ』  
と、諄々として誠しめたといふ。(堀内新泉)

『尊公は、參議の榮職に就いて居る御身分である、卑しい遊藝師匠のもとへ出入なさると承るが、それでは、やめて欲しい』  
三條太政大臣が、勝海舟に、斯う忠告した。  
ところが、海舟は、洒然として居る。  
『あれは、拙者の友人である、出入して相成らぬと申されても、友人である以上、今更絶交もいたしか

ねる』  
『それは意外な御話だ、左様なことではござるまい』  
『いや、拙者には、遊藝師匠どころか、若い時分から友人には、博徒もあります、幫間もあります、茶屋の女中もあります、いろ／＼あります、さういふ者につき合ひをするのも、つまりは、政治の要訣と心得て居ります』  
『それは又、どういふ次第か』  
『家康公が、駿府に退隠した際には、附近の農家とか商家とかの年寄をあつめては、碁を打つてござつた。何も、公が百姓を相手にせずとも、碁打は幾らもあるが、それでは面白くない、碁をやつてゐる中に、自然無遠慮になる、地金が出る、世間話が出る、出放題のことを言つてゐる中に、民を治める方策が立つといふもので、拙者も及ばず乍ら、それを真似て居ります。下情に通ずることは、政治家の第一要義、何ならば、相公にも御引合はせ致しませうかい』  
『ああ、それでよく分つた』